女子文壇

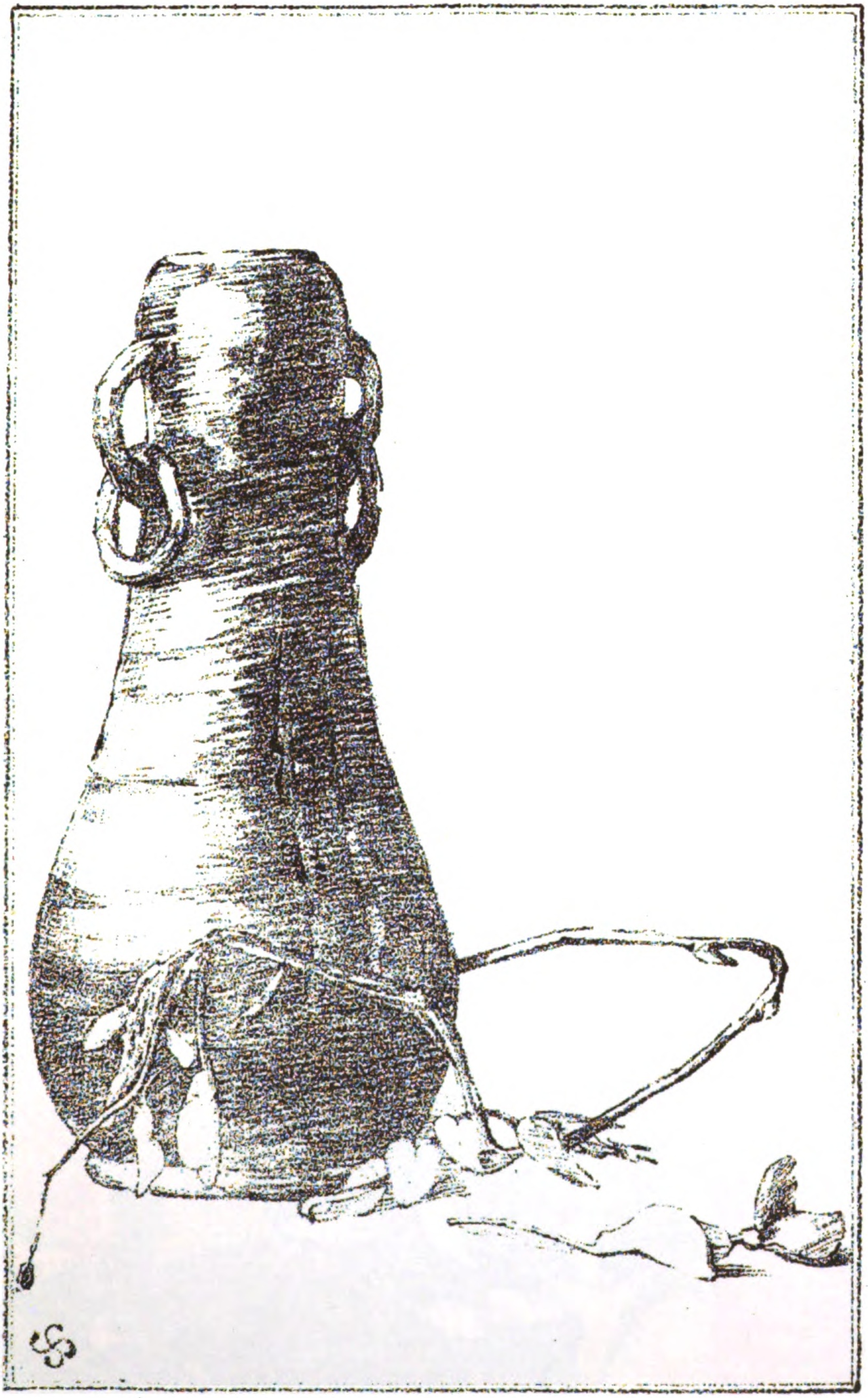
第四年第五號

四月一日發行

明治四十一年



花籠



重松せい子筆



四月一日より

一、第十五回新柄陳列會

一懸賞課題模樣圖案陳列
一懸賞寫眞優等印畫陳列
一新流行歐米雜貨見本陳列
一新古御婚儀用調度品陳列

一、寄せ裂れ見切り反物大賣出し

右新柄會は我國染織業の改良發達を圖るを目的とし今回全國機業家の賛成を得て是迄に類なく一層盛大に開催致し候ものに有之尚は寄せ裂れ類は假營業場新築紀念の爲め特別澤山に準備致置候間實業奬勵の爲めと思召され新陳列場の御遊覧を兼ね賑々敷御來觀御高評を給はり候樣偏に奉願上候

東京日本橋駿河町

三越呉服店

女子文壇第四年

四月一日發行

每號　皇太子妃殿下御尊覽の榮を賜ふ

本欄

▲口繪▼





第五號目次



辻本寫眞製版所三色版

八重櫻

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ど皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的（賣藥）のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる斬新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割増し

新輸入美容料
肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女の間に最新流行の發明藥にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏妙なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓八拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ケ月間滞りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ふれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滞りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時擬々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭
根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓參拾錢右金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

發表期を忘るゝ勿れ

女子文壇 第一臨時增刊

（即四年第六號）

內容

▲小説　▲論文　▲新體詩　▲俳句

▲お伽噺　▲日記文　▲短文　▲繪畫

▲美文　▲書簡文　▲和歌

○附錄には當代名家の新作數編を添ふ

新案懸賞傑作

文壇の花

▲四月十五日發行

紙數二百五十頁口繪挿畫澤山挿入

定價金貳拾錢　郵税貳錢

發行所　東京市京橋區大鋸町　女子文壇社
（振替口座壹七貳九番）

特約賣捌所　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂其他取次販賣所は全國到る處雜誌捌所

戊申文壇の呼物

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

空前無比の大喝采を以て歡迎せられたる少女雜誌

少女の友

三月十日發行 第二號 毎月一回十日發行一冊 金拾錢 郵税一錢郵税共六冊六十錢十二冊一圓十六錢

村井弦齋先生の少女（記者）

▲村井先生の御病氣
▲米子さんと忠二さん
▲溫室の花
▲大きな鳥小屋
▲輪投げとフートボール
▲村井先生のお宅
▲運動場の遊戲
▲桃林と野菜畑
▲廿五疊の大廣間
▲四人のお見送り

▲是れ記者が親しく弦齋氏宅を訪問したる大文字

お伽噺

◎光ちやんの御料理……高信峽水
◎盲者あそび……竹久たまき
◎牛吉のお歸り……小野みち子
◎御相談……水野うら子
◎少年書家……水野うら子

美文小說物語

◎白桃緋桃……長谷部湘雨
◎學校友だち……瀧澤素水
◎山家の爺……小柳錦柳
◎鷲子と武坊（ゑとき）……ゆめじ作
◎トランプ國の女王……須磨子

▲大景品當籤發表

▲懸賞繪探し當選披露

口繪

◎梨本宮女王殿下（光澤寫眞）
◎九條公爵家令孃（光澤寫眞）
◎人形の病氣（原色版）
◎雛人形の陳列
◎西洋の人形
◎體操の時間とお晝飯の時間
◎火食鳥

▲渡り鳥……理學博士 佐々木忠次郎
▲毎日食べる砂糖……樋口二葉
▲世界最大の蜘蛛……波多野烏峰
▲姉さんの百物語……目黑小町
▲ささぢ少女……渡邊白水
▲ハイカラ肩掛編物……磯村春子
▲日本好きの英國少女……石塚月亭
▲わらひばなし
▲應募作文、和歌、俳句
▲記者讀者談話會、通信

東京市南紺屋町（電話新橋八七四番）實業之日本社（郵便振替貯金口御參貳六番）賣捌全國各地書店

産科婦人科専門醫學士北畠孝夫先生閲

最近 婦人病心得

子宮病自宅療法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて。素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて、生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である◉著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。(婦人病者の心得)と題し左の各項に分ちて丁寧親切に詳說せり◉病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ。當分の內無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ。

目次

發行所 東京築地新榮町四ノ一(電話新橋三千六百一) 笹岡省三

◉精力を增し快美を最大ならしむ

This remed is wonde rfully efficacious for imp otence deficiency of semen, weakness of spermato zoid, nocturnal eission, premature emission, non-development. weoknesse of nerve, and non-pre gnancy.

一時生殖器病界に一新曙光を放てる彼のカッセン氏のエレクトール機械療法にせよブロンセカル氏の臓器療法或はポール氏及びベーベス氏等の神經組織注射療法なれ科學的研究の進歩せる今日に於ては既に陳腐の方法に屬し其治效なきは旭醫學士に依く公表せられたる如く現代未だ其長藥なきは最も遺憾とする處にして當製藥所が此にガーデン Garden を發行したるも亦故なきにあらざるなり：：ガーデン Garden は當製藥所主が曩に大學卒業後專ら生殖病學の研究に任じ帝國光耀は勿論歐米最新學理殊に博士ゲルハルド氏シグムント氏ツアイスル氏等の研究に基き或は學理に或は實驗に幾多の研究を積み發見せる新藥にして其絕大なる靈效は高田醫學士の査定報告或は吉原病院副院長赤倉大先生の實驗報告其他服用者の禮狀殊に歐米に輸出せられ名譽の高評を博しつゝあるに徵し明なるを以て普通賣藥的奇言を臚列せずガーデンの主効は

男女生殖器新藥發見

手淫房事過度の害より起る勃起力減衰陰萎萎縮腎虛夢精遺精

早漏精液缺乏精蟲缺乏精蟲衰弱短少者神經衰弱快美減少不姙不姙理解力決斷心缺乏

記憶力減少考衰無力冷症身體虛弱等に用ひ輕きは一劑乃至二劑重きも三劑乃至五劑にて根治の目的を達せしむ又本劑は劇烈なる强壯藥なれば虛弱家は勿論無病の者と雖ども半劑を服すれば精神身體生殖器を强壯となして淫慾を著しく發動せしめ如何なる場合と雖ども身體精神生殖器を衰弱せしむる事なし又本劑には醫學士江口遞雨著

最近 生殖病論

を無代にて附し服用患者に其病理の如何を告げ絕體依治を期せしむ本書は最近學理により著述す○價一劑二圓八十錢二劑五圓五十錢三劑八圓五劑十三圓送料內八錢清韓台灣卅錢外國卌四錢

日本發行所 東京向島小梅町百八十七番地 松尾製藥所販賣部

清國發行所 清國寧波府江北岸 松尾製藥所販賣部

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

秀才文藝雑誌

新文林

第壹號●四月一日發行　毎月一回一日發行　定期増刊一年四回

定價 壹冊拾錢 郵税壹錢◎六冊郵税共前金六拾錢◎十二冊郵税共前金壹圓◎見本郵劵拾錢送

發行所 東京神田三河町一の十九（振替口座第三五一八番）博報堂　賣捌全國各書籍店

口繪 艶麗花の如き 才媛 誰？誰？ 一人は東京女醫學校出身 一人は京都高等女學校生 及 秀才文士 五名並に 彩色畫 等 數葉 あり

記事には 島村抱月氏の 新卒業者を始め 五十嵐白蓮氏の 男女の美情戀愛の極致を描盡したる 大々的自然派小説 お芳 あり 一讀魂魄飛んで天外に到るの想あらしむ其他新派歌人渡邊光風氏等の摸範的短歌蘆谷蘆村氏の新體詩話石丸紫水氏の春の清水寺峯村白影氏の手帳の中より等其最たるものにして 秀才 才媛 文藝 には評論文叙事文抒情文寫生文日記文小品文消息文小説新體詩短歌俳句新川柳漢詩雲中語交詢等 貳千餘章 掲載

懸賞大募集 論文 肉欲は罪惡なりや 其他 小説 其外一切の文章 詩歌俳川柳等 賞金五圓 より參拾錢迄

代々家傳の妙藥

經通丸

月やく藥

調劑元

東京市丸の内

本劑は代々家傳の妙藥にて如何なる難澁の月經滯りも胃腸子宮等を痛めず安々と通じ輕症なるは其夜にあること請合也他藥を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其價値を認めよ定價廿五錢五十錢一圓特製二圓但小包送を望まるゝ方は八錢を要す

有樂町二ノ二

江戸屋

白色術

どうすれば色白くなるか

色を白くし・にきび・そばかす・顔のあれ・おしろいやけ・しみ・しわ・あぶら・日やけを治し・きめこまかにつやを出す



白色術を二錢封入申込の方に教示す……

東京小石川區柳町 森義郎

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

第五回内國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

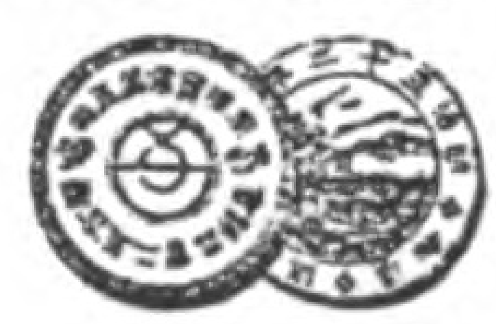
壽美禮おしろい

登録商標

壽美禮おしろい

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「董れしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

五二品評會
功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮れしろい

ヴワイオレツト水製

れり製 定價 大壜二十錢 小壜十二錢

水製 定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

錫栓附乳白硝子壜入

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

綠、藍、紅彩蝶香ひ 鑵詰 八錢　別製鑵詰 五拾錢　大袋 二錢 小袋 一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美しくなす◎壽美禮あらひ粉は御髪洗ひに御用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜るし水又は温湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登録商標
西洋色白くなるあらひ劑
SU IRE
WASHLNG IOWDER
壽美禮あらい粉



製造本舗 東京東兩國元町（兩國橋際） 壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

小笠原女禮式作法（其三）

（寫眞研究會主事 坪川辰雄氏寄）



物品を運ぶの姿



文臺を捧ぐるの姿



上級者と對話の姿

誌友寫眞（七）



（廣島）信月女史（右）妹芳子

（北海道）齋藤つゝ子



（大阪）山村靜子（左）藤田梅子





（安藝）播磨多賀代子（右）伊藤文子



（福島）桑原とく子（左）棚木きん子

續々お寫眞の寄送を願たい、掲載の上お返し申ます

（此豫告ヲ見落ス勿レ）

◀秀才文壇春季增刊▶

第八卷第九號

青年文士之檜舞臺



四月廿日發行

紙數二百五十頁　本號ニ限リ正價金二十錢　郵稅二錢

卷頭執筆大家

○吉江孤雁氏○柳川春葉氏○小栗風葉氏○岡田八千代氏○小川未明氏○中村星湖氏○西村醉夢氏○眞山青果氏○德田秋聲氏○高濱虛子氏○（詳細目次は次號）

（一）短篇小說……德田秋聲選

美文……小川未明選

寫生文……高濱虛子選

評論文……中島孤島選

（二）新體詩……馬場孤蝶選

十行日記……小川未明選

（三）五行文……矢部白雨選

和歌……佐々木信綱選

（四）全俳句……尾上柴舟選

俳句……高濱虛子選

○スケッチ……中村不折選

▲表紙……（石版密刷）……中村不折氏筆

（一）一等賞……銀側懷中時計　一箇

二等賞……舶來中折帽子　一箇

三等賞……上等小倉袴地　一反

（二）○甲賞金三圓　○乙賞金二圓

○丙賞金一圓五十錢（以上正金）

（三）○甲賞金一圓五十錢

○乙賞金一圓　○丙賞金五十錢（以上圖書切符）

（四）天（各選者の落書一册）地（美文眞材一册）人（本誌三册切符）

スケッチ　天（萬年筆一本）地（スケッチブック）人（全上）

直接購讀申込の諸君へ注意

本增刊は一冊二十錢に付き定期分の倍即ち二冊と仝樣の價になりますから從來前金御拂込の方にて假令は第四號より第九號迄の前金へは此增刊を除き第十號を送付致し升、第十號迄の方は第九號にて前金切れとなり升、然し「新綠號」共として其後の御注文には無論差支なき事、尚從前通りの增刊は一冊十五錢なりし故、其積りて御拂込みの分は尚五錢丈けは不足を告ぐる次第なり、以上の各項御調べの上何卒不足額は大至急御拂込願度候さもなくば乍遺憾送本を停止する場合も有之べく、此際本堂若しくは各地賣捌店へ前以て御申込なき時は、昨年の「黃菊白菊」の如く品切となる怖れ有之可く候

（文光堂販賣部）

誌友寫眞（八）



（群馬）大沼染子



（基隆）横井鋭子



（津市）丹波てん子
越村文枝子



（靜岡）成瀬時子



（東京）織田澄子

續々御寫眞の寄送を願ます、
掲出の上お返し申ます

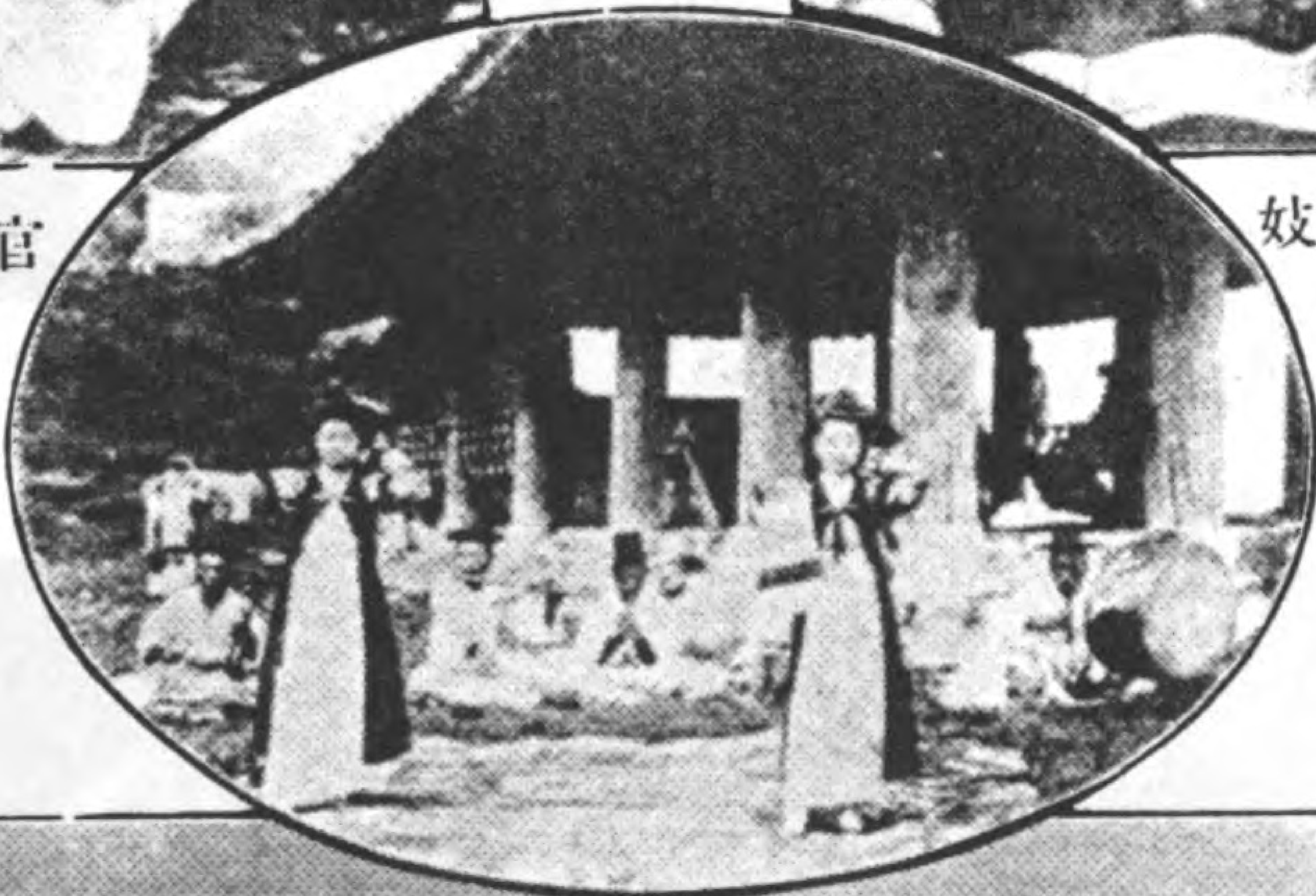
韓國風光



官妓



官妓



官妓の舞



平壤理事廳通り　（牧田志津子寄）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

大日本淑女學會

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ヶ年で會費も低廉であります

▲會員には講義錄の外『姫百合』と云ふ美くしい體裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

◉詳しい規則書は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

會員募集

講義錄は何時にても一號より送る

本會の講義錄

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす





好機逸す可らず

こんな安い本は天下になし

●女子の作文速成に一等よい本です●

第二 懸賞文集

好評

全一册上等紙五百頁　洋裝美本

正價金三拾五錢の處、滿三年の紀念を祝する爲め

▲空前無比 特別廉價金貳拾錢 外に郵税六錢

殘本僅少、增刷せず、賣切れぬ内に早く購求あれ

●諸學校の賞與品には最も適當なり●

東京市京橋區大鋸町十二番地　女子文壇社出版　（振替貯金口座第壹七貳九番）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

新奇發明

秘密奇法

全壹冊正價郵稅共貳拾貳錢△郵券代用は廿七錢封送の事

（目錄大要）千年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●百日眠らず休養へざる法●寢入たる者に答へしむる法●寢入たる男女心中を知る法●醜婆を二八の娘に變ずる法●妖怪變化を見顯はす神術●人体不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見顯はす神術●女に惚らるゝ藥法●思ふ女をよびかす藥法●堅き女の氣を狂はす秘法●陰莖を長大にする藥法●女を部屋にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染めし女を手に入れる法●待人來たる神術●一生戀中替らぬ秘術●恪氣深き女を治する藥法●[illegible]中の秘藥●即座に男精を増す法●避食の仙術●神速に陰精を強る法●即座陰身術●人を眠らす即ち催眠術●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を發せしむる法●記憶力を増進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●姙婦觀破術●黑字夜光の奇術●老人終身嚴取の奇術●腋臭を治する法●寶丹の談方●駿痛速治法●療癬藥の製方●張滿を治する法●黄疸を治する法●皺肌を直す秘法●癬病の治法●月經の不順を治す法●疝氣の妙劑●痛齒を治する方●陰門の臭き治法●陰部の虱を去る法●ニキビを去る法●頭髮を長くする法●毛生藥の最新藥●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新藥●百日咳の妙法●肺病必治の新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●火傷即治の秘法●シヤクリ即治法●聲を能くする新術●肉体白色の新劑●白毛豫防の新法●くた〳〵の妙法●寢小便を治する秘方●面瘡を治する法●耳だれを治する法●酒毒を治する妙法●疣ほくろを取る法●あざを拔く新法●乳の出る妙藥●陰部の諸痔治する法●虎列拉病豫治簡易法●感冒治療簡方●梅毒豫防の奇法●想ふ時目を覺す法●年齡により房事の度數●病氣前知の奇法●男女全躰の色を白くし且つ艷美ならしむる法同じく心得△着金即刻送本す

專賣元 東京市下谷區西黑門町二拾番地 東雲堂書店

有効無害 奏効確證

やせる藥

壹劑分藥價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

本劑は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ひて害なく身體美容となり程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき奇効を知られよ

專賣元 東京市神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

陰萎特効新劑（獨逸新輸入藥）

內服 ヨヒンビン

拾錠入壹劑藥價送料共壹圓九十錢郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授スピーゲル氏の發見に係る男女生殖機不能即ち陰萎病（陽物無力）腦脊髓神經衰弱、遺精、夢精、早漏、過房、元氣衰弱、老衰無力生殖器弱、手淫に起因する諸症早老者に天下無比可驚奇効ある新發見藥也精力を增進し生殖器を強健にし勃興せしめ人生の最大快樂を得ん、望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に電光の如し世にありふれたる賣藥と同一視することなかれ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白なり

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房（電話下谷五四六番）

世界無比 最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日目に必ず美麗に除去すること保險附

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へは山の如き全治者の感謝状及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部ノ模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送付すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢五劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす）着金即刻小包郵送

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房（電話下谷五四六番）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇

一冊大判百三十頁書入

低廉。無敵。每號大好評

▲發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 女子文壇社（振替口座第壹七貳九番）

▲女子文壇は何處の雜誌店でも賣つて居ます

●第四卷第壹號 目次　一月一日發兌 百六十頁 定價拾貳錢

口繪 泰西名畫 愛吟 光澤紙原色密刷 寫眞 此分に限り 閑院宮殿下 家庭誌友肖像外 繪手本

○新年の辭……記者

○名流婦人の處女時代▲三輪田眞佐子▲跡見花蹊▲鳩山春子▲佐藤靜子▲三宅花圃▲大塚楠緒子▲與謝野晶子▲藤井環子▲羽仁もと子▲榊原蕉陰▲鷲山彌生諸女史の談片

○英文▲新年▲指太郎（其二）……河井道子

○懸賞新作詩文第一回披露……滿紙に溢る

〔附錄〕

○死後までも……小栗風葉

○女裝……德田秋聲

○角……岡田八千代

○非牧者……佐野天聲

○乘合馬車……窪田空穗

（各編とも挿畫入）

●第四卷第二號 目次　二月壹日發兌 定價金拾錢 送料壹錢

口繪 泰西名畫 花苑 光澤紙原色密刷 寫眞 小笠原女禮式作法其他 誌友肖像外 繪手本數葉

○自分の價値……記者

○名流婦人の處女時代▲幸田延子▲嘉悅孝子女史の談片

○遠人……橫瀨夜雨

○冬の旅……中村枯林

○彼如何にせし（小說）……文學士 齋藤弔花

○新進作家一口評……記者

○英文▲冬▲金言▲六羽の白鳥……河井道子

○懸賞新作詩文第二回披露……滿紙に溢る

●第四卷第三號 『春日影』 定期增刊　二月十五日增刊 定價金拾錢送料壹錢

右は發行忽ち本社は賣切れ申候

●第四卷第四號 目次　三月一日發兌 定價金拾錢送料壹錢

口繪 パンジー 花束 光澤紙原色密刷 寫眞 光榮ある閨秀歌人と誌友肖像外 繪手本

○沒書嘆……記者

○雪の歸路（小說）……江見水蔭

○書簡文のはなし……文學士 武島羽衣

○名流婦人の處女時代▲棚橋絢子▲瀨沼夏葉▲岡田八千代女史の談片

○愁ひの曲（詩）……北原白秋

○文學雜誌一口評……記者

○英文▲神の園▲六羽の白鳥▲公德……河井道子

○懸賞新作詩文第四回披露……滿紙溢る

取捌注文に應じます、最寄雜誌店になくば發行所へ御申越し願ます

廣告有効

女子文壇は發行部數に比ぶれば。廣告料は天下無二の低廉です。每號同一廣告の掲載しあるを見ても有効疑なし。

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

坐ながら手數なく安心買入の最便法



買物安全輕便法

今般本社にては愛讀諸孃の御便利を計り東京市内に於て發賣する**書籍、雜誌、文房具、化粧品、西洋小間物、玩具**其他有らゆる百般の物品を手數料申受けず總て**定價の五分引**にて御用達致しますから遠慮なく多少に拘らず左記の注文心得により御申込を願ます

申込心得

○注文

▲必ず▲品名▲大小▲形狀▲品質▲定價▲使用向を始め販賣又は製造元の番地名稱及び自分の住所姓名等を明細に申越下さい

▲送金と同時に振替貯金用紙裏面通信文記載欄に注文の用向を明細に記載あれば別に手紙又はハガキにて申越すには及びません

○送金

▲必ず注文と同時に定價の五分引に相當する金額と郵便小包送料又は鐵道運賃とを合せて郵便振替貯金又は爲替金にて本社へ送って下さい

○見計ひ送品

▲賣店の名又は代價等不明のときは品名と大體の豫定金とを合せて御送りあれば便宜見計らひ精選買入れの上御送り致します

○送出

▲堅牢に荷造しまして小包郵便又は鐵道便、普通運送便にて送り屆けます

○問合と宛所

▲買入依托に關する問合せは返信用切手封入又は往復ハガキに限ります

▲申込は總て「女子文壇社買物用達部」宛にして下さい

▲右の外諸學校の校友會誌を始め一般の印刷物及木板、寫眞版の製版をも迅速鮮明に御引受け可申上候

東京市京橋區大鋸町十、十一番地
（郵便振替貯金口座第壹七貳九番）

女子文壇社買物用達部
（電話本局六百七番）

健全なる精神は健全なる頭腦に宿るとは、萬古不動の明言なり

レーベン

レーベンは臭素加里を主劑としたるにあらず故に服用に當りて其量を增減するの要なく且つ心臟を害することなし

レーベンは神經系統に鎭靜作用を呈するが故に神經性諸病に最も適良なるものとす

レーベンは鎭痙藥特に婦人の鎭痙藥としてヒステリー症に對し特異の効を奏す

レーベンは神經性不眠症酒客膽忘に催眠藥となり殊に恐るべき男女情慾の興奮を佳良にするに偉大の効を奏し健胃作用を有する等綿密なる注意を拂ひたる藥物なり

要するにレーベンは腦神經衰弱ヒステリー症に對し最も卓絶なる効力を具備せる良藥にして現世に於て殆ど間然するところなき絶好の藥物たるを斷言するに躊躇せざるなり

從五位勳三等 醫學士 森友道
海軍軍醫少監 從五位 日向次作
腦神經系統專門 醫學士 森 識

東洋唯一時事新報を初め報知新聞、毎日電報、國民新聞、都新聞、日本、東亞新報、東京藥事、其他帝都の大新聞を初め各地の新聞は筆を揃へて社會に紹介せり、曰く、近時社會の狀態一變し精神的智識の競爭時代とはなりぬ、而して腦神經衰弱患者の增加せるは著しき事實にして殊に現時學生の大半は輕微ながらも本病患者なり、醫學士常持爲治氏は本病々理の蘊奧を極め山海大氣の利用に依る自然療法の必要を稱へ終にレーベンなる新藥を創製せられ、斯業界の有力家（中南）の手に依りて社會に發表せらる云々と如何にレーベンが社會の各階級に偉大なる信用を博しつゝあるかを知るべし

若し本劑の內容を知らんと欲せば送料二錢送れ、說明書と養生法とを進上



藥効　腦神經衰弱ヒステリー（腦充血、陰萎、遺精、貧血等の腦病神經衰弱諸症の最良最新發見劑也

藥價	
壹百錠	八十錢
二百錠	一圓五十錢
四百錠	二圓八十鐵
八百錠	五圓

東京芝區愛宕町二丁目十四番地
弘濟藥院藥品部
電話新橋三〇八九番
貯金口座七七七七番

レーベンは醫界空前の成功 近世絶好の腦神經衰弱療法



女子文壇四年五號

明治四十一年四月一日發行

時候て言へば四月

時候て言へば四月、人間て言へば十五六、時候の四月は春風二十四番の花一時に開いて、洵に心持の好い季節ですが、人間の十五六も花の咲くやうにパッと美くしくなるには相違ないけれど、美くしくなると同時に、危くなる。何故危くなるかと言ふに、此年齢は子供から成人に變る時で、身體にも精神にも激烈なる變化があります。宛然世界が異つたやうになります、其身體だけの事に就いて言つても十二三の女兒と十五六の少女の相違と云ふものは、實に驚くべきものがあります、凡ての人間が皆然うですから習慣になつて格別驚く人もありませんけれど、頭の先から、足の爪先まで仔細に觀察すれば、別人のやうになつてゐるのです。身躰の諸機關が此の通り激變すると共に、精神の活力がそれ以上に激變してゐるのです、身體の激變は目にも見えますけれど、精神の變化は目に見えない、目に見える處は家庭でも注意され、人の振見て吾振なほす事も出來ますが、目に見えない精神上の變化は、兩親も知らない、他人も知らない、知らず識らずの間に激變し、發達してゆくので、制裁もなく、自由であるから、此れ位ゐ危險な時はないのです、諸孃も自ら其危險を知つて深く愼まねばなりません。

四月(小)

日曜　五日　十二日　十九日　廿六日

祭日　神武天皇祭　三日

汐干がりの期節

名流婦人の處女時代

十歳で洋行

信綱氏夫人 佐々木雪子

私が初めて入學しましたのは、お茶の水の幼稚園、それから同じ小學校で御座いましたが、間も無く父（記者云、故藤島正健氏）が、佛國の里昂に行きましたので、私も後から母と共にまゐりまして、三年ばかり居りました。出立します時は、まだ十歳ばかりで御座いましたから、外國語は少しも存じませんでしたが、船中に居りますうちに、小供同志のお友達も出來まして彼國に着く頃には、少しは解るやうに成りました。里昂に着きましてからは、直に彼地の小學校に入學りましたが、其頃まだ日本人の婦人て、留つて居りましたのは、私共母子が初めてゞ御座いましたものですから、大變に珍しがられて、衆人から可愛がられましたお友達も澤山に出來ましたし、先生も大層親切にして下さいまして、樣々の立派な場所に招待される度に、何時も私だけは屹度連れて行かれました。

彼地の小學校に居ります頃は、繪を書きますのが好きで、其頃の基督降誕祭に、父への贈りものとして、小さな瀬戸物のペン皿へ、自分で繪を書きまして、それを燒き着けて贈りましたのは、大層よく出來たと申されて褒められました、只今でも其皿だけは紀念として保存致して御座います。

其外、先生の誕生日とか、學校の紀念日とか申します場合には、餘興としまして、此頃日本の學校でも大分流行てまゐりましたやうな、簡單い、無邪氣な劇を、生徒が集つて仕組んで致しますので、何時も大層面白く思ひまして見物致しました。私も一度仲間入りをして演たことが御座いました、それは先妻の子を惡む繼母があつて、或る時、他處へ出かけに、さん〴〵其繼子を虐めて置いて、自分の子のみに立派な着物を着せて、何處か賑かなところに出掛けて了ひましたので、繼子は跡に只一人取殘されて、潛々と泣いて居ります、すると其處へ、何處からか美しい天使が出てまゐりまして、手に持つてゐる棒のやうなもので、地を敲きますと、着物やら、翫具やら、いろ〳〵のものが、若干も出てまゐりますので、繼子は大層喜んで、其處で全然着物を着換へまして、見違へるやうに立派になつて

天使に伴れられて、後から繼母の居る場所へ行くと云ふやうな筋で御座いまして、私も其うちの何かに扮りまして、其場に現たことが御座いました。

父が歸國することに成りました時、先生から、學校を卒業するまで、一人で留つて居つたらば宜しからうと懇々も申されましたが、何うも兩親が手離し得ませんで、遂一處に歸ることに成りました。さうしますると學校の友達が寄合ひまして、私の爲めに送別會を開いて下さいました、それが又大變に面白う御座いまして……送別會と申しましても、お互に小供同志のことですから、何うしたが宜しからうと、いろ〳〵相談しましたものと見えまして、皆各自に自分達が、平常可愛がつて大切にしてゐる人形と、外に花環を一つづゝ學校に持ち寄つて、送別會を開くことになりました。私には其時、日本服を着て出て吳れと申すことで御座いましたが、相惡く日本服の美いのを持つてまゐつて居りませんでしたから、眞の平平着のやうな、袖の長いのを着まして、東京から持つてまゐりました花簪を揷して、大きな日本の人形を抱えて會場にまゐりましたに、衆人が珍しがつて、私の周圍を取繞きまして、大層喜んでくれました。

日本へ歸りましてからは、築地の只今もある女學校が其頃はまだ學校に成つて居りません頃でしたが、其處へまゐりました。

其うちに、父が又富山縣にまゐることに成りまして、暫く私も彼地に行つて居りましたが、千葉縣に轉りましてから、東京が近くなりましたので、父の從弟の家に寄寓しまして、明治女學校に入りました。

英語熱が盛んな時

櫻井女塾主　櫻井ちか子

私が小供の頃は、まだ御維新前で御座いましたから學問するにも、無論學校と云ふものはありませず、昔の寺子屋風のところで習ひましたのです。私は小供の時分から、書物を見るのが好きで、いろ〳〵の草双紙を讀みまして、そして覺えただけのことを、人に話して聽かすのが大好きで御座いました。で、或る人から「貴女のやうにさう物覺えが宜しくば、英語を習つたらば如何です」と、勸められましたのが動機で、自分も遂其氣に成りました。

丁度明治五年でした、齋藤つね子と云ふ方が、神田の佐柄木町に、芳英社と云ふ英學の塾を開かれましたの

て、私も早速それに入學致しました。只今から考へますと、餘程久しい以前のことて御座いますが、其頃恰も男女を問はず、英語熱が一時どッと盛んになつてまゐりました時期てしたから、大分入學するものがありまして、創業の際なるにも關らず、百名近い女生徒がありました。同時に學んだ方て、只今立派な地位に成つて居られる方も御座います。

教授法などは、漢學塾と同樣、一人が先生から教はれば、其覺えたところを他の人に傳へる、其人が又其次の人に傳へると云ふやうに、順々に次の人から次の人へと、教はつたり教へたりするのてした。教師と申しますのは、外國人から直接に教はつた方て、發音なども正しい方てしたが、何を申すにも、只今から較べますと、教授法ても、其他萬事が非常に幼稚て御座いましたのてす、只今の生徒ならば、三月もかゝれば確實と呑込めることを、其頃ては三年も經つてまだ覺えられぬやうなこともありました。例之ば As fast, so fast. の區別の如きものても、只今の學校ては、文法の時間がありまして、ちやんと先生から、如何なる場合には何々を使はねばならぬ、と、精しく説明して教へて下さいますが、私どもの頃は、自分の心が自然と其處へ達かなければ、會得られませんのてしたから、餘計な苦心がありました。

そんな譯て、本は讀めましても、外國人と話することが出來ないやうな次第てすから、何か質問したくも、直接に外國人に質ねることが出來ませんので、何うも不都合てなりません、何うしても之は、早く外國人に就かなければ成らぬと思ひましたので、實は福澤さんの慶應義塾に入りたいと思ひましたが、彼校は女子には入學が出來ませんので、據なく或る人…………此人も只今は立派に成つて居りますので、迷惑になるといけませんから名前は申しませんが……を、家庭教師のやうにして、家に聘して、其人を慶應義塾へ通はして、其人から教はるやうにしたこともありましたが、それても矢張り思はしくまゐりませんので、終ひには、自分から進んで、築地の外國人の許に習ひに行きました。それから引繼いて、間も無く横濱の共立女學校へまゐることに成りました。

私は、自分で別に何に成らうと云ふ考が有つたのでもありませんでしたが、日進の世に生れた以上、是れからのものは、何うしても英語の素養が無くては成らぬと思ひました、それに……其頃は既に櫻井に嫁して居

りましたが、夫が海軍に從事して居りましたから、夫からも勸められますし、又、夫は多く留守勝で御座いましたから、夫の留守中學校に通ふことも出來ましたので御座いました。

手の上の氷

（源氏物語談話の一節）

與謝野晶子

今日讀むで頂きますのは、蜻蛉の巻の、博文舘本の三十五枚目からで御座います。板倉屋本では二十三枚目になつて居ります。皆樣の御許も十分承らうと存じましたのですが、今日は小人數で御座いますから、まあ私からお話いたす事にいたします。この前の文は薫の「忍びて語らひ給ふ」小宰相の君と云ふ。「かたちなども淸げなり、心ばせある方の人と思されたり、同じ琴を搔きならすつま音もばち音も人にはまさり、文をかき物うちいひたるも、よしあるふしをそへたる」女の事が書いて御座います。玉の小櫛などにもこの小宰相の條は御座いますが、次の宮の氷の所は何とも書いて御座いません。私はこの小宰相と云ふ美女を出しましたのは、一品の宮を後に出さうとする用意であらうと思ひます。小宰相の所には歌があつて、氷の所には歌がないからと申して、この源氏中の最も趣のある所を見落しました古人が分らないやうに思ひます。紫式部は自分の歌の拙いことを知つて居りますから、最も美くしい人の最も美くしい場合に歌を附けることを致さなかつたのでせう。

人知れぬすちはかけても見せ給はず、蓮の花の盛に御八講せらる。六條院の御ため、紫の上など、皆思しわけつゝ、御經佛など供養せさせ給ひて、嚴めしく尊くなんありける。

人知れぬすぢは無論浮舟の死のことで御座いませう。御八講の場所は六條院です。

五かんの日などは、いみじき見物なりければ、こなたかなた女房につきて參りて物見る人多かりけり。五日と云ふ朝座にはてて、御堂の飾とりさげ、御しつらひあらたむるに、北の廂も、障子ども放ちたりしかば、皆入りたちてつくらふ程、西の渡殿に姫宮おはしけり。

跡片付にごたごたして居りまする時、

物きゝこうじて、女房もおのおの局にありつつ、御前はいと人ずくななる夕暮に大將殿直衣着かへて、今日まかんづる僧の中に、必らずの給ふべき事あるにより釣殿の方におはしたるに皆まかんてぬれば、池の方にすずみ給ひて、人ずくななるに、かく云ふ宰相の君など假初に几帳などばかり隔ててうちやすむ上局したり……

もう僧が歸つた後だつたので、それでは宰相の君などの假に休息する場所がこてらに出來て居る筈だからとだん〳〵こちらへ來るところて、次へ續くのてす。几帳などばかりは、一室一室別になつて居ないと云ふこと、かく云ふ宰相の君は前の文をうけた作者のことば。

ここにやあらん、人の衣の音すると思して、馬道の方のさうじの細く明きたるより、やをら見給へば、例さやうの人の居たるけはひには似ず、はれ〳〵しくしつらひたれば、なか〳〵几帳どもの立てちがへたるあはひより見とほされてあらはなり。

この邊は諸書とも點の打ちやうが惡う御座いますからお氣をお付け下さい、例さやうの、は平常左大臣の家の女房などの居るに似ず一品宮の御座所になつて居るからで御座います。ここで野分の卷の垣間見の所を御參照していただきます。「東の渡殿の小障子かみより、妻戸の開きたるひまを何心もなく見入れ給へるに、女房あまた見ゆれば、立ちとまりて音せせて見る。御屛風も風のいたう吹きければ押し疊みよせたるに」

氷を物の蓋に置きてわるとて、もてさわぐ人々大人三人ばかり並と居たり。御前とは見給はぬに、唐衣も汗衫も着ず皆うちとけたれば、御前とは見給はぬに、白き羅の御衣着給へる人の、手に氷を持ちながら、かく爭ふを少しゑみ給へるおん顏、いはん方なく美くしげなり。いとあつさの堪へがたき日なれば、こちたき御髮の苦しうおぼさるるやあらん、少しこなたになびかしてひかれたる程、たとへんものなし、ここらよき人を見集むれど、似るべくもあらざりけりと覺ゆ。御前なる人は誠に土などの心地ぞするを、思ひしづめて見れば、黃なるすずしの單衣、薄色なる裳着たる人の扇うちつかひたるなど、用意あらむはやと、ふと見えて、なかなか物あつかひにいと苦しげなり。唯さながら見給へかしと笑ひたるまみ、愛敬づきたり。

聲きくにぞこの志の人とは知りぬる。

土のやうに見えたのが、自分の情人の小宰相であつた

と云ふのは、面白いては御座いませんか。作者は最も自然に近い輕やかな姿て、この高貴の人を出しました。篇中他に斯う云ふ所は御座いません。白い羅に赤の袴（後に御座います）を召した宮樣を書いて、「黄なるすゞしの」と書きました色彩の美くしさはどうて御座いませう。一品の宮の黒髮がいよいよ黒く美くしく見えるやうて御座いますね。野分の紫の上は『廂の御座に居給へる人、物に紛るべくもあらず、氣高く淸らにさとうちにほふ心ちして、春の曙の霞の間よりおもしろきかば櫻の咲きみだれたるを見る心ちす。味氣なく見奉るわが顔にも移りくるやうに愛嬌はにほひたり、又なくめづらしき人の御さまなり。』と御座いますが、それよりは此處の方が面白いやうに思ひます。

心づよくわりて手ごとにもたり。頭にうち置き、胸にさしあてなど、さまあしうする人もあるべし。この人は紙につゝみて、御前にもかくて參らせたればいと美くしき御手をさしやり給ひて、のごはせ給ふ。いなもたらじ、しづくむつかしとの給ふ御聲、いとほのかに聞くも限もなくうれし。

さまあしうする人もあるべし、と薫の目に他の人のことの見えませんのは尤もて御座いますが、こゝて小宰相をだん〳〵と美くしう書きましたのは、いよ〳〵一品の宮の美を現はす爲て御座います。

まだいとちひさくおはしまし〻程に、我が物の心も知らて見奉りし時、めてたの兒の御さまやと見奉りし。

六條院て薫とともに生ひたつた女宮の三つ四つのおん時て御座いませう、めてたの兒のおんさまやと幼な心に思ふたと云ふのです、西洋の何がしの大詩人がその戀人を見たのは八つの時と御座いますさうてすが、これはまだ三つ四つのおん時てす。どうしても野分の卷とは趣がちがふからて御座いますが、面白う御座います。

その後絶えてこの御けはひをだに聞かざりつるものを、いかなる神佛のかゝる折見せ給へるならん、例のやすからず物思はせんとするにやあらんと、かつはしづ心なくてまもり立ちたる程に

こゝて一枚飛ばして讀むて頂きませう。

つとめて起き給へり。女宮の御かたちいとをかしげなめるは、これより必ず優るべきことかはと見えながら、更に似給はずこそありけれ。

これは薫の室、一品の宮のおん妹女二宮のおん方てす。

あさましきまであてにかをり、えもいはざりしおん
さまかな、かたへは思ひなしか、をりからかと思
して、
自分の心を知らない人は思ひなしか、をりからかと思
ふて居ります。
いとあつしや、これより薄き御衣奉れ、女は例なら
ぬ物着たるこそ時々につけてをかしけれとて、あな
たに參りて、大貮に羅の單衣の御衣縫ひてまゐれと
いへとの給ふ。御前なる人はこの御かたちのいみじ
き盛におはしますを、もてはやし聞え給ふとをかし
う思へり。
お前なる人の思ひと薫の心と、その正身と、昨日の宮
と、いよ／＼相去ることの遠いことを徐々に書きます。
例のねんずし給ふ我御方におはしましなどして、晝
つかた渡り給へれば、の給ひつる御衣御几帳にかけ
たり。なぞこは奉らぬ、人おほく見る時なん、すき
たる物着たるは傍側に覺ゆる、只今はあへなむとて
手づから着せ奉り給ふ、御袴も昨日の同じくれなゐ
なり、御髪のおほき、すそなどはおとり給はねど、
猶さまざまなるにや似るべくもあらず。
前に更に似給はずこそありけれと、ありまして、また
こゝに、似るべくもあらずと御座いますので、いよい
よ感じが深う御座います。
氷召して、人々にわらせ給ふ。とりてひとつ奉りな
どし給ふ、心のうちもをかし。
薫はこゝで二十七で御座いますが、戀は人を斯うもて
あそぶもので御座いませうか。
袷に書きて戀しき人見る人はなくやはある、まして
これは慰めむに似げなからぬ御程ぞかしと思へど。
強ひてさう思ひましても、
昨日かやうにてわれまじり居、心に任せて見奉らま
しかばと覺ゆるに、心にもあらずうちなげかれぬ。
まだかの宮からお遣はしになつた袷を見てなげく所が
御座いますが、こゝまでを一段にいたしまして皆樣の
御意見を伺ふたので御座います。かう云ふ所を古人が
見落してある爲に、今の人の粗略に見て居る處を、追
追に皆樣からも伺ふつもりで御座います。

○本誌の定期增刊は來る五月十五日豫定の通
り發行します、體裁、內容、定價等は凡て例
號の通りてす

晩餐會

文學士　沼波瓊音

北風が無遠慮に吹荒んで怖しく寒い晩だ。文學講話會の連中が神田の花雪軒と云ふ洋食店へ飛込んだ、飛込んだと云ふ言葉はこの塲合に文字通りの意味に取つて宜しい、この連中は各今日無慮五百餘名の聽衆に氣焔を吐掛けてゲッソリ腹を減らして而して小半道電車で運ばれ停留所から冷たい砂煙に追はれて來たので、此店の扉を押した時は皆が先を爭うて「ヒヤア」とか「ホイ」とか奇聲を發して正に飛込んだのである。

一同は二階の一室に入つた。外に客は無く瓦斯の紫の光も大きな姿見の輝も何も彼も寒い。梧葉は一旦脱いだ外套を復た被つてブル／＼ッと身顫しながら、

「どうも馬鹿に寒い、ヤこれは怪しからん、此室には煖爐が無い」

「成程無いな、如何したんだらうな」と象傑は此晩餐會の主人役だけに氣を揉んで彼方此方歩き回る、何處かに煖爐が落ちてアしないかと探すやうだ。外の連中も同じ態度でブラ／＼と歩く。獨り股栫博士のみは其太つた身體を椅子に据ゑて悠然たるものだ。

博覧會の女看守が袴を脱いだと云ふ樣子の女が小さな箱火鉢を卓子の所々に置いて行く。

「熱い酒を早く持つて來い」と博士は叱り付けるやうに云ふ、太つて居ても矢張り寒いと見える。皆も火鉢に吸寄る。麵麭がやつと來た。閑香は先づ火鉢を棄てて熱心に麵麭を食ひ始める、麵麭は二つに裂かうとすると四つにも五つにもホロ／＼と壞れる、確に二三日はお茶を引いて居た麵麭であらう、閑香はそんな麵麭の身の上などは考へぬ、寒を凌ぐには火にあたつて外部から温めるより物を食つて内部から温める方が有効だと云ふ事を故老から聞いたことがあるので、それを試みるべく忙しい。酒が來た、皆々飲む、スープ、フライ、ロールキャベツなど平凡な料理が追々出る。折柄の事て酔は早く回る。舟乙一人は酒を遣らないので料理の間々にお茶引麵麭をボツ／＼と食ふ。

「西洋の西洋料理はどんなんです」と閑香が舟乙に訊く、舟乙は歐洲を漫遊して去年歸つた人だ。

舟「まるて違ひますなア」と麵麭を嚥込んで「殊にこの麵麭てすなア、日本のものとは全く別物で、非常に甘いてす、佛蘭西の宴會などで出すのは冷藏器に貯へ

てあるのです、冷やして置かないと直き腐さうです、」

問「ハ、ア、直き腐るやうなものは乾度甘いものです て」舟「乙の話から警句を採り得て手柄顔。「僕は一體海の鼠膓雲丹なんと云ものが非常に好きですが西洋にも那樣ものはありますか、」

舟「それが有ります、エ、と名は忘れましたが、有るです」

股「柹博士はもう酔つた、「味噌漉の……底に溜りし大晦日……ですにてされずてされず……にてすッ」一座ドッと笑ふ、博士は莞爾ともしない、「又云はく、たゞ一字清むと濁るの違ひにてハケに毛がありハゲに毛が無し」博士は機嫌がよくなると記憶してる狂歌をノベッに繰出すのが癖だ、狂歌其者の味よりも博士の恍けた云ひ方が可笑しいので聞く者が腹筋を撚る。

「斯う云のもありますよ」と隨訓が口を出す「たゞ一字清むと濁るて大違ひ上はセントー下は船頭」

一向笑聲が起らぬ、セントーと云のが解り兼ねたからだが聞かうとする人も無い、隨訓は物足らぬ顔して牡蠣のフライを頬張る。解らぬことを解つた顔しないて、何でも聞いておく主義の迷越は頤の疎髯を搔きながら、

「そのセヽセントーと云のは何です」

隨訓は好疑問といひたげに「セントーは仙人の仙に洞です、あれをセンドーと云のは間違てセントーと清むのが正しいのです、この狂歌はその證據にもなるんです、」

「成程洞の字はトーと云音もある」と迷越が云ふ、

股「併しちと解り難いな、説明が要る、はハケに毛がありハゲに毛が無しの方がよく解るて」

象傑が隅の方から「いや、矢張りセントーの方が宜いです、ハゲに毛が無しはちッと困りますへヽヽ」と廣く禿げた前額を撫てる。皆笑ふ。その笑聲の中で梧葉の笑聲は縦に振動するやうな響で殊に耳立つ。閑呑は笑ふ梧葉をつく〳〵と見且つ聞いて默然として居たが頓て、

「梧葉さん、貴方のお聲は實に館原輕焼君に酷似てすねえ」

梧「左うですか、甲高い聲ですから」

閑「お國が同じなんですか」

梧「いゝえ」

閑「それぢや新體詩の聲なんですね」輕焼も梧葉も新體詩家だから斯う云て見た、併し云方が拙いから一向

に受けない。
「今日の聴衆の中に女は居ましたか」と博士が附かん事をお尋ねする。
「二人居ました」と豪傑が答へる。
「紅二點だな」と博士が大聲に云つて退ける。紅二點がいひたさに訊いて見たのかも知れぬ。
象「あんまり紅でもありませんでしたよ」
博「僕はあれは支那人かと思つた」
閉「僕も左う思つた、日本人なら鬼界ケ島あたりのものだらうと思つた、何だか甚く王化に霑はざる風俗だつた」
象「あの女は東京の者ですが無政府黨なんです」
博「王化に霑はざるも宜なりかなハヽヽ」博士が始めて笑つた。「無政府黨を妻君にしたら。」如何あらう。如何あらうと云通語を聞いて閉呑は無暗に喜んでる。「お前は無政府ぢや無いか」と迷越が酌をする女看守に調戯ふ。看守は解らない癖に「ホヽヽ」と笑ひてける。「お前ひとつ、に人相を見よか、」
女「ホヽヽ、どうぞ」
迷「まづ目が少し下つてるな」
女「あら厭だ、どうせ左樣でせうよ」
迷「い厭な事は無い、目は……少し下つてる位が宜い、め目の上つてるのは悍婦か石女だ」
閉「悍婦といふのは御亭主を尻に敷く女、石女といふのは子の無い女のとだ」
女「オヤ然うですか」とこれは本文に答へず註釋に答へて、それを切懸に隨訓に酌をする。
迷「目の下つてるのは温和の性質を現してる、次に鼻だ」と横から女の鼻を覗き込む。
女「もう澤山ですよ」
迷「然うか、た澤山なら止さう」と忽ち人相見を中止する。
象「迷越君は醉ふと必ず人相見を始めますね」
閉「併し迷越君の人相見は執拗くなくて宜いですよ。君御存じでせうあの遊狂君ですよ、あの人は醉ふと必らず催眠術を試みる癖があるんですがね。それが中々手ッ取早く片付かないんで常時も惱まされます。」
博「どんな風な掛け方です。」
閉「遊狂君はいつも藝妓に掛けるんですがね、から藝妓の兩手を握りましてね、自分の眼を見詰めさせて置くんです、それだけですよ、」
博「それだけで掛かるんですか」

閉「いゝや掛かつた所は一度も見たとがありません、何でもその藝妓と睨競するのが一時間程續く、そして今日は無効だと云つて遊狂君自らが横になつて寐てしまふ、藝妓は外の座敷があるから御免蒙つて去つてしまふ、それから僕が話相手が無いので寐込んでしまふ、すると遊狂君が先へ目を醒して僕を起して一緒に歸る、いつもこれです、」

舟「ハヽア催眠術が目的物に打つ衝つて反射するんてすね」

敗、球突の球の如しだよ」

ヒユーと凄まじい風の音がして硝子窓がガタ〳〵ツと震ふ、外を見ると町々の瓦斯燈電燈が怖しい砂煙の爲に霞んでいかにも寒さうである。

象「どうも酷い風てすなア」

閑「東京名物の空つ風だ」

舟「貴君のお國は暖かださうてすね」と閉呑にいふ、

閉「東京とは確に綿入一枚違ひます、併し氣候が暖い爲に人間が惰弱になつて可かんてす、それて室内の道樂が盛に行はれる、唯もう平和に遊んて暮さうとして居るんてす、尤も此頃は物質的に發展する勢が凄いんてすが、矢張り固有の平和の風は存せられて居ますね」

舟「固有の風と云ものは何處の國にもありますね」

「き、君、君」と迷越は閉舟兩人の方を向いて手を振つて何か云はうとする、急かずに緩り話し給へと二人は口にはいはぬが態度に見せて此方から悠然と構へて見せる。

迷「僕の國にはね、か、か、かたぐと云奇習がある、男が或女と結婚したいと思ふと、そ、その男が自分の友人等に、そ、相談するんだね、友人等が其結婚は善からうと決議すると、男が女の家へ申込む、若し女の親達が許さぬとなると、そ、そこてかたぐのだ、か、かたぐと云のは男の友人等が機會を見て、その女を引擔いて人の來ぬ所へ連れて行つて、あ、あの男と結婚せよと命令的に云渡す、これを遣られると親達はもう、ぜ、是非許可をしなくてはならぬのだがね、そ、その……」

語を遮つて閉呑は案を拍つて、

「面白い、大に面白い、美風だ」と叫ぶ、ハヽヽヽと笑聲が方々て起る、

舟「美風はちと甚いが、その友人の團體が友の爲に働くと云點が大に嬉しい、併し引擔ぐのは亂暴だ」と穩健な説を述べる。

閉「どの點もこの點も無い、一體の調子がキビ〳〵し

て可い、閑呑は賞める時にはいつもキビ〳〵が出る、餘程キビ〳〵好と見える。

「さア餘りダラ〳〵と長居をしないで、こゝらで解散した方がキビ〳〵して居て宜からう」と股柿博士は重い身體を椅子から離した。

（なはり）

海の水（お伽噺）

なてしこ

或る所に兄弟の子供がありました。兄は欲太郎と云ひ至つて慾深い子で、弟は順次郎と云ひ、おとなしい子でした。この子供等の父様は二三年前に逝なつて了つて、その後で悪い兄が家を貰ひ、弟は田を貰つて暮して居ましたが、兄は何處までも悪く、弟の田を取つて了ひました。弟はそれに違背もせず、村外れに小さな家を建てゝ、乞食のやうに貧乏なくらしをして居ました。

今月は丁度五月の五日で、村では端午といふので鯉幟を空に立てゝ、子供等は面白さうに遊んで居ます。順次郎はうらやましさうに見て居ましたが、

「兄様の家へ今日行けば屹度何かくれるだらう、さうしやう〳〵」とやがて兄の家へ參りました。すると兄の欲太郎は怖い顔をして、

「お前のやうな乞食には用はない、これから來ると蹴り殺すぞ、今日は折角端午だから、お釜の食ひ餘りの蒲鉾をやらう」

と云ひました。順次郎は、無慈悲な兄だと思ひましたが、何とも仕方がないので、泣く〳〵蒲鉾を一片貰つて歸りかけました。

その歸り道に、廣い森の中を通らなければなりませぬ。今順次郎は森の中程まで參りますと、白い衣を着た爺さんが小さな斧で木を伐つて居ます。順次郎は、近所に見馴れない爺さんだなと思ひながら行き過ぎやうとしますと、その爺さんが。

「もし順次郎さん」

名まで知つて居て呼びかけました。

「何」

と順次郎は振りかへつて答ますと、爺さんはニコ〳〵笑ひながら、手招きして居ます、それで順次郎は爺さ

んの居る處まで來ました。

「爺さん、何てすか」

「アヽ、お前は中々よい物を持つてゐるな」

と順次郎の持つて居る蒲鉾を見ます。

「エヽ、これてすか、これは今兄さんの家へ行つて貰つて來たのです」

「さうか、俺はお前がおとなしいので、褒美によい事を教へて上げやう、これから西の方へ三里行くと海がある。その海を舟に乗て西へ〳〵と三百里行くと島がある、その島は小人島と云つて、人間の丈が一尺程しかない、それで小人島と云ふのぢや、その小人等は非常に蒲鉾が好きて、蒲鉾となら何とても代へてくれる。お前が今その蒲鉾を持つて小人島へ渡つて寶物と取りかへて來るがよい、しかし外の物と代へてはならぬ。小人島の村長の家にある大臼と代へて來るがよい、臼を使ふ道は歸つてから教てやる」

と爺さんはさも親切に教へて與れましたので、順次郎は悦こんで西の方へ三里行きますと、本當に廣い〳〵海がありました。しかしこの頃の海は川の水も同じやうに鹽辛くなかつたのです。

順次郎は舟に乗つて海を漕いて行く内に段々日が暮れましたが、一心に櫓を押して遂々翌日の晝頃に小人島に着きました。見れば話の樣に一尺足らずの人形のやうな人間が、蒲鉾の香を嗅いて、何千と云ふ程集まつて來ました。中には早く來やうと思つて猫に乘つて來る人や、犬に車を引かせて來る人や、見て居ても面白うございます。その小人等は口々に云ひます、

「どうか私に蒲鉾と黃金と代へて下さい」

「私に金剛石と代へて下さい」

「私に千年生きる藥と代へて下さい」

など〳〵皆、世に得難い品物と代へて下さいと云ひますが、順次郎は爺さんに教へて貰つたやうに、「否だ〳〵」と言ひました。すると中から村長らしい人が出まして、

「それでは何となら代へて下さいますか」

「僕は外の物となら代へぬが、村長の家にある大臼となら代へても宜い」

と答へました、これを聞いた小人等は、

「アヽ〳〵、折角甘い物が食へると思ふたが、如何に好きの物ても、あの大臼とは代へられぬから仕方がない、あきらめた〳〵」

と泣き顏で云ひます、前の村長は小人等に向ひまして

「皆の者や、あの大臼は島の寶物ではあるが、もう破

損んては居るし、それに使ふ法が解らないと駄目だから、蒲鉾と代へても好くはないか」

小人等はもう欲しくて／＼たまらないので、

「好いてせう」

と一齊に答へました。そこて順次郎は大臼とうまく代へて、再び舟に乘つて歸つて來て見ますと、森の中に例の爺さんが木を伐つて居ます、順次郎を見て、

「臼を持つて歸つたか」

「ハイ、漸く持つて歸りました」

「賢い／＼、それて臼を使ふ法は、先づアイウエオと三度唱へて、それから自分の好きな物の名を云ふて臼を廻せば何ても出る、もう出なくつてもよい時にはワイウエオと三度唱へればよい、解つたか」

と云ふ中に爺さんは何處かへ行つて了ひました。

順次郎は不思議ながら家に歸つて參りまして、腹が空いて居るので試みに、

「アイウエオ／＼／＼、おすし出ろ」

と臼を廻しましと、不思議や目の前へおすしを山の樣に盛つた皿が出ました。

「ワイウエオ／＼／＼」

と云つて了ひますと、おすしが出なくなりました。

順次郎は面白いので、菓子や、果物や、家や、庭や櫻の木や、欲しい物を云へば幾らても目の前へ出ます。そうして忽ちの中に世界第一の富豪家になりました。

兄の欲太郎は之れを聞てうらやましくてならないのて、或る日弟の家に參りまして、

「これ順次郎、お前にお願ひがあるが、何うか一日その臼を僕に貸して呉れないか」

と言ひました。しかし惡い兄と知つて居る順次郎は中中貸しませぬ。

「それては兄さんの欲しい物をお仰れば私が出して上げます」

と云ひますので、流石の兄も何とも致し方がありませんてした。こうなると尚更臼が欲しいので、或る日村に祭があつた時、弟の留守に遂々臼を盗みだしました。惡い事をしたので村には居られませんので、欲太郎は舟に乘つて外國に逃げ出しました。そして欲太郎思ふには、

「こうして逃げ出しはしたもの丶、外國へ行くについては何か商賣をしなくてはならぬ、聞くと外國には鹽がないと云ふから、一つ臼から鹽を出して、それを、高く賣つてやらう、さうだ／＼」

と欲太郎は弟が何時かした樣に、

「アイウエオ〳〵、鹽出ろ」

と云つて臼を廻しますと、白い雪のやうな鹽が、ゾロゾロと出て來ます、欲太郎は嬉しさうに手を拍つて見て居ます中に、鹽は山の樣になりました、やがて舟一ぱいになつて、舟は沈みさうになりました。

　サア、驚いたのは欲太郎て、出す事だけは知つて居ましたが、止める事を知らないので、何うしても鹽の出るのを止める事が出來ません。舟は見る〳〵中に重みてズブ〳〵と沈み始めましたが、未だ鹽は臼から出て來ます。

　遂々舟も臼も欲太郎も海の中へ沈んで了ひました、それて、今まで鹽辛くなかつた海の水は鹽辛くなりました。

従妹

前田夕暮

青みゆく麥の穗にさへしのばれて悲しきことを知りにけるかな

春の海誰ぞかこゝろをその沖にありてこのごろあこがれしむる

君が母を今はた思ふこのふたりかくしてあるをよろこぶにしも

春の雪あかるき晝の路の上はだらにふれり悲しめるごと

あゝ従妹君を見る日のよろこびを胸につゝみてありと知らずや

君が眼のうちにたゞよふ運命の我がかなしみに心おくれぬ

まどかなる夢あたゝかう生涯をつゝむと思ふ君にむかへば

我がこゝろうつるべくしもあらざるをなげく従妹よかくて終らむ

我れ君を戀ふるといへば驚きて一語なかりきあはれ従妹よ

いづかたにむかひて悔いむ我が爲めにあやまちし子の數おほきかな

was greatly moved, and she began to speak and said,—

"My husband, now may I speak and tell you that I am innocent." She told him of the trick of the old woman who had taken away her children and hidden them. Then to the great joy of the King they were brought, and the wicked woman was burnt to ashes. But the King and the Queen with their six brothers lived many years in happiness and peace.

(End)

語りしに，王甚しく感激して無言なり．妃は言葉をつぎて云へる樣，—

「我夫よ，今こそ我身罪なき事を告げ參らせん」とて，母公の皇子等を盜み，隱しある惡計を告ぐれば．皇子等は直ちに呼び召され一同の歡喜盡きざるに引替へて，惡婆は火刑に處せられたり．かくて王，后六人の兄弟共に相助け，幸福と平和の中に多年を過ごしゝとぞ。

Public Spirit

The best way to show public spirit is by cultivating the private virtue. The first thing you can do for your city is to make a pure and sunny and healthful home in it; and the second thing is to help and encourage others to do the same.

公共心

公共心發表最良の途は，私德を養ふに存す。汝の市に汝の盡瘁す可き第一の任は，淸潔，快活，健全なる家庭を自らなす之なり，第二の任は斯の如き私德を修めさせん爲に他を助けて奬勵す之なり。

Four things a man must to do
If he would make his record true:
To think without confusion clearly;
To love his fellow-men sincerely;
To act from honest motives purely;
To trust in God and heaven securely.

(H. Van Dyke)

人として誠の成功を冀はゞ
成すべき事四ヶ條あり．
雜亂を避けて明了に思考し，
赤誠以て同胞を愛し
正直なる主旨より行動を修め，
平心上天に信賴する之なり。

Queen still said nothing, the King could not help himself. He gave her over to the judges, and she was sentenced to suffer death by fire.

一言も答へ能はざれば，王は如何ともなし難くして，終に妃を裁判官に渡したり．妃は火刑に處せらるゝ宣告を受くるに至れり。

When the day came for her to be burned, it was the last day of the six years during which she was not to speak or laugh. The six shirts were ready only the left sleeve of the sixth was wanting. So when she was led to the stake, she laid the shirts on her arm; when she stood on high and the fire was just going to be lighted, she looked around and six Swans came flying through the air toward her.

死刑に處せらるゝ當日は之又彼女が笑ふ事も語る事もなすべからざる六年の最終日たりき。六枚の襯衣は既に成りて只一枚に左の袖のみ縫ひ殘れり。彼女は刑場に臨むに當りても，襯衣を離さず，積重ねたる薪の上に立ちて，今は火の點ぜんとする刹那邊を顧るに，不思議なるかな六羽の白鳥彼女の方面に向ひ飛び來たれり。

Then she saw her help was near, and her heart leapt with joy. The Swans swept toward her, and sank down so that she could throw the shirts over them; and as they were tought by them, their swan's skins fell off, and her brothers stood in their own bodies before her, straight and handsome. The youngest only lacked his left arm, and had in the place of it a Swan's wing on his shoulder.

救の近きを見し妃の，喜悦の鼓動如何に高かりし事ならむ．忽ちに白鳥彼女の側に飛び下り身を屈めしかば，妃は彼等に襯衣を投かけたり，見るが中に彼等白鳥の姿變じて，丈高く風采凜々しき六人の青年彼女の前に起立したり．唯一人は左の袖なきが爲に尙白鳥の翼肩より左手を被へり。

They hugged each other, and the Queen went to the King who

兄弟互に相抱して喜悅し，后は王の許に行きて，一部始終を物

rich clothes and she shone in her beauty like bright daylight, but no word could be drawn from her. He placed her by his side at table, and she was so sweet and modest that he could not help loving her. And after some days he united himself to her.

ば，旭の如く美しく邊眩き程なれど，一言をも彼の口に發せしむるを得ず。王は彼を引きて食卓に就かしめけるに，其美色，其溫順の風采に打たれて，彼を愛する心禁じ難く，終に數日後彼を王妃とせり。

Now this King had a wicked mother who did not like his marriage and spoke ill of the young Queen. After a year had passed, when the Queen brought her first child into the world, the old woman took it away from her, and smeared the Queen's mouth with blood as she slept. Then she went to the King and said the Queen had ate her child up. The King would not believe it and would not suffer any one to do her any harm. She sat always sewing at the shirts, and caring for nothing else. He said,—

然るに王には殘忍非道の母ありて，小女を宮中に入れしを憤り，彼を憎めり。一ヶ年後に皇子誕生ありたるに，母公は之を盜み，王妃の 睡眠中に 其唇に 血を 塗り，斯くて王の許に行きて，妃は赤子を喰ふ鬼なりと讒言したり。王は元より之を信ぜず，王妃に何の禍も來らざる樣に注意して，誰も手出しするを許可せざりけり．彼女は終日襯衣を縫ひて餘念なし。王云へらく

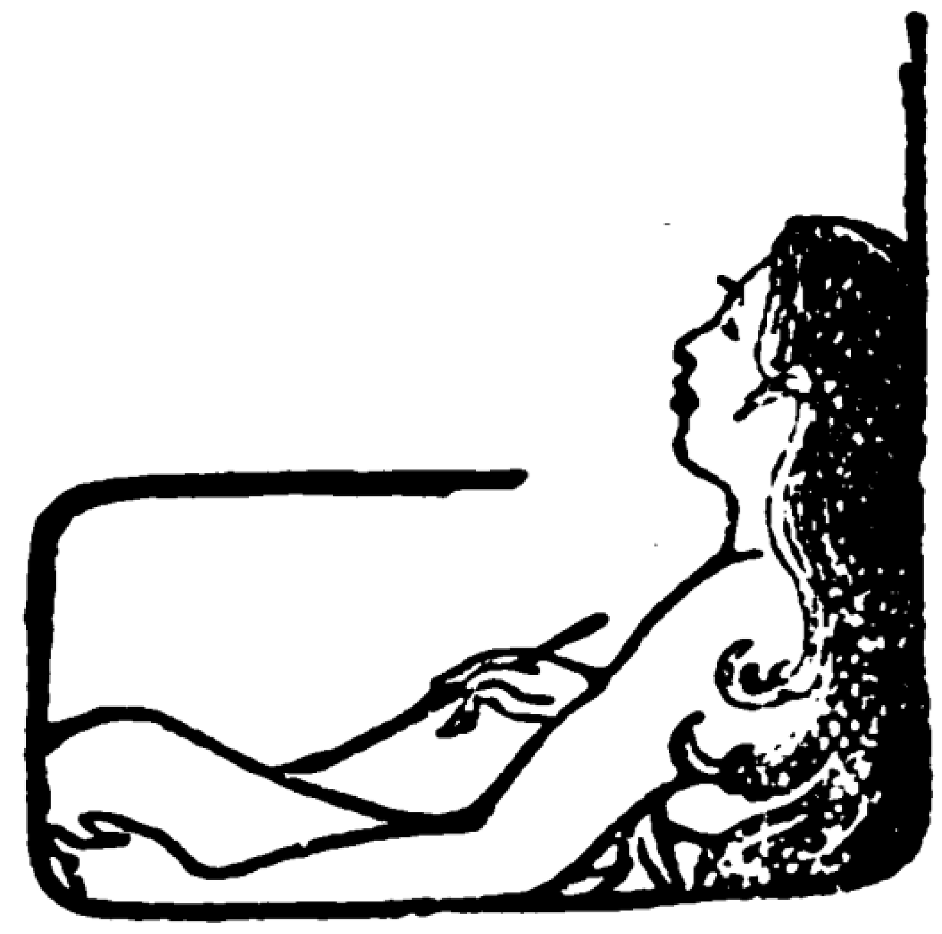
"She is too pious and good to do anything of that kind, if she were not dumb, she would tell us all about it." But when the old woman stole away the newly born child for the second time, and told the same story, and the

「妃は信神深く，善良なれば，如何て，さる殘忍なる所業のあるべきようなし，若し啞ならずば自から辨解せんものを」と。されど又皇子の生るゝや母公は直ちに盜み去りて，以前と同樣の言葉を以て王に告げしに，妃

英　　文

(第四年第四回)

女子英學塾講師 河井道子



Lucy

She dwelt among
the untrodden ways
Besides the springs of Dove;
A maid whom there were
none to praise,
And very few to love.

A violet by a mossy stone
Half hidden from the eye!
Fair as a star, when only one
So shining in the sky.

She lived unknown,
and few could know
When Lucy ceased to be;
But she is in her grave,
and, oh,
The difference to me.
(W. Wordsworth.)

ルシー

通ふ路さへ
無き里の,
ダーブ泉に　程近く,
育ちし彼女を
賞め稱へ
愛し慰む　友はなし。

苔むす岩根に
人目避け
獨り佇む　菫菜かな。
優しき星の　只一つ
空にきらめく　樣に似て。

人に知られず
ながらへし
ルシーの逝きしを　誰ぞ知る.
彼の墓にアー　入りてより
我身昔の　我ならず。

The Six Swans

No. IV

Then he had her dressed in

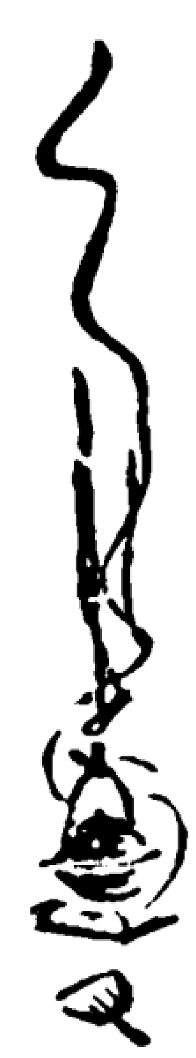
六羽の白鳥

其四

王は彼女に美服を纏はしむれ

投稿笑話

▲諸嬢が思ひに思ふて投稿して下さるのを笑話の材料にするなど〻は記者も怪しからぬと立腹になるか知らないが問ふは其時の恥辱、問はぬは末代の恥辱と云ふ語もあつて、諸嬢も世情に通じないから笑はれるやうなことも起るので、言て貰へば成程と合點の行く事もあるでせう、殊に名を出して指摘するのでも何でもなく記者が心覺えのまゝに並べるのですから、若しお氣に當つたら此後改めて頂けば何よりの幸ひです▲偖て澤山に來る投稿のなかで可笑ことも隨分ありますが、最も多いのは誤字宛字假名違ひ、振假名の誤謬、國訛りなどて、殊に誤字宛字は最も多いから此處に一々擧げますまい▲振假名の違ひには隨分常識外れのものがある、座右の原稿から一つ二つ探し出すと「日脚」と書いて「につきやく」と振假名したものがある、是は當然「ひあし」と振假名すべきものて日脚ては變妙な語になる。又「奥津城」と書いて「おくつじやう」と振假名したものがある、此は奥津城と言ふのが眞て墓の事てある▲國訛りの多いのは東北に限る、しとすの間違が多い、すを願ひましと切つた文章が多い、すをしと誤つてゐる▲誌友倶樂部に永久と言ふ語を皆使はれるやうだが前の月に永久に親密の交際を願ふと出して置いて、翌月都合あつて（目出度いこと？）交際はやめますと言ふのが出る、一ケ月の永久は餘りに心細い▲記者に種々なことを問ひ來る人はあるが嘗て投書するのに税金が要りますかと尋ねに來た人があつた、郵税を税金と間違へたらしい、此と一對なのは、新しく雅號をつけたから村役塲へ登記しやうと思ふが何うかと相談を受けたことだ、雅號の登記願は恐らく開闢以來初めての事てあらう▲男子の名を明記して、外の雜誌より本誌が優しくて面白いからせめて誌友倶樂部の仲間入をしたいと思ふけれど、私は男子だから許されないかも知れないが特に記者足下に哀願するからない〳〵て許してくれと言て來る、それても女の假面を冠つて紙上に紛れ込むよりは罪が淺い▲投稿の封筒の表書も隨分人さま〳〵て千變萬化の趣あるが、町名番地の外に、御丁寧にも電話の番號を書いてくる人がある、電話の番號は手紙に用はない▲書けばいろ〳〵あるが餘りあらさがしを初めるのも不可と思ふから此位にして置く、幸に諸嬢の反省を乞ふ。



山中古洞先生

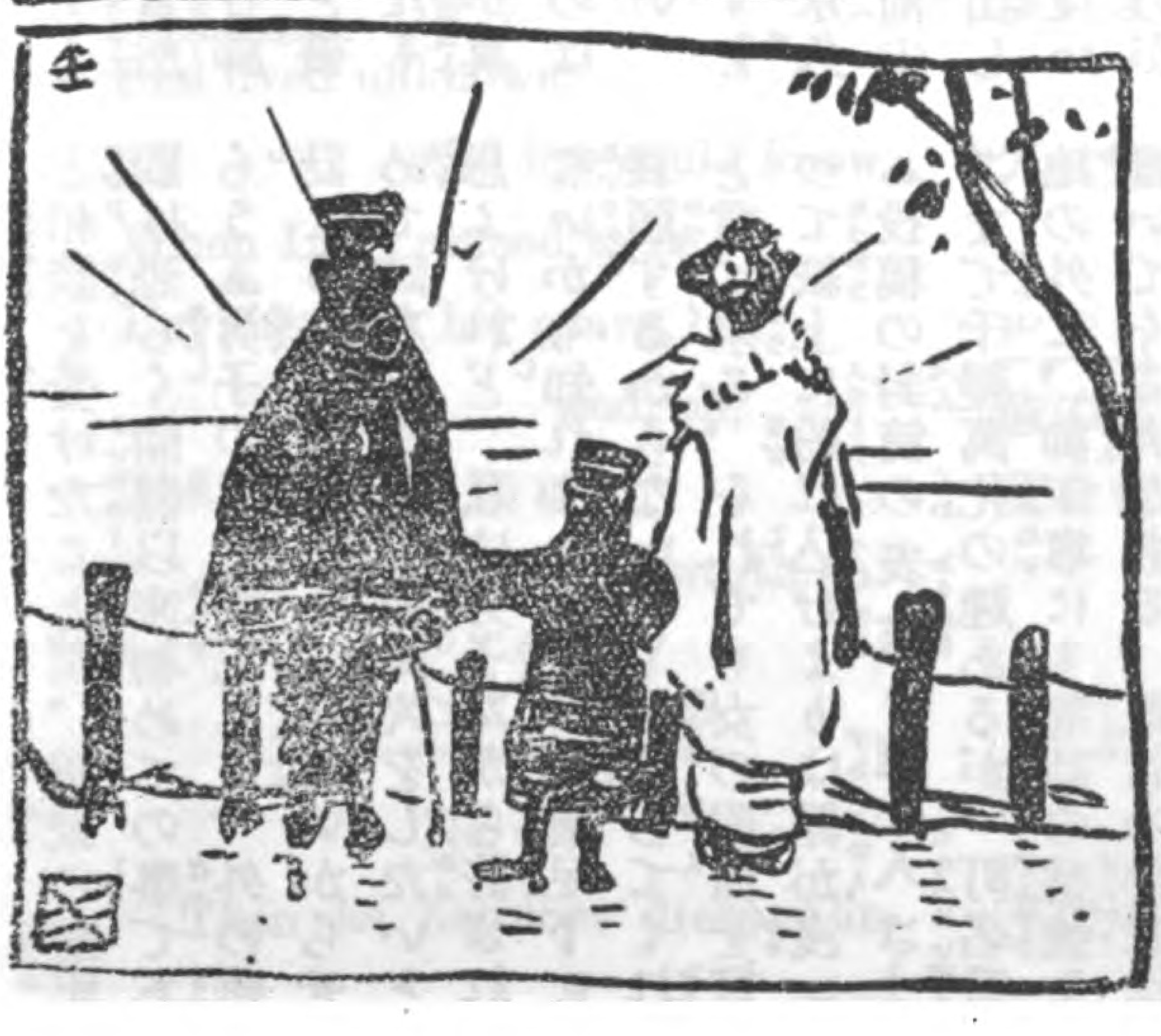
當選繪畫

（其五）









(1) とりいれ（二等）　牛込區富久町六〇藤澤方　佐野貞子

(2) 雨（三等）　讃岐國三豐郡觀音寺町下市平井方　白ばら

(3) 日永（四等）　東京府下南多摩郡恩方村　中島淀子

(4) 初日出（五等）　名古屋市押切町七丁目淺井方　きよし

美文

編輯局選



▲規定　本欄は他の各欄以外の一般の文章を採錄す、二十四字三十行以内、用紙は半紙又は原稿紙、一人一章に限る事、投書締切は毎月十五日、賞品は甲種懸賞規定に據る。

二等　○祭の夜

熊本縣玉名郡高瀬町　猿渡いき

お宮は山の麓の松原のなかにある、松原にはちら〳〵と紅い美しい灯影が隱見(みえがくれ)して、あたりの闇を破つては其處の空のみがぼうつと彩色られた様にあかるく、それが恰度霧でも立昇る様で、其美しい處から、澄みきつた笛の音がきれ〳〵に漏れて來る。

今お神樂が初まつたであらう、耳を傾くれば、成程太皷の音も拍手よく笛の音と調和して響いてくる、妙に心が浮いて來て、行つてみようかしらとは思つたが、やがて此お神樂が終つたら、花火があがつて、さてそれからは「御矢拾ひ」と云ふ物騒な爭ひとなつて、其どさくさ紛れに村の若い男衆が、どんな淫らなひどいことをしようかも知れぬ、それに花火は其場所で見るよりも遠くから眺めた方がずつと綺麗だ、との今日お晝、お宮參りの歸路でのお母さんの御注意を思ひ出しては、今の一瞬の妙な心の變化を獨て叱つてやる。

折からを一つぼうんと、不意に二の鳥居あたりで花火があがつた、喫驚して、さて空を仰いで眺むると、まあ何んと云ふ美しさであらう、花の様な玉が數多散る星の流るゝ氣勢に空に散る、やがて降る、紅いのが、青いのが、美しく光つて降る、

「お母さん、早くいらつしやい、花火が今あがりましたよ」とお椽を飛びながらさけぶ。

ぼうんとまた一つ花火があがつた。

情景双絶の文、但し敍景の方が勝つてゐる（評）

三等　○雪消え

岩代國須賀川町　根本松江

姉様は永遠に他家の人となつて了はれた。普通の事と知て居ながら不思議でならない、何故人はお嫁に往くのだろうと、考へ込む。外は雪消えの雫、軒打つ音がたえまない、淋しそうな母様のお顔が硝子越しに見える。衿さへくければ出來上る着物を、其儘にして、座敷へ往て見る、

遂此間まで飾られて在た、簞笥、鏡臺、手箱、寫眞掛け、扨ては、東琴迄、影も姿もない、今更の様に悲し

く心細くなつて來る。

姉樣は何して被入るだろう、未だ、家にも人にも慣れないで、今頃、雪消えの音を聞いては、針の手止めて家の事抔考えなさるか知らむ。それとも、誰やらが、「世の中に戀しきものは父母の、外にあらじと思ひしものを」、といふ歌の意味通り、實家の事抔お忘れなすつたのじやあるまいか?。まさか彼のお優しい姉樣が……………。惡魔々々、恐ろしい結婚てふ惡魔が姉上を奪ひ去て了た。私と姉樣の愛情を引き裂いて了たのである。いつか頰を傳つて來た涙が、ポッチリとメレンスの前垂れに落ちた。雪解けの音が靜かになつて來る程、日は傾いたと見える。

全體私の姉樣は、暖簾の中で育た人とは思はれぬ位、品格のある、令孃然とした人て在た。それに私は、撥ね返へりの何を仕ても姉樣と心が一致しない、無理を無理て通して姉樣を困らして居たのである。今考へると眞當にすまない、飛て往て思ふ存分、お詫びがしたい、併し、お優しい人とて、それ程私を、恨て被入るとも思はれない、理想通りのお家へ嫁かれて屹度滿足して被入るてあろう。

私は心の中の中から姉樣の幸福を祈て上げよう、而して、姉樣と二人前、御兩親を慰くさめて上げなければならない、併し今迄姉樣に計り髮を結て頂てそれを最も氣に入て居た、幼妹に滿足をあたへるには……………、私は什麽したなら髮結ひが上手になるのだろう……………。

姉が嫁入りたる後の妹の寂寥、好い處に眼が着いた、雪消えの音を點綴して文致に餘情を與へた處など心にくい（評）

四等

○あらぬ戀

四谷　小山那香子

雪ちやんの縁組の事を間接に聞知つて、少なからず驚かされた。然し事の眞相をよく知つてゐた自分は、決して信じはしなかつた。

私が雪ちやんを知つてから、まだやうやう三年しかたたぬが、早く父親に別れて、世間の口を氣に掛けてはおど〳〵する性質の母親の手に、淋しい生活をつゞけて來た雪ちやんの、ともすれば沈みがちの樣子が、太く自分の同情を引いて、二人は、多くの同窓の誰彼にも、羨まれる程親密な、姉妹のやうな交際をしてゐた。

其頃、雪ちやんにも自分にも、親しい人が一人あつた。それは半澤といつて、此度の噂の主である。

半澤は高等學校の生徒で、今の學生中に見るやうな、いやみな擧動などは更にない、淡白とした氣質の青年であつた。

三人の交際はもとより秘密ではない。それはもう、お互に水の出花の若い同士だもの、膝を

交へた一室のうち、話に興が乘つては、呼吸の香の亂れ心地に、戀や愛などといふ言葉を口へ出した事もあつた。

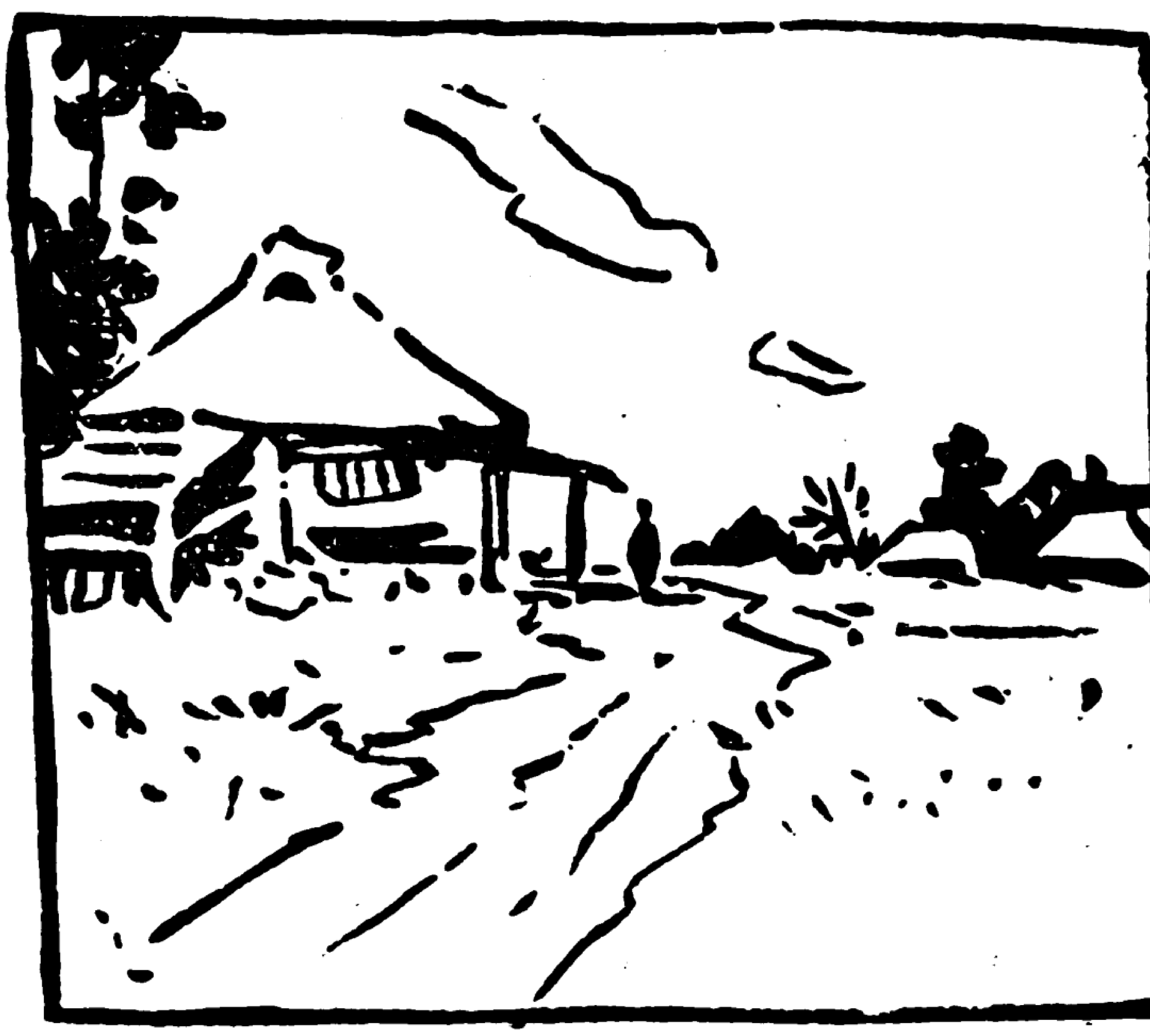
然しそれとて、大抵は各自が好いて讀む小說の事に就てゞあつて、何の根も葉もない言葉であつた。それをまあ、何う取違へてか、此度のぬれ衣は、實際二人には氣の毒である。

二人の性質をよく呑み込んでゐる私には、どうしても雪ちやんに戀があらうとはおもへぬ。これは私ばかりでなく、少し雪ちやんに親しく接した人は誰しもそう思うであらう。何しろ今年二十一といふに、少しも色氣のないあの樣子には、女の私でさへ呆れて了つた位だ。だもの此度の半澤の事だつても、結局は根岸の姉さんや、氣の少さいおつ母さんの、取越苦勞に過ぎぬとおもふ。

勝二とはどんな人か知らぬが、あの詩人肌の雪ちやんには、不似合な人らしい。一時の取越苦勞から、無理押しつけな緣組はよしたがよからう。

私はどこ迄も雪ちやんの味方である。

活きた人間、而かも若い人の戀語りであるから、山や水を描寫する所謂美文式のものとは甚だ違ふ、さればと言つて小說と云ふほど複雜したものでもない、筆の垢拔のしたのも流石は都會の文章である（評）



春の野路　三河　近藤道江

五等

○春の宵

小石川　唐崎秀子

讀みさしの國語讀本を閉ぢて廊下へ出た、何の氣もなく庭をながめると、第二號室の窓の前に二三本の櫻が白く咲いてる、世間の人はむやみに月、月、と云ふが此樣な夜はむしろ月の無い方がよいけれども眞の暗でも困るから、まあ今夜の樣な朧月がよいなど、自分勝手な事を想ひ、一しきり生暖い風が毛をなぶる。室では木崎さんは編物、岡田さんは御習字、其隣の室では山本さんに筧さんの御二人誰だか徒然草を讀みだした、大方山本さんだらう、彼のよい御聲で「つれ〴〵なるまゝに日ぐらしすゞりに

むかひて」と私は似耳を傾けて聞くと一段高く「いてや此世に生れてはねがはしかるべき事共多かんめれ」ちつと聞きほれて居ると今度は下でピアノの音がする第四部の方では電氣燈がかゞやいてハイカラ頭が障子にうつる、本の復習らしい、自分の室で木崎さんが、唐崎さん一寸と呼ぶ、何だかと思つて行くと「貴女庭へ出て散歩しましようよ」と云ふ、岡田さんも御道具仕舞つてさあ〳〵と急ぎ立てる、私は行き度ないから「今夜は失禮致しますわ其變り今度は必ず御供してよ」すると二人は案外な顔して「あらいつてもあなた散歩好きてはありませんか被入いよ」私はどうしても行きたくないので「御二人て被入い」とことはつたら「ては一寸」と云ひながら下へ降て行つた、私は又廊下へ出たが最ピアノの音もせず、唯隣りの村田さんが「ひとりともしびのもとに文をひろげて見ぬ世の人を友にすることそこよなうなぐさむわざなれ」と讀んでる私も室の中に這入つて國語讀本を開いた、下では笑ひ聲が高く聞こえる。

斯う云ふ春の宵は何の事なく永く心の底に殘るものだ（評）

秀逸

○黒髪

上總　ひさ子

昨日から少し頭が痛む。日曜といふ安息日を控えた悠つくりした日の午後、書齋は教科書にお留守居させて妾は遊びに小川の邊へ出てしまつた。春立てまだ四日といふに珍しく暖い日、遠山は淡すりみどりに霞んで、きらきらと陽炎もえる土の濕りかさも歡かそう、何だか素足になつて踏んで見たい様な心持がする。小橋がある。向ふは野原て長閑そうに踞ひた人が行く。靜かな日だこと、妾はもう氣も心ものびのびとなつて、つい其處の枯芝の上へ座てしまつた――頭の痛むのは先月から髪を洗はなかつた爲かも知れない。流れは澄切つた水、日あたりの汀には何の草か青々と萠初めて岩の陰に芹の根が白う洗はれてる、おひたしに好いことと摘まうかしらと思ふ。何處からか梅の花が流れて來る、見送りながら妾はふと思つた事を此水て髪を洗つたらどんなだろう……妾は直ぐに下の岩へをりて了つた、そしてリボンも櫛も草の上に置いて髪を解いて了つた。俯向くと影が映る。その儘さらさらと浸した時の心持！。一體妾の髪は手に餘る程多い。逆に梳いたら膝まで達く。鄙に生れた不仕合を神様は髪て埋合せて下されたのだと毎も思て居た。お母様のは以前大變に病はれてから少し薄くなつたと言ふけれど妾のは其お若かつた

時よりも一層多いと言はれる。何だか言ふのは可笑しいけれど人の顏や形が遺傳によるものならば此髪ばかりも永久にと妾は思ふ。唯爭はれぬのは年の頭につむ雪だけれど幸ひお母樣のも白いのは今に一筋も見えず祖母樣のも亡く られる迄左程には見えなかつたと言ふ…——。妾は梳れ髪を緩く結はへて軟い春の風にさらして居ると心は全く清々しうなつて言ひ知らぬ美妙の感が胸をついて起て來る。思ふに星の花風徐に吹いて世は新しかつた昔の國に妾達の祖先が花環を綴つて遊ばれた頃にも、矢張り丈なす漆の黑髪は女性の一ばんの尊嚴であつたのであらう。男の子の知らぬ誇りに笑みて花かざす身と生れたそれは確に女の幸といふのではあるまいか。妾は云知らず自分が懷しい。お母樣が懷しい。そしてうら若い今日の日が懷しくなつた。百合の花かげ髪ほす日の珊瑚の枕は得られずとも妾は一生お母樣の側を離れまい、もう鄙へ生れた不平など言ふまいと思つた。—— 美しい夢のやうな聯想は其から其へと廣がつてゆく——。

急にお母樣に逢ひたくなつた。そして何だか嬉しい事があるやうでお話がしたくてならない。根芹のことなど忘れて了つて妾はいそいそと家へ歸つた。背の髪はまだ乾かない、梅の下風が軟かうほつれ毛に匂ふ。

技巧の勝れたもの、文章の至れるもの、文藝の人たるべき素質がある（評）

○春日和

埼玉縣　中村勝子

拭清められた椽側の障子押開て暖い太陽の光を浴び乍ら裁縫してると「今日は」と戸口で愛らしい聲がする。君ちやんだねと思ひ乍らわざと「今日は、何誰で御ざいます」といふと「熊ケ谷から來まちた」といふので「マアそうですかお上んなさい」。濟ましてるとバタバタと足音がして「姉ちやんアタチよ」君ちやんがニコニコし乍ら傍へくる。「私眞に熊谷からきたかと思つてよ」「そう」と私の肩につかまつて「これ誰のおべゝ」「これ姉ちやんの」「うそよ、アタチのよ、ね姉ちやんアタチに縫ふて下ちやいな」餘り可愛さに髪の毛を梳してやり乍ら「赤ちやんおとなしいね」一寸のぞくと「えゝ花ちやん眠つてるの」身を傾むけて脊の私が縫ふてやつた緋縮の猿ッ子をみせる。「フ、、そんな猿ン坊が眠るもんか」机に座つてた弟が突然口を出す。「ごらん兄ちやんが騒いだから花ちやんが起ちやつた——花ちやんはよい子だ、あんも買つて呉るから、なーくな〳〵」。身を搖つて所々覺えた子守歌を歌つてお尻を叩いてる。「そんな人形が泣くんかいウフ、、」と弟がわざと笑ふ。「およしよ武ちやん」私は一寸弟をにらむ。「兄ちやん馬鹿ね、いゝべゝこちやいてくれないから……、姉ちやんアタチお祖母ちやん所て眠してくるからね」。袖なし被布の中に苦し氣に負はれてる赤兒

は君ちやんのオカツパの毛に被はれて手許り出てゐる。カラコロ〱と小さな足音は土藏の前て鋪敷て暖かぽつてしてるお祖母樣の所にいつた樣子。鉢の福壽草が揃つて開いて三毛は伸して又眠つた。庭の椿の下あたりには陽炎がチロ〱と、霜どけの庭の眞中に雞の足跡が鮮かに、土藏の方ては君ちやんの子守歌が聞こえる。あゝ暖い小春日和だことー。

いつもながら輕快、うまいものなり（評）

○つきぬ思

岡山縣　廣江壽子

思ふに私の拙ない水莖の跡が本誌の編輯なさるお方の机上に至る頃は最早や我身は人並々の身體てはなくなるてあらう、何の因果て私は斯迄不運に生れたてしやう、生れてから今日の日迄、親に別れて泣きこそしたが、虫一疋ても無慘に殺しはしなかつたのに、思へば丁度十年の昔、父上が未だ達者て渡らせられた頃は、荒い風にも當てられなかつたが、今は見るかげもなく落ちぶれ果てた爲め、少からぬ同胞も別れ〱となり、妾身も此地にさまようて來て、哀れの食客となつたのは、もはや五つ年の昔てある、虛か眞言かは知らぬがある人の言はれたには、渡る世間に人鬼ないとは誰が言ひしぞ、口こそ耳迄裂けね心の中はそれは〱鬼とも蛇とも譬へ樣なき人々や、斯樣な言葉は希くは事實てなけれと神や佛に祈ると共に、近頃叔母樣の御言葉をそれとなく思ひ合すれば、ヒシ〱と胸にこたえて三度の食もろく〱に喉へは通らない、長い月日の寄食の御恩更々仇には思へませぬが、今こそ秋の蝶の身分ても、生れ乍らの賤しき者てはありませぬ、假令何の樣に衣食に苦しんても○○業許りは思ひもよりませぬ、ては此の辛らき世をどうして渡るか、家業に貴賤上下の差別はないてはないか、斯うして口を酸くするのも、皆御前の末を思ふからよ、短氣を出さずに考へて見よ、と日毎日毎のおすゝめ、焦熱地獄其のまゝである、言はゞ吁、とや言はれうが假りにも○○よ○○よと言ひもし言はれもする間柄、止めても下さる筈てもあらうに、現在我子に毒を食へと言ふた政岡のそれにも似たる御心にて、海山情の言葉かは知らぬが、假令邪が是ても恩を仇てもどうしても此れ許りは死んでも仰せに隨はれませぬア、臨終の時我等の行末を案じ下さるが爲めに、幾度か息を吹きかへしなすつた父君の魂魄、尙ほ未だ此の世にまし〱て此の有樣を御覽なすつたら、嘸かしお腹が立たれましよう、それに就いても、信州松本にましまず旅寢の空の兄さんや、長野にさまよふ弟は吁、今はどうして居るだらうか、思へば〱悲しく口惜しくて五臟を絞る四苦八苦に溢ふれる泪に筆を染め耻も思はぬ心やりに書きをさめぬ。

餘り事實らしいので、迅谷らギヨツとして驚いたが、或は事實に近い事ではなからうか、絲の運びはまづいが、眞から出た苦痛の聲とも聞かれ、何にしても氣がゝりな文章が來たものである（評）

○かすむ沖合

……姫島燈臺なる幸子の君に寄す……

豐後　桃の家賤子

わが立つは磯の岩かど、女夫波音細う散りては、櫻貝あとにきらめき、綠なす海苔の香高う鼻にせまりて、際にけぶり渡れる和田の原、船小舟白帆を連ねて、君ゐます姫島も今は遙かの波路の末に、おぼろに横はれり。あゝ今彌生、村里は、山にも尾にも花白う咲き誇りて鳥その梢に囀り、人その下に酒を酌む。蝶飛ぶ野邊や千草色香を競ひて、菜花三里黃金を散らせば牛の聲眠げにひゞく麓の里は、桃千株春の光にかゞやきて、熱からぬ花炎天をこがし、外山の鐘もおぼろめくよ。げに美くしき彌生の天地よ。人は山に水に歡樂の極みをつくし、一たび敗殘の子も若ければ、また新なる希望に進まむを、殊更若き君にして、父母ゐます里、鳥啼く吾妻の都をはなれて、夢にも見ざりし離れ小島に、獨りの兄樣が慰藉者たらむと、移り住まへる此春を、あゝいかに淋しく暮しますらむ。浪のしぶきの窓近う散るはあらむも、ひらひらと胡蝶の夢のせて舞散る花はなからむ。すさまじく汐噴く鯨は見んも、花摘む少女の姿はなからむ。奇しき海士が舟歌はきくとも、夕月かゝる花間より、ゆるみし三絃の亂れ彈きは聞くを得ざるべし。巷の煩雜なければ詩は多からむも春をよそなる別世界、都の空の戀しくはおわさずや。陸ならば折々訪いて語らむに、海上七里浪荒く、舟路に馴れぬ身にしあれば、それは能はず、さりとて送らんに歌も知らねば、せめては拙なき文のみに、もの知らぬ野守が娘よとゆるしませ。

日はいつしか文殊の山に傾きぬ。ひたひたと、足もと浸し南より、滿ち來る春の潮よ。友ゐます島にもいたらば、女神が愛の囁きと、美妙の調べかなづとも、そ

みぞれ　攝津　小百合



が逞ましの爪牙振いて、友が夜半の夢おどろかすなかれ。沖台はるか白鳥飛びて、磯のおちこち鳥群れたり。

秀麗の痕あり、全體に再錬を要す（評）

○末ちやん　　播磨　女郎花

桃から生れた桃太郎、氣はやさしくて力持ち………可愛らしい聲でこう歌ふのは、お隣の末ちやんである。末ちやんは本年取つて七歳尋常一年生、丸顔の目のぱつちりとした色の白い雨の頰に大きな笑凹のあるそれはそれは無邪氣な可愛らしい子である。

鬼が島をばうたんとて、勇みて家を出かけたり……まあ何と云ふいゝ聲だらう、私は縫物の手を留めて聞いて居たが、だん〳〵足音が近くなつたので、障子を開けて向ふのかきぎはを通つてをるのを呼びとめた。末ちやん〳〵と呼ぶと、さも驚いたと云ふ風で、此方を向き、姉さん何と可愛らしい笑凹を見せて馳けて來た。末ちやん何處へ行つたのと聞けば、田圃へこれを取りにと籠に葱を一株二株入れて居た。お臺のおかづにするのと、云つたら、いゑ、但馬の姉さんが來たから御馳走するの、「おやそう」いつと聞けば、さつきの汽車でと、嬉しそうな顔、お土産は何をもらつたのと、云へば、まだよ、これから、そうそれはお樂しみねと云へば、此度は何を下さるでせう。と、一寸首をかたむけて思ひ出したかの樣に、姉さん歸つてお土産をもらつてまた來るわと、籠を持つて足早に馳けて行つた。又向ふの道で、桃から生れた桃太郎と、歌ひつゝ歸つた。末ちやんは、神戸の姉さんよりも但馬の姉さんを戀しがる、それはなぜでせう、此村の人はよく知つてをるが末ちやんは何も深い事は知るまい、又深い事を知らぬ內が末ちやんの花である。たゞお土産をたくさん下さるので但馬の姉さんをすくのではあるまいか……………末ちやんは世にも哀れな私生兒である。母の爲めには總領であるに、親子と云ふ名乗りもできぬ。又祖父母の爲めには初孫でこれが公然結婚しての子なれば世間へも自分相應にひろうして誰はゞからず抱く事も出來るのに………末ちやんを生んだ母樣は元は女かみゆひであつた、職が職であるから、口入屋の嫁さんも來れば、下女も來る、したがつて青年もちよい〳〵來る樣になる、然し祖父は嚴格な人で、いくら下女が來が、青年が來が決してみだらな事はせないと云ふ噂であつたが、どうした事かかみゆひの腹に子が宿つた。それが知れた時祖父は大そう立腹してかみゆひを殺してしまふと云ふて大さわぎであつた。かみゆひも後悔して溺死を謀つたが近隣の人の仲さいて、とう〳〵ある家で產をした。それが末ちやんである。其後末ちやんの父は此村に居らぬ、聞けば日露戰爭に出征して遼陽の戰で討死したと云ふ事である。今の末ちやんの父母は實は祖父母である。今は何にも知らぬ末ちやんはだん〳〵成人するにつけ身上話

を聞くてあらう、父を戀しがる時もあらう、其時はさぞ悲しむ事てせう。私はどうぞそういふ時がない樣にいつ迄もく今の樣なつみのない無邪氣な子て花が咲かしてやりたいと人事ながら祈つてゐる。

小說と美文の間とも言ふべきもの、眞に出來たり（評）

○餅搗　華子

毎年舊暦の十二月廿五日は私の家ては正月餅を搗くのてす私は少さい時分は非常に樂しみてしたが此頃は何ともありませ
ん併し何だか儀式めいた處も有て一種の感が有ます、やがて夕景になると出入の者二三人手傳に來る、庭の中央に蓆を敷いて其上へ臼を置くのてす、一方ては三日程前から水に浸てある糯米を蒸籠て蒸しますむせたらば臼へうつして兩方からこづくのてす、こづくと云ふのは杵と杵とてむしをそくひの樣にする事てす、こづけたら今度は向ふ鉢巻尻端折りと云ふ扮裝て「高い山から谷底見ればよ」なんて謡ひながらつくのてす夫がすむと今度は搗上げと云つて一人て少さい杵を持て搗く此折は手合せと云ふ事をする此手合せと云ふのが六ケ敷いので馴れないと中々出來ないそうてす杵が上つて下りて來る間に手水をつけて底を離したりくらつとひつくり返したりするのだから傍から見て居ると冷汗が出る私の家ては手合せはいつもお安と定つて居るお安は大變上手なのてよく空をつかせるもうつけたと思つたら底を離して置いて搗手が杵を振り上げて居る時いきなり取てしまふのだからどうしてもしまいの一つは何もない臼の中を力一杯つくので手が痛いから皆つくまいと思つて用心するがどうしてもつかせる其折のつきての顔は嘸をかしかろうが只一刹那なので見る事が出來ぬ妹は「お安今度つかせる折には妾に見せておくれ」と云ふお安が「つかせるんじやありません、つけたから取て來るのに又あとをつくのてすもの大方つき度いんてせう」と濟して居る、取て來た餅をめん板の上へおいて小さな拳位にちぎつてお安がなげるのをまちかけて居るとみては奪ひ合つてもんでもろぶたに並べ此樣にいしてつけた餅を奥の間へ運んでしまふともうお正月をまつばかりてす。

田舍の餅搗を見るやうに描いてある、おもしろい（評）

漁村の冬　岐阜縣　度會淸香



○飛沫の歌　三河　桃山須磨子

鳴呼飛沫の歌。如何にそれがやさしいものでありましやうか。なつかしいものでありましやうか。塵埃深き都の空に喘ぎ苦しむ人の子が、未だ嘗て知らざる自然の調がそも如何ばかり美しいもので有りましやうか。

夜明けぬ前、不圖夢路を破られて、小暗き閨に樂しき想を馳せつゝ、かすかにかすかに呼ける飛沫の歌を聞けば、實に忙しくも胸はおどるよ。此時若しも冷けき衣に身を纒ひて、窓の戸を押せば、深亂れ髮に先づかかる風、藻汐の薫りはしきりに弱き心をそゝるのです。瞳をあぐれば漫々たる海原は紺青の空と抱き合ひて、大島小島佛島などが、さまざまの形態をして其の中に浮び、右に行く舟、左へかける白帆、それすら面白いのに遙に目路の際涯を黒い煙りの一すぢがたなびく。と見る間に汽笛の響が冴え渡つて、日はうらうらとのぼるのであります。また夕暮、ひと日の終焉に勞れ倦みたる身を机に寄せ、泌々と孤獨のさびしさをわびつつ、かつと照る落日を漂はせて、徐ろにうたふ飛沫のうたを聞けば自ら心は慰むよ。

最も妾の好きなのは春の夜であります。淡々しい薄月の影を踏んで、仄白く打ち煙つた砂地を廻り廻り、やがて古色蒼々たる渚の石に腰をおろし、遠く天を仰げば浮雲の一片もなく澄み渡つた空は誠に美しく、波はさながら寐惚れて囁くやうに蹤近く來るのであります。凡そ世に是程憐れに又力の籠つた響は有りますまい。

鳴呼飛沫のうた。妾はいつもその聲を聞く毎に憂ひ、かなしみなげき悶え、あらゆる人の世の苦痛を離れて西の國の物語中の人となつたやうに、うつとりとするので有ります。

海邊の生活、能く表はれてゐる（評）

○朝　三河　永田舞鶴子

いつになう朝早く目が醒めたので、夜具の中から、顔を出して見ると、戸の隙間が少し明るく見える。まだ少し早いとは思へど、楊枝をくはへて、母樣達の、目の醒めない樣に、密つと雨戸を開けて、十坪ばかりの庭へ下りた。大福寺の御堂の裏の、青々とした柳の木に、春の月が淡く光つて居る。家の境に植ゑてある、蒼古び梅の樹の、花の蕾が一夜のうちに、大きくなつたかの如に思はれる。一枝折つて床に活けやうかしらと、思案しながら顔を洗つたが、終に折らないで書齋に歸ると、お母樣が、お起きなすつて、夜具を疊みなさる音がする。妾も直ぐと夜具を納めて、久しく覗いても見ぬ鏡臺の塵を拂つて、前に据ゑて、埃にまみれた、髮を梳いて、心ばかりの粧をして口紅をつける。少時たつと、ギーギーと釣瓶の綱繰る音がする、家の鷄が、コケコツコーと鳴く、雀が前の藪へ來て、グチ

ャ〳〵と囀づる、窓が最前の梅の樹て、ホーホケキヨと啼く。夜は知らぬ間に明るくなつて、硝子の丸窓に、ぱッと暖な朝日が當つて、床に据えて有る、盆栽の松の緑が、一入濃く見える。前のお婆さんが、一日も缺かさずに、裏の神樣へお參りなさる。拍手の音が小く聞える。あまり麗なので、窓の戸を押し明けると、此處には今朝咲いたばかりの紅梅が、鼻の先にぱッと匂ふ。雲とて一つない、綺麗な、湖の如な空に、雲雀が一羽、羽を擊いて、啼きながら舞ひ上る、其れが手に取る樣近く見える。



隣の與作さんが「お早う御座んす。」と言つて、通つて行く。觀音堂の松に止まつて居た鴉が、此の聲に驚いたのか、かァと啼いて、舞つて行く。此度は毘沙門の松にとまるだろうと思つて見て居ると、鴉は其處を越えて、花園山に隱れて仕舞つた。

花園山の麓に、朝餉の煙が游靡いて居る、煙の中から、鳥が舞つて出た、鶯か、鷹か、さつきの鴉か。蝶々が一羽舞つて來て、御飯の香のする處に止まつて、動かない、餓えてか。

夕ぐれ

磐城　登利子

新式の記事文(評)

○燄の讃美

大和　花蔦蒲

麗しきは焰の色にこそあれ。まばゆかる紅蓮の色には、きらめく金光の光耀もちて、宛らにみ空の星のなべてが一夜天下りして地に炎えぬる其れのごと、或は夜叉大魔王が、肩に被げる緋錦襴の衣の袖、雙手に倦きて怒に裂ける其れにも似て……あゝ巨人が咒の祭壇に、萬本の燭の焰の炎え上がりて、空に照り映ゆ其光や、其の色や、炎々として輿に入る魔の子の姿と現じては、げに嚴のきはみ、權の限りをあらはすなれ。さるにも凄じく雄々しげなるは焰の容貌なるよ。例ふべくんば之やげに、憤怒の血汐胸にとき打つ靑春の若人が、瞋恚の焰渦卷き上りて、狂へる心に七の情の五色の絲と亂るゝ其かや。見よ相よりて一魂にもつれては、白熾熱の極度を現じて、のの字に狂ひ、しの字に渦卷き、

離れては紅の雨、金の雨、火花の柱空に冲ひて、天に逆注ぐ其が勢は、宛ら血をもる九の角振りかざして、怒れる火龍が天昇りする其もかくや。さあれ猶人よ焔の呼喚の凄じげを聞け、巫女の笑の物凄う、焔の鼻子が暴風に上ぐる鬨の聲、大地の維を搖り動かしめては、其所に珊瑚の柱なく、其所に瑪瑙の甍なし、玉の樓とや、黄金の殿とや、はた人の子とや、肉の亡骸とや、殘らんものは何れ何れぞ。哀れ罪とは何ぞ、汚穢とは何ぞ、はた名利よ、禍福よ、そは遂に火龍一旦の犧牲にも足らぬものに非ざらでやは。あゝさらば吾をして、ソロアスターが火を拜してあらゆる善を司れる陽の神よと崇めぬる其れの如く、焔に讃美の聲を上げしめよ。

焔の讃美、着眼既に奇抜、文字の怪焔、一更に紙上に火を吐く（評）

○早起き

伊藤曉子

來週よりは毎朝あの長い〱河沿ひの松並木の中を通つてお琴のお溫習にゆく事に決心した。それにしては如何かして早起の習慣をつけねばならぬ、今までの如く長寢の仕たいまゝでは仕方がないと思つて、明朝よりは必つと早起を實行しようと、昨夜は心に誓つて床についた。

すると今迄は宵から障子に日がさすまで一度も眠りから覺めた事のなかつた私が度々目さめる。其度毎に眠い目をやつとこすつて枕元のマッチをする、と俄に明るくなつたので目が如何にもまぶしい。時計を見ると恰度二時半である。火が手元までくゆつてパッと消えて下に落ちた。六時を過しては大變だと思ふので二三度も火をつけて時計を見たがまだ早い。やつと六時になつたので溫かい床をぬけ出てランプに火をともし、着かへて楊子をもつて裏に出た。

ランプを臺所に置いて薪屋の入口まで來ると色こそ見えね臘梅のえならぬ香がサッとはなをうつ。鷄は太古の如き靜けさを破つて曉の歌をうたつて居る。髮も束ねて朝の用事の終へた頃漸く東雲の空が白みそめて、木の枝の干大根が白く見えて來た。カラスは勇ましく人よ起きよと歌ひ乍ら山の塒をはなれた、人々は今漸く起きたのであろう隣の水釣瓶の音がきこへてきた。その中に夜は全く明けはなれて朝日はうら〱と障子に木の影をうつし、其心地よさはたとへん物もない位である。

ォゝいゝ心地！自分はもう一生早起をつゞけようと思つた。殊に來週よりは清い〱朝の氣の中をぬけて先生のお宅へ通ふのだもの心地よさはどんなだろう。自分は今朝實驗によつて「精神一到何事かならざらん」の格言を心からさとつた。何事も心に誓ひ神にちかつて實行すればよい習慣よい習癖がつゝのは云ふまでもない事であろう。よい習慣よい習癖からしてよい性質を作りたいと私は今朝かゞやく希望を胸の中に得たの

てある。

○夜道　　　　　　横濱　岡村まさ子

此夜更けてから歸るのはあぶないから、と叔母樣のお止なさるのを、ふり切つて、唯早く歸りたい一心に暗い暗い山道を夢中で馳け出しました、右を見ても左を見ても家こそあれ瓦斯などは一つも見えません、あたりはなんとなく物すごい恐ろしいような感じがしますあゝこんな事なら來るのではなかつた、と後悔の念は今更に胸をおそつて來ます、ふとむかふを見ると眞黑な者が立つてゐるではありませんか思はずからだが、ぞくつと、あゝ歸らうか、もう直我家は見えるどうしよう、あーら不思議黑いものは動くだん／＼こちらへ近づいて來る、たまらなくなつて元來た道へ馳け出さうとする、と一寸お尋ね申ます、と優しい聲、驚いてふり歸ると、以前の黑い者は、あゝ可憐な十四五歳の按摩、あの町の方へは何方へ行つたら出られましようか、かあいそうに此按摩さんは道に迷つたのでせう！丁寧に道を敎へて按摩と別れました、家へ歸つて見ると戶はしまつて家内は、しんとしてゐるやうやく女中の富やにあけてもらつて、床に入つたが、今宵の恐ろしかつた事など思ひ浮べて、一夜、うつら／＼恐しさに包まれてゐました、あゝ長上の命はきくもの。

歸省　　大坂　　矮文子



○この海　　　　沖繩　はつね

冬とは名のみの春の宵、月は高く空にかゝりて、小さく咲き初めし菫だも、見のがさゞる其光は、限りなき海原を、てらし、山をてらし、世界をてらし、又、我心をてらしぬ。

我胸、月にとかされてか、おのづとほどばしり出たり、止めどもなく。

われはこの思出多き海に向ひて、泣かれん限り聲はり上て泣きぬ、歌ひぬ、又、笑ひぬ、君と我身を……

されど我胸は、いえざりき。

泣きて、歌ひて、いゆべき程ならば、などて、君を見捨てざるべき。

いかなる、罪か、報ひか、我胸のそこのそこは、過ぎし日ともに契りし此海の、まのあたりたゞよへるを。

吾れ幼き日、初めて浦島物語きゝしとき、人まち顏に一人海邊に立ちつくせる、乙姫樣のすがた、あり／＼と此海にあらはれたるを、つねにおもひき。さるを吾

れは此海にて、君と語り、君と別れしなり、而して、遂に悶の身とはなれるなり、吾れは唯、君あるために生くる身ぞ、君をたよりの盲目の身ぞ、されど君は捨て給ふとや……。熱き〳〵胸の戀は、女波男波のさゝやきと、ともに流れ行きて東の里の、君の手に汲む朝の水ともなり、御胸の夢と戰ひて死なまほしきを。

＊　＊　＊　＊

雲は月を被ひ、世界はうす絹を、もれ來る燈火の如く我心また、ぼうとなりて、立ちどころをしらずなりぬ、あはれ此海よ、とこしへに我思出の種となり、娟となりて、僞り多き、人の世を呪ひつくさん。

○寐顏

横濱　長谷川花子

フと目を覺ます。

何時ものやうに簞笥の上から、豆ランプがにぶい光を投げて居る。

妾は何の氣なしに、右手に寐ていらつしやる兄樣のお顏を見る。豆ランプの光はいともかすかに、兄樣のお顏を照らして居る。日頃からお身體がよいので、斯樣やつて見た處では、失禮だけれども、まるで病人のやうである。瘦せた頰、高い鼻、濃い眉毛等、皆其樣思はせる種である。

寐返へりをして左を向いて見ると、武坊が無心な顏て、お母樣に抱かつて寐て居る。お母樣の方を向かずに、妾の方を向いて居るからよくわかる。今年五つなので實によく肥えて居る、今にも熟してわれやアしないかしらと思はれる頰は、まるでリンゴのやう。リンゴ程はつやはないが、たしかによい色である。何かよい夢でも見て居るのと見えて、口元に笑みが見える。いかにもあどけない口をして居る。實際小供は罪がない。

お母樣もよく寐ていらつしやるやうだ。お母樣のまアおやつれなすつた事。何時も見て居るお顏だから、少しも變らぬやうだが、斯樣やつて見ると如何にもおやつれなすつたのがよくわかる。額の皺がきわだつてよく見える。お髮にも、白いのがチヨク〳〵見える。此にぶい光にわかる位だから、晝間などはきつとよく見えるに違ひない。何してもお母樣のお骨折り、御心配は非常なものだから、斯樣もなるのでせう。あゝ本當にお可哀想に……。お父樣でも居らつしやつたならば……と考へると、自然に涙ぐまれて、はては思はず泣いた……。

豆ランプは油がつきたのか、パチ〳〵と二三度かすかな音たてゝ、光が前よりも少しよわくなつたやうだ。と、時計が闇をやぶつてボーン〳〵と二つ……。

お伽噺

巖谷小波先生選



▲規定　新しきお伽噺を創作すること、投書は總振假名つきにて二十四字詰八十行まて、用紙は前同斷、締切は毎月十五日、一人一章以上を許さず、懸賞は甲種の規定に據る。

二等

○山の規則

三重縣阿山郡上野町車坂町　北村みつ子

信濃の國にお蝶さんと云ふ娘がありました。

　これは明治のお話。みなさん御承知の飛彈信州は山國でせう。大きな杉や樫やが一ぱい繁つて、晝も尚くらい山の奥て、お蝶さんは、朝から柴を拾つて居りました。一心に柴を拾つて居りました。

　彼れこれする内、もうお午になつたものですから、腰の辨當を開きますと、まア、何うした事やら、お米が少しもありません。お蝶さんはぼんやりして、考へる程不思議て堪りません。空腹いのも忘れて、段々考へ出しました。すると、足元を流れて居る水は、石に當つてくだける音、其の音が何だか人の言葉のやうに聞えます。お蝶さんは耳をかたむけました。水はから云ふ意味の歌を唄つて居るのです。

　お辨當のゆくえきゝたけりや
　お山の木玉、大男にきゝな………

　お蝶さんは早速、木玉を呼びました。『おゝい』と云ふと、『おゝい』と答へます。『何うしたのか知ら?』と獨言しても、矢張、『何うしたのか知ら?』人眞似ばかり致して居ります。さア、からなるともう何うしても聞きたいは人情、しきりに木玉に云ひましたけれど、矢張同じやうな事ばかりくり返へすのてした。水も同じ歌をくり返します。

　お辨當のゆくえ、きゝたけりや
　お山の木玉、大男にきゝな………

　お蝶さんは口惜しくつて泣き出しました。するとひよッくり、水の中から一疋の蟹が出てまいりまして、『お蝶さん。』慣々しく呼びます。『お辨當のゆくえは、私がよく知つて居りますけれど、今私が云ふ事は出來ません。』『何故なの?』

　と云ひますと蟹は、

『此のお山ては、自分の事は自分て考へる規則になつて居ります。木玉親分もよく知つて居られるのてすけ

れど、山の規則を破る事は出來ません。』蟹はから云つて口惜しさうに泡をふきながら、
『むかし私の祖父は柿の實を盜まれた上に、ひどい目に逢はされましたけれど、やッぱり山の規則で、その對手を人に訪ねる事が出來ませんでした。で、自分と苦心して考へた上、とうとう敵をうつたので御座います。お辨當の盜人も、今私から云ふ事が出來ません。』
『だけど、一寸敎へて下さいな。』
お蝶さんは熱心にたのみますと、蟹はさも一大事でも話すやうに、あたりをきよろきよろ見廻しながら、
『では申します。』



『誰れなの？』お蝶さんはから云つて、熱心に答へを待つて居ります。
『お蝶さん、盜人は私の敵で御座います。』
蟹はから云ふと直ぐ、水の中へかくれて終ひましたので、敵と云ふだけで、もう其の跡は聞く事が出來ませんでした。で、
敵？とお蝶さんは思はず叫ぶと、『敵』と木玉は云ひます。『一體、誰れの敵？』と獨言しますと、矢張、『一體誰れの敵？』と云ひますさあ、何う考へても解らないので、お蝶さんはぼんやりなつて終ひました。すると、ふつとおッ母さんから聞いた、お噺の猿蟹合戰の事が心に浮びました。

お蝶「蟹は柿を盗まれた。」

木玉「蟹は柿を盗まれた。……」

お蝶「だから蟹の敵だわ。」

木玉「だから蟹の敵だわ。……」

お蝶「きつとさうよ。」

木玉「きつとさうよ。……」

お蝶「お猿が盗んだにきまつてる。」お蝶さんはやつと「敵。」の謎を解きました、すると木玉は初めてから教へて呉れました。

木玉「お猿が盗ンだにきまつてる。」はツきりと木玉は云ひます。お蝶さんは大變喜びました。

自分の事は自分でする。

此れはお山の規則です。めでたし〳〵。

〔評〕獨立自修の教訓を示した所は、よい思付です。

三等 ○章魚

富山市惣曲輪四〇〇　小林よし枝

昔大章魚先生が澄み渡つた海の底を伺ふて食を尋ねてゐると、長いなわのついた土塊が澤山ある、其塊を小章魚等が各一個づゝ占領して、得意然と顔ばかりだしてゐた、之が良い具合に房屋ができてゐるのでした、龍宮樣から吾々章魚社會に給與せられたものに相違ないのです。而るに小章魚の奴め、己れに無斷で占領してゐるは不都合の事だと早合點し、試にソツト大きな頭を其腔の中へさしこんでみたら、隨分居心地が良さそうでありました。そこで先生が思ふには小章魚を欺むいて此房室を追拂ひ、自分の味方の者を呼びよせ、悉く分捕せうと決心して皆の者に「おい〳〵早く此家を立ちさらぬと今につなみが起つて土塊をこわし、海獸がきて皆んなのものを丸呑みにしてしまふぞ」とおどかしました、すると小章魚連は周章狼狽、然らば早くたちさつて其災危を免れようと、打そろつて退却して元の岩穴へ歸る途中、一尾の鱧に合ひました。鱧は「オイ小僧何處へ行く」かと質問たから、以上の次第を物語ると、鱧は笑いながら「夫は貴樣達が大坊主に一杯喰わされた、己れが今からいつて談判して尋常にたちのけばよし、否らざれば此嘴を以て噛み殺し、巣は取り返しくれるから、付いてこい」と勵聲一番、先頭に立つて大坊主の有り家を探しあて、「オイ章魚坊主、貴樣、己れを知つて他をしらぬ、不德義千萬であるぞ、最前小僧を誑ッたな、つなみのある事なんぞ貴

樣しれるもんじやない、貴樣こそ早く此處をたち去らぬと、今に漁夫に捕へられて、齒拔け老人のために丸呑みされるぞ」と威喝を加へたが、大章魚は恬々として應ぜず、反つて嘲つて曰ふには「今日の世の中は正直一遍てはをられぬ、優勝劣敗は常てある、其方も平素は小魚を生きたまゝ腹中に葬りながら、餘計な世話をやく釣針のついた鰕を食ふ事があるよ、壯士の樣な擧動をせぬがよい」と反論駁撃した。すると鱧は鋭利な嘴を開いて將に一刺を加へ樣とすると先生忽ち身をひるがへし十八番の水雷ありとて、一陣の黒汁を放つたから大變！黒烟濛々として眼を掩はれ耳鎖され、暗黒辨ずべからず「ヤー大變だ、小倅速かにかゝれ」と號令を下すと小倅も夫れ〲黒烟を吹て互に砲火を交へたが、小銃は巨砲に勝てず、義俠な鱧も共に敗亡四散するの悲劇を演じた、大章魚先生意氣愈々昂り、直に海底電信を利用し、親族一同を呼びよせ、土壤の堡壘により、居を構へ、親族に一房づゝを割譲して一夜海底に王たるの夢を結びました、東天すでに白みかかつた頃「今日は大層重く手答があるから、なわを切らさぬ樣に注意しろ」と波を縫つて、微かに大章魚先生夢を破つた聲がしたが、やがて眼を開くと、豈圖らんや土壤はなわに引かれて船中に繰り上られ、先生の身も亦處をかへてゐるのでした、て眼を凸だしてみれば、親族共は板の上に打鏈のオメンを頂戴し、寂として聲もない、あゝこれは大失敗をしたと百方籌策をめぐらしたが、漁夫は一向平氣て「隨分吐くよ」と輕く受け「大漁々々」と歡呼する。先生進退谷り、八本の足を奮ひ、漁夫にすひ付たから漁夫どもは奇術に陷り手も足も動かない今にも海中に引込まれんとする樣になつたので濱邊に向つて救ひを求めました。其聲に應じて、附近の者は殘らず舟をこぎつけ先生のまさつけた足をまさかりて切り落し、銘々船に滿載し、最早餘す處僅に二本となつた先生は、悄然訴へて曰く「冀ば此二本の足を存ぜしめ、而して吾が頭から頸部まで鋸て挽割つてくれよ」と、漁夫怪んで故を問へば「私しはこれから娑婆へて、曲つた釘をぬく役を勤めます誓つて將來不善を人に施しません」と。

【評】佛説にありさうな話だが一寸變つて居て面白く感じました。

四等　○御雛樣

東京市小石川區小日向第六天町十三番地　鶴見美那子

或る所に、露子さんと云ふ、可愛らしい、御嬢さんが

ありました。御歳は、十歳て、姉様は、百合子さんと云つて、十四歳に、おなりでした。それて、この姉さんの方は、學校でも、温順て、學問も、能く出來るのですが、露子さんはなか／＼の怜悧者てすけれども、季子の故か、我儘て學校でも度々喧嘩をしますし、家庭ても、あんなに、優しい、姉様と、さへ、口論を、爲るものですから、母様も、大そう心配してをるててした。處がこの露子さんは、また、大の人形好な、ものですから、二月の末になりますと、最早毎日の様に、お母様や、姉さんに『お雛様を飾つて頂戴！飾つて頂戴！』と申て居りました。それて、姉様は『今日は、御天氣も良し土曜日だから出して上げませう』と、仰つたので、露子さんは、大悦び、此の日だけは、我儘も云はずに、お晝の御飯を、濟ましますと、直に、『さあ出して下さい。』と姉様を、引ぱつて、御藏まで馳せつけて、いろ／＼のお道具を出しました。そして、姉様の内裏様や五人囃子それからお母様の隨身様に小町、露子さんの内裏様や、官女などを、行儀能く並べました。まもなく、夜になりましたから、蠟燭も、立てましたので、露子さんは、嬉しくて、嬉しくて、雛段の前で立つたり、座つたり、這ひ這ひ人形を抱いたりして悅んで居りました。

嬉　東都　宮原みどり



其内に、御節句にもなりましたので、御白酒や、いり／＼、菱餅、御重詰なども、飾られまして、露子さんもいろ／＼の御馳走をいたゞいて、御機嫌がよいものですから、夜になつても寢やうとも爲ませんてしたが、お母様が、

『露ちやんや、最早九時ですよお寢みなさい。まだ明日もありますから。』と度々仰つしやつたものですから、いやいやながらぷう／＼云つて、やつと床に這入たと思ふと直にすや／＼と寢てしまひました。所が暫時すると露子さんの枕元で『もし／＼露子さま御孃様』『もし／＼御孃様。』と云ふ聲が聞えましたので、目を覺まして『何だか聞いた事の無い聲だが誰だろう』と、

頭を擡げて見ましたが、誰も居りません。「是は變だ。」と、思つてまた眠やうと爲ますと、また優い聲で、

「もし〳〵露子樣御孃樣」といふ聲がします。「また？」と思つて能く〳〵聲のする方を見ますと、これは不思儀、露子さんの枕元には先刻まで雛段に御行儀能くして居た、姉さんの御雛樣と、自分の御雛樣とが、二人て端座つて居りました。露子さんも一度は、喫驚しましたが、大好の御雛樣ですから、露子さんは、

「おや御前は、御雛樣ではないか、何しに此處へ來たの？」と聞きますと二人の雛は靜かに頭を下げて、

「お休みの處を、お起し申しまして、誠に、濟みませんが、實は、一寸御願ひが御座いまして參つたのですが、何と叶へては下さいませんか」と申しますと、露子さんは、

「何か私に御願ひがあるつて？何なの私て出來る事なら何でもして上げるわ！」といひますと、二人はさも嬉しさうに、平常てさへ可愛い顏に、靨をいらして、

お雛「御孃樣に御出來になりますとも、まあそれを聞いて安心しました。」姉雛「實は私共が、御宅へ生れましてから、これ（妹雛を指して）と姉妹となりまして、最早十年にもな[illegible]すが、只の一度も喧嘩處か不平に思つた事も無いので御座います。それて如何して此樣に仲が善いかと申しますと、私が、親切に世話をしてやるのは申すまでもありませんが、わけても、此の妹が少しも我儘を云はず、よく言ふ事を聞いて呉るからだろうと思ひます。」とだん〳〵涙聲になりました。すると、妹雛が、

「それて私が斯樣な事を、申し上げるのは、失禮かも知れませんが、御孃樣御二人の御仲の惡いのは、如何しても、露子樣が餘り我儘をなさるので御母樣も、御心配なさいますし、御おとなしい百合子樣までが、御怒りになるのだらうと御察し致しますの！」なほ二人は、熱心に、

「それて、今夜は何卒御孃樣が我儘をお止め遊ばして御二人の仲の善くおなり遊ばす樣にして頂き度いと思ひまして態々御願ひに、上がつたので御座います。」と申しました。露子さんは初め少し頭を擡げて聞いて居りましたが、元々怜悧な子てすから、姉雛の話の終了頃になりますと、最早「自分が今迄惡かつた。彼樣に親切にして下さる姉さんの云ふ事もきかないて惡い事をした。」と氣がついたものてすから、恥かしくつて、恥かしくつて、終には枕に打伏して啜泣に泣き出しま

した。
すると隣室の方で、
「露ちやんや、お起き！お起き！」と呼ぶ聲が聞えますので偶然目を覺して見ますと、これは〳〵、夜は何時の間にか、明けて、御雛樣は、影も形も見えませんが、自分の枕は、濡れて居りました。處がこれからと云ふもの、この露子さんは前とは變た人の樣に溫和い從順な子になりました。めでたし〳〵〳〵!!!

【評】教訓談としては先づ無難の作です。

五等　○宵の明星

千葉縣長生郡　北田信子

七歳の兄五歳の妹、共に夕暮の窓より可愛らしき頭を出して、不思議さうに宵の明星を指し合ひぬ。兄樣あの星は何故あのやうにぴか〳〵と光るのでせうと、突然に妹が問へば。今日學校の先生に、裏の川は海の子供で裏の岡は山の子供、蕾は花の子供で僕達は人の子供だと敎はツたから、あんなにぴか〳〵ひかる星は、乾度月の子供だらうと、昨年より學校に行き始めたる兄は賢だちていふ。さうと言かけて妹は又星を仰ぎ、それでは兄樣あの星も私たちが家の阿母樣のやうにをほきく〳〵なる時分には、お月樣のやうに大きくなるのかえ。うむさうだ〳〵と妹の肩に手を懸けながら、愛度氣なく兄は答へぬ。

かくて二人は夕暮ごとに必ずこの窓に凭かゝりて、無心にも宵の明星のやがて大きくならむときを待ちぬ。彼等の稚なき目には、夜毎にその光の大きくなり行くごとくにぞ見えたりけむ。數夕の後、二人はその星の姿を覺え、いつも寺の杉の上に出る星なることを覺えて、雲暗き雨の夕を此上なく怨みぬ。

然るにその年の秋も暮れて、野分の風杉の梢を吹き、鎌月の影に初冬の寒さをおぼゆる頃、いつよりとも無く、その窓に優しき妹の顏は顯れずなりぬ。顯れたる一個の顏も、何にとなく憂を帶びたるごとし。

暫くありて内に細く愛らしくしかも震へたる聲ありて兄樣星は星はと尋ねぬ。顯れたる一個の顏は急に振り返りて、星は出て居るよと悲しげに答へぬ。

病みたる妹は日増に衰へ行くらん。冬近き空は時雨勝にて、ぬれたる落葉と木枯の折り〳〵吹きおこすもあはれなり。

＊　＊　＊　＊　＊

冬の初、路暗き村寺の墓地に、新らしき墓一ツ添ひて

手向の花も大方は萎みはてたり、死したるをのが子にそゝぎし父母の涙は、あはれ幾許ぞ。

窓には猶ほ宵ごとに只一個の顔顯れぬ。彼の眼は涙を含みて寺の杉の上に出てたるかの星を眺めて居り。彼は猶ほ、かの星の大きくならむとき。いつか〱と待つならむ。

〔評〕よく出來て居ます、併し何かの本て見たことがある樣にも思ひました。

秀逸

○月の宮

岡山縣　内田なつゑ

今お湯から上つて庭に出たのは今年十歳になる二郎さん空は美くしく晴れて東山の天狗松の上にはお月樣が莞爾。

二郎さんは唱ひ出した。

「お月樣幾つ、十三七つ、未だ年は若かいぞ」とお婆さんから聞いた歌を聲高に唱つて居ますと内からお母さんが「二郎や早く歸つて御飯をお食べよ」「へイと云て二郎さんは内に飛び込んで「お母さん私ねー御飯を食べてお月樣の所へ行くのよ」「おゝ御行き〱」と母は何氣なしに答へた之を聞いたお姉さんは笑ひながら「あらまあ二郎さんお月樣の所へ何うして行くの」「それは理ない足があるからねー」「いやな事を云ふ二郎さん足があつたてお月樣は上の方だよ」「いゝえ東山の天狗松の上に居られるよ」「これ二郎は何を云ふの天狗松の上には昔から夜は天狗が出て人を食ふと云ふ事だから誰一人として行つた者は無いのよ」とお婆さんが云ふと二郎さんは目を圓にして「何うして天狗なんか出るものか、ねーお母さん」と云ふと母は優しさうに「二郎さんは未だ知らないのか、お月さまはねー上の方に居られるのですから行けないのよ、そんな理も解らない事を云はんてもねー御飯を食べたら早くお寢なさい明日は又學校ですから」二郎さんは誰も賛成して呉れないのでとう〱寢て終ひました、翌日の夜二郎さんは又庭に出て東を見ると今夜もお月樣が天狗松の梢に掛つて居る樣に見える、二郎さんは庭の石に腰を下して考へた「あの松の上にはお月樣が居られるに違いない、行きたいなー、しかし内の者に云ふと皆賛成して呉れないから私は是から一人行かう」と決心した、それなり二郎さんは東山へ驅けつけた、やがて森の中に入つた、道もない木や草の茂つて居る中を二郎さんは無茶苦茶に急いで行つた、やがて天狗松の下に

來た「やー大きな松だなー、どれ私の何程抱へ有るだろう、一つ二つ三つ……おや十三抱へ有る、大きいなー」と云ひながら二郎さんは、さも驚いた樣に上を見上げた、「やー上の方は見えないぞ大層高いなー、やー松の間から月が見えるよ」二郎さんは大喜び。

「月の宮は何處にある、月姫樣は何處ですか、月の世界に上りたい」と手を拍つて唱つて居ますと又何處かて美しい歌聲が聞えますので二郎さんは誰だろうと思つてぢつと聞いて見ますと、

「年ぞ千歳の天狗松
松の上には月世界
實に立派な月宮殿
月姫樣は宮の内
舞や踊りに音樂や
實に賑はし月宮殿
早くお上がり二郎さん、早くお上がり二郎さん」



おてだま　大阪　生田稔子

二郎さんはふと思つて上を見ますと之は／＼美しいお姫樣が松の枝に腰かけて唱つて居るのです、そして二郎を頻りに手招きして居ます、二郎さんは嬉しくて堪りません松を上つて行きました、お姫樣は二郎の手を取つて「ようこそお出てした之から私が月の宮へ御案内致しましよう」と云つて段々上に上つて行きます、二郎さんは大喜び笑々しながら上つて行きます、茂の中をぬけると晝の樣に明るいので向方を見ると之は美しい御光のさした御殿が見えました、二郎さんはお姫樣に向つて「茲が月の宮ですか」「そうですよ、さーこちらへ」と云ふて二郎は立派な御殿の一室に通されました、やがて澤山の御馳走を出しました、少時するとあちらからも此處からも美しい音樂の音が聞えると美しいお姫樣が澤山の事出て、まひや踊を始めた、二郎さんは面白くなつて來て夢中て見て居ました、それが終ると月姫樣が現はれて「二郎さん、ようお出てした、之はお土産に」

と云つて小箱から寶玉を取出して二郎に渡した「此山には他に恐ろしいものとて居ませんが唯一つの魔物が居ます、それは大蛇で毎日十二時頃から山を歩み廻るのです、若しや大蛇に會つたならば危險ですから此魔避の杖を御用意なされて居れば大丈夫ですから」と云つて三尺の水晶の杖を二郎に渡して「之松姫や下までお見送りせよ」「はい」と云て出たのは先に二郎の案内された御姫樣、二郎は月姫樣に厚く御禮を申しまして松を下つた、又森の中に入つた、所が俄にざわ〳〵云ふと思ふと頭の臼の樣な目の光る大蛇が現れて二郎に飛かゝらうとする、二郎は彼の杖で一打に頭を打つた、蛇は恐れて逃げ去つた、やつと二郎は安心して内に歸つた、内では大變です、二郎が居ないと云つて一生懸命に探して見たが見えないので内の者は大層心配して居る所でした、さ―二郎がお月の宮から魔避の杖に寶玉をもらつて來たと云ふので大喜び早速祝をしましたとさ、めでたし〳〵。

【評】よくある筋ですが文章は達者に出來て居ます。



新刊紹介

▲茶道と香道（水原翠香著）　家庭百科全書の第五編である、茶の湯も、香道も女の嗜みとして古くから心得ある家庭では其子女に敎へることになつてゐる、本書は茶道の部と香道の部に大別し、一々其由來から作法のこと、心得のこと、流派のことなどを懇切に圖を入れて說明してあるから初心のものでも茶道又は香道の一わたりを知ることが出來る、菊版和綴三百五十頁（定價四十五錢博文館發兌）

▲落葉（薄田泣菫著）　詩人薄田泣菫の散文を集めたものである、泣菫の散文は詩を讀むやうで一語一句に新しい意味が含まれてある、殊に本書を繙くと其大和や京都の舊都のなつかしみが胸に溢む、普通の散文家が書くと冗漫になりさうなことでも泣菫は急所を捉えて書くから短い一章のうちにも深い印象を與える、模範と云ふのではなく寧ろ愛読すべき文集として本書を江湖に勸める體裁高雅四六版二百五十頁（定價八十五錢京橋區南小田原町三獅子吼書房發兌）

▲月魄（菊池幽芳著）　新聞でも評判あり、芝居でも評判あつた幽芳の作「月魄」の藤の丶卷が出た、挿入になつた美しいクロースの本である、作の價値は先刻御存知の書であるから兎や角言ふの必要はない四六版四百五十頁（定價九十錢京橋區五郎兵衛町金尾文淵堂發兌）

▲日記文作法（吉野臥城著）　日記を書く準備や研究を親切に發表したもので文例も澤山ある、單に作文の參考書としても益がある四六版二百五十頁（定價四十錢本鄕弓町昭文堂發兌）

▲哀樂（前田夕暮著）　月刊歌集である、第二が出た二十八頁（定價七錢麹町區三番町白日社發兌）

新派和歌

與謝野晶子先生選



▲規定　新興の短詩と稱せらるゝ新派の和歌を募る。原稿には新派和歌と明記し、半紙に認め一人一首限り、原稿には本名を記入すること、締切は前同斷、懸賞品は乙種に據る。

二等

柳河　梧桐知登子

御名呼べど心和まず魔の神のとらはれのごとうとましき日よ

三等

愛知縣渥美郡二川町大岩、神谷儀三郎方　神谷よし子

美しき京の少女が髮洗ふ春の水生む紫の山

四等

豐橋市鍛冶町五五、増吉方　滿須子

水色の衣きてあまた絃の精琴ひく君をめぐるとおもふ

秀逸

◎千葉縣　今井しげ子

自らをあざける如き笑をして君にわかれしつよかりし人

◎茨城縣　木村惠與子

鳥おほく夕空すぎぬ江をこえて鐘なる村へ落花の村へ

◎豐後　菅原芳子

春の夜の夢に相逢ふ羽白き少女思ひぬ菜の花の路

◎土佐　深瀬ます子

春の日は衣に香燒き髮そゝぎこゝろ平に人をこそ思へ

◎京都　山口愛華

目ひらけば罪に汚れし現世を呪ひ得しごと紅蓮くづるゝ

◎大坂　岡千代子

帝王の手にもゆるさずくろ髮は尋とぞなりぬわが二十三

◎京都　吉田しづ枝

わが胸に今日咲き出でし戀の花枯れむ日思ひ泪ながるゝ

◎北海道　北澤白雨

雨もよし琴に倦みたる黑髮の君にきてなく鶯もよし

◎鹿兒島　稻子

七峰のふもとにつゞく梅の里ほの〳〵夜あけ鶯啼くも

◎弘前　佐野光子

わが戀の死したるに似て冬の日の空に動かぬ灰色の雲

◎下野　梅澤哲子

折々は恨しき世を燒き盡す猛き火となり燃んとぞ思ふ

◎伊賀　山村ゆり子

幾百の海蛇あつまり戰へるさまと思ひぬ北海の冬

◎三重縣　帆山靜子

萬人にすぐれて淸き心とはわれを思ひきさて人のろふ

◎相摸　日代奈加子

罪の子の小さき胸に數しらぬ鬼きてたけぶ夜をしろや君

○　西多摩　森田志滿

咲く儘に流るゝ儘に打なびく花藻あさまし我に似るゆゑ

○　土佐　高橋白ばら

まゐらすと文に封じぬ思ひ出を野べにつみつるすみれ一もと

○　下戸塚　うつせみ

夢の海漾ふ船の赤き帆に黑髮なびけ立つ人やたれ

○　鹿兒島縣　吉田絮花

櫛につくぬけ毛ながめて淋しくも我ある軒の鶯のこゑ

○　奈良　中富よしみ

きさらぎのぬるき日かげにむら消えし雪にも似たるすゞしろの花

○　千葉　深山りゆう子

夕雲に神の樂の音こだますと海見てたちぬ初夏にして

○　姫路　尾田一子

白百合のその花瓣に口づけて君をぞおもふ曙の野邊

○　上野　桂濱なみ枝

五月風野原に吹ぬあか〳〵と日落る原の大きなるかな

○　伊勢　山路くに子

名なし草白きちひさき花にほふ神秘はきよしわれ少女なり

○　長崎　みどり子

夕日影遠き野末に消えぬると斜しいそぐわれの世なりき

○　淺草　まこと子

名もしれぬ小草つみとりくちづけて美し人をまぼろしに見ぬ

○　群馬　飯塚美都子

朝の窓君がほこりの黑髮に長きをきそふ白藤の花

○　盛岡　節子

何となく心ほだされ行く方も忘れて立ちぬ梅の香のため

○　越前　上原遠子

冬枯れの庭の散り葉に霜冴えて木の間にかゝる有明の月

○　赤坂　高木杜若子

雪ふりに總身の血潮こぼるれど君住む胸の血はあたゝかき

○　三明千鳥

さみしみはわが胸すぎてぬば玉の暗には入りぬ怪鳥となりて

○　讃岐　十河春江

新潮の音なつかしき磯村や今朝紫の雲の流るゝ

○　近江　原木松翠女

月朧ろ白梅薰る此宵に君はうまれぬ歌うたふべく

○　越後　山田哲子

春の日はうすぐもりして白梅の垣に馬具ほす人に花ちる

○　京都　かをる子

七人の戀人すててきませかし心火に似て君戀ふ我れに

○　愛知　富美子

春のうれひ秘めたる絃のあやしくも君がみ歌にふれてさゝ鳴る

○　芝　ゆみゑ

當ふきれ矢の字帶する京の人月おぼろなる花かげにして

○　加賀　小島清子

尊さに佛名稱へ手合しぬ彩雲匂ふ落日の海

○　下總　三ツ森ゆき子

大空に天の女神が集ふ如光やさしき春の夜の星

○　安房　長谷川寧子

天にして夜をてらせる銀燭の燭したゝりて成り出てし君

○　下總　平川漣江子

しろがねの穂のみ光身に浴びてゆかむとぞ思ふわれ歌の道
○　靜岡縣　増田仙子

かはせみや池のそこなる水姫の珊瑚の簪をぬけてこしかや、
○　名古屋　鵜飼瑾子

夢の如花の粉も色失せて思ひ出多き春もくれぬる
○　上總　渡邊汀子

かけ稲やほのかに鳥羽の寺見えて沈み行く日は大古に似たる
○　羽前　坂野琴子

親思ひ涙の川に身を沈め浮ぶ甲斐なきわれなりけれど
○　日本橋　若杉とり子

千丈の谷を見くだすごとくにも伏目してある春の夜の君
○　千葉縣　閼　まさ子

たが家の子かや親かや行く秋を今日も見るかなはふりのみ列
○　備前　激　子

大ぞらにかすみてのぼるはろのよはつきもにほひぬ梅近きさと
○　羽前　秋保八千代

冬なれど我胸の野は風もなう草も芽ぐまむ戀やすくして
○　京都　黒野信子

夕園に殿上人の騎それてほろ〱散りぬ白梅の花
○　神戸　山本いさ子

御袖によき香こめたる髮長き人は行くなり春の廻廊
○　周防　粟　喜子

あはれなる秋のみ神と冬の日の淋さみ神とはらからなるや
○　筑前　田中登代子

白百合のさゝやききくと姉妹は草むらに立ち風にふかるゝ
○　土佐　石川きよ子

あゝかゝる涙を日々に隠しき寝する人に分かたまほしき
○　茨城縣　黒田とく

白き波黒き船をばうかばせぬ戀しき兄とわかるゝ夕
○　高知縣　濱　子



春の海岸　あい子

戀を病むわが身はかなく涙する日なり枯野を風のゆく哉
○　京都　宮原みどり

野の嵐の冷たき聲とおもひにきその口にわかれし黒髪人を
○　岐阜　やさしの子

眞ごゝろに君を想ふと語るべき力乏しきわが身をわびぬ
○　名古屋　渡邊慶子

あやめ草白き交らず少女のみすむらむ鄙のけしきおぼゆる
○　三河　桃山すま子

大あめつちちりにも似たる人の子の努力をさてはあざみますらむ
○　京都　大井順子

春の夜やわかき二人は駒ならべ角笛吹きて月に興じぬ
○　愛知　永田舞鶴子

花かざす島の少女のくろ髮と袂をふきぬ南の風
○　大阪　辻　廣子

曙や青葉の森の一つ家に君ときくなり初ほとゝぎす
○　大阪　生田稔子

船遣る人の午睡に聞えけり海の女神の戀物語
○　飛驒　荒垣千代子

黒かみの君は來ましぬきみが姻とおなじ色なるばらをかざして

短篇小説

小栗風葉先生選



▲規定　純潔清新なる短篇小説を望む、凡て振假名つき二十四字詰八十行以内とす、川紙は半紙又は罫紙を用ゐ一人一篇を限りとす、締切は毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

二等　○石屋

本所區外手町六十一番地　田中久子

一

今日もお爺さんは冷い仕事場でコツ〳〵石を彫つてゐる。雨許り降り續いた二三日の寒さで又例の喘息が起つたとやらいふのに、北口の寒い風が吹き込む仕事場で例もの薄つぺらな座蒲團へ座つて槌を動かし乍らゴホン〳〵咳入つてゐる。

「本當に今日一日位休むだらいゝにね、又惡く成たらどうするえ」と表口から何か買物の風呂敷を抱え乍ら入つて來たお婆さんは心配さうに爺さんの顏を見て云つたが「いゝつて事よ」と慳突を食はされたので、不平さうに奥へは入つて行つた。後でお爺さんは頻りに昨日の事を考へてゐる。

六疊許りの板の間で周りには狐やら狛犬やらが並べられ朱文字の入つた墓石も三つ許り夫に並んで置かれてある。邊りには石のかけらや槌やが足の蹈み場もないやうに轉つて居るのである。

「昨日の話してみると市の奴、先から婆さんと逢つてやがつたに違ひねえや、何だ散々育てられた恩も思はないで彼麼家出なんぞしやがつて、今更よくあゝして謝つて來られたものだ、勘辨はならねへぞ、ならねへならねへ」お爺さんは獨りで息まいて自然と石うつ槌にはづみが來る、コツ〳〵と若い者も及ばぬ音である。

お爺さんの心では、今迄かうして二人限りで暮して來たものを市を許して家へ入れるのはいま〳〵しい、強腹だと思つてゐる。「市の奴何歳になるかな、既う十三の子があるとするとどうしても三十五か六か、さうだ己達も彼是七十になる。爭はれねえ」ポン〳〵煙管を擲く音がしてゐたが此時止むで茶の間と間の障子が開いて大きな湯呑茶碗を持つて婆さんが立つてゐた。爺さんはつと振向く。

「お爺さんや朝から小休みもしないでさ、えら勢だねえ、其麼でも躰にさわるよ」爺さんは又元の石にかぢ

りついて彫りにかゝる。お婆さんは手持無沙汰に成つて傍へ寄つて行き「さ、お茶」とさつきの茶碗を出す「其處へ置いといとくれ」と爺さんは鼻の上へ下つて來た眼鏡を右の手でおし上げ乍ら鳥渡お婆さんの顏を見て云つた。お婆さんは平らな石くづを見付けて其上へ茶碗をのせ、手を腰にして仕事場の中を一まわりして、出來上つた狐や狛犬の背を撫てゝ見乍ら又「お爺さんえ」と呼ぶ「何だい」「お前さん、今日は又山本さんが來なさるよ、昨日の話しをよく定めとかないぢやあ」「市のか」「あゝ」「己あ市の奴はどうしたつて家へは入れられねえよ」「……」



「厭な事よ、二十も二十一迄も育てゝ貰つた親を捨てゝ馳け落ちまでした奴なんか……」「あれさ」お婆さんは慌てゝ振り向き乍ら「昨日も彼麼に云つてるにさ、夫は若い內て誰しも一時の迷ひなんだからつて。誰だつてお前さん……」「おいらは其麼ことしなかつたぜ」お爺さんは眞面目な顏で石を横から隙し見てゐる。婆さんは困つたらしい顏付でだまつて了つたが少したつと怖る〳〵「夫ぢやお市は仕方がないとして菊坊は、え？」返事を聞く迄びくびくし乍らちよい〳〵お爺の方を上目で見て居たが了ひに小聲で「いくらお爺さんが强情張つたつても來年

は七十に成んなさるよ、私だつて老る年て見りやあかうして二人限りなのが甚麽に淋しいかしれないわね、今日様は不足なく暮らしても行かれるけれどいざと成つた日には誰が兇倒をみて呉れるんだらう‥‥」とお爺さんの方を見向いたけれど矢つぱり默つてゐるので「ねえお爺さん其麽時はどうする心意だらう、子もなし孫も無し‥‥」「わかつてる」爺さんは煩さゝうに慳貪に云つて「だからよ、菊だけは婆さんの云ふ通りにじてやるつて昨夜も云つたぢやねえか」「さうかい」とお婆さんはほつと息をついたけれど嬉しさうな風はみせずに、高窓をあけて往來を見乍ら冷い風に面をさらさせて何か考へて居た。

二

其日も夕暮、谷中つゞきの淋しい此の街にも軒燈に火がは入つて泥濘んだ道がチラ／＼光り始めた頃「やれやれ」と重さうな聲がして石屋の明るい障子に傘の雫がポタ／＼とかゝつた。火鉢の前に居たお婆さんは矢庭に飛び出す。障子をがらりとあけると夫は近所の荒物屋の女房さんて五つ許りの子を落ちさうに負つてゐる。「まあ／＼」とお婆さんは直ぐ背の子を取つて「おお冷い／＼」と云ひ乍ら紐を引ずり引ずり火鉢の所へ抱へて行く。と女房さんも汚れた足袋をとり乍ら後からついて行つた。「寒いのに何處へ行たえ」とそは／＼し乍ら皺に成つた子供の着物を引張つたり、小さな手を火の上へ翳したりする「今朝からなんですよ、お婆さん」と女房さんは火の上て揉手をしつゝ云ふ「何處へねえ、まあ此降るのに」「何ね鹽岸島まて」「さうかい、坊もおべたかつたらうね」と子供の顔を覗き込んだが急に思ひ出したやうに聲を潜めて「女房さん、私もやつと少し心配が脱けるやうになりましたのさ、そら、過日の話ね」女房は髪を掻き乍ら「えゝ」と頷く「彼れてねお市の方から人を入れてあやまつたのさ、自分ても大そう悔んてゐるとみえて、せめて罪亡ぼしにつて長女のを寄越すから何卒私と思つて用を足さして下さい、とね昨日人が來て話して行きましたのさ」「おやまあ」「お爺さんは何しろ」と一段聲を低めて「頑固だからね、私が漸と説き伏せて孫の方だけは承知してもらふ事にしました。之でまあ私もやつと氣が樂になるといふものてね「お何歳なんてすえ」「孫？十三に成るんてすとさ」「夫ぢやあもう手がかゝらなくて宜ございますね」此麽話をしてゐると、後の障子の中てお爺さんの咳入る聲がする。お婆さんは鳥渡振り返つて

見て「二三日前から又喘息が起つてゐるものだからね機嫌がわるくて」「夫はいけませんね。てお市さんは如何しても入れないつてお云ひなさるんですか」女房さんは居眠りを始めた子を受取つて膝へ乘せ乍ら訊く。「あゝ、もう彼麽馳け落ち者なんぞつてね」「夫は若い誤りだつたんですからね、今日私が實家へ行つたのも夫なんですよ、十九になる妹がね矢つ張りお市さんのやうな眞似をしたつていふんで阿母なんぞ騒いでゐました」「夫は〳〵まあ」「堅い娘なんてしたが……皆若い内の迷ひてすわね、仕方がありませんよオホヽヽ」床の中ではお爺さんが此話しを聞いてゐたが、もう氣が苛々して堪らなく成つた「婆さん」と鋭く呼んで夜着から頭を擡げて待つて居た。障子がさつと開くと燈りが流れ込むで婆さんが莞爾々々し乍らは入つて來た。「夫だ、皆夫だ、菊だつて市の子だぞ。」婆さんはぼんやり立つてゐた「己にやあ女の子の世話は出來ねえよ、育てるなら育てゝみろ、又後足で砂かけられる位なもんさ、市の子だ、市の子だぞ」お爺さんはくるりと寐返りを打つて「二人だつて藝して行ける」と我鳴りつけた。障子の外では女房さんが子守歌を唱つてゐる。お婆さんは何時迄も障子につかまつたまゝ默つて立つてゐる。

（評）すつきりと垢抜けのした文章である。頑固な爺さん、それをなだめるお婆さん。子を負ふた荒物屋の女房も好く描けて居る。寫生文臭の勝つた小説てある。

四等

○雪の夜

麻布霞町二十一番地　あい子

三田の叔父さんの病氣が危篤と聞いて、驚いて家を出たのは午後の五時頃。朝の中から、、、薄墨を流したやうな空は、つい今し方になつて雪をちらちら落して來たと同時に、寒い寒い北風をさへ伴なうて來て、コートの上に肩掛をかけて、更にその上に頭巾を冠つて居ても、身躰は血すらも氷結つてしまひさう。

恁んな日には急用の外、戸外に出る人もないと見えて、電車の中は至つて空いてる。風呂敷包を脊負つた汚しい老婆と、鳥打帽を眉深に冠つた軍人風の男と、それに妾を加へて唯の三人限り、そして各自餘程間を隔てゝ座して居るので、空隙の多い車内の空氣は、中中温まりさうもない。

それでも電車が日比谷公園に來た時には、大分乘客があつたので、少からず混雑した。妾は叔父さんの事を考へてる。一躰危篤と言つて如何程御惡いのだらう

――叔父さんは幼さい時から能く妾を可愛がつて下さつた。そして先日と言つてもつい十日ばかり前に御眼に懸つた時までは、あれほど御健全な顔をしてらつしたのに、それが急に危篤とは夢のやうだ。

「お時さんぢやないの？」と此の時不意に妾の名を呼ぶ者があるので、顔を上げると、叔父さんの一人息子の峰さんが何時の間にやら、妾の前に腰を下して居る。峰さんは親類中一番の道樂息子といふ評判の人なので、常に餘り口を聞いた事は無いが、此の時ばかりは然うもならず、

「おや峰さんなの、して叔父さんのさ御容態は如何ですの。」と言ふと、峰さんはさも驚いたといふ風をして、

「エツ父が病氣？何時からてすか。」

妾もそんな事てあらう、何處か遊びの歸路てもあらうと思つたが、素知らぬ顔をして、

「おや、未だ御存知ないの、妾も未だ能くは知らないんてすけれど、先刻電報が參りましたものてすから――。」

「それては之から自宅に御出て下さる所だつたのてすか。」と案外平氣な顔をして、

「それても何に、大した事は無いんてしよう！。」と、獨語。

「いえ、御危篤なんてすつて！」

「エツ、父が危篤？」と少しは顔色を變へたが、心から心配するやうな樣子は些ともなく、「それじや歸宅にやなるまいかなあ。」

「峰さんは何てすの、之から何處ぞへ御出掛けの所だつたのてすか。」と妾も餘りの事と思つたので恁う言ふと、

「いえ、なに、些つとその品川に友人が待つてますのてね。それに又少々用向もありますから。」と稍狼狽氣味て答へたが、「別に行く必要も無いんてす。」と附加へる。その態度が自分ても幾らか妙と考へたらしく、妾の方を向いて照れ隱しに「エヘヽヽヽ。」と薄つ片な笑ひ方をした。妾も不快を感じたのてそのまゝ默つてしまつた。

雪は益々降る、風は愈々吹く。車外の寒さの烈しい事は、窓の硝子の内側に、人々の呼吸が白く氷結くのても知れる。峰さんはと見ると、深く何か考へてるらしく俯向いて居て、時々歎息をさへ吐くが、妾の眼にはどうもそれが、現在危篤てある自分の父の上を悲しんてるものとは見えぬ。只妾の前て心の奥底を見極め

られたくないと言ふ、一種の虚榮を張つて居るのに過ぎぬ。妾は峰さんの心が寧ろ憫れになつてしまつた。

電車は四國町で停まつた。妾は峰さんと共に降りた。妾の小さな雨傘の中に妾と峯さんは一所に這入つたがその時まで悲しさうな顔して居た峯さんは、急かに勢い付いた調子になつて、それでも何も言ふ事が無いものだから、解り切つてるのに、

『でも父はそれ程烈くはないてしやうねえ。』と聞く。それは眞に親を思ふ子の心からならば、出もしやうが、否出るのが自然だが、今の峰さんの心に恁んな思ひがあらう筈がない。

ヒユーと電信線に音を立てるやうな風が吹くと、

『おゝ寒い』と云ひながら、故意か偶然か峯さんは、ぴたと妾の方へ寄り沿うて來る。妾は、

『男は悲哀を感ぜぬものかしら。』と思つた。

他から見ると樂々も見えやう此のもやい傘の中には、父の危篤を悲しまずに女に寄り沿うとする男と、その男の心を憫れんで不快を感ずる女とが、思ひ思ひな想像を走らせながら這入つて行く。

新星



青森縣 山田小照子

雪の夜の寂寞は只譯もなく妾の心を襲ふて來た。

（評）實際の事を書いたらしい。然し、親の危篤と聞いて少しも驚かない男の心持ちも、それを憫れむ女の心も、今少し書き足らぬ。最後の五六行の說明も不要だ。

五等 ○道づれ

土佐國吾川郡弘岡上村 深瀬ます子

「奥樣々々」

只有る掛茶屋の前に立つて財布の口をくる／＼と卷いて居た女が思ひ懸けなくかういつて呼んだ。呼び止められたお義は振り向いて見ると、單衣物の上に接ぎ接ぎの、ちやん／＼を着た四十餘の女、之は昔の友達で娘の頃家に置いて召し使つて遣つた者である。

お義は近寄つて、

「ありや、まあ、お寅さんかよ、滅相お寒御座います。」

何となく懷しさに其姿を見ると直もう氣の毒になつた。お寅は存外粗略に、

「お寒御座います。お前樣此の寒いに何所へ御出よりますぞ。」

いひ〳〵二三把の大根を入れた籠の手をおゝくに掛けて「大きに」と之は店の人にいひ捨てゝ出てお蓑と並んで歩き出さうとする。お蓑はよい道づれを得て安心しほと息をついて、

「あの私は生家へ、急にさし懸つた要事が出來た故出掛けたが日の暮れてはあるし坂が淋しいと思うて困つちよつた、丁度善かつた、お前さん今日も賣物に？」

「さうで御座います大根を少々。」

「それはまあ、あの子供も大つたらうのをし、今は矢張丑さんの所にお出るか。」

「さうで御座います、何ぢや可ぢやいふ中に矢張一所に居りますが、實に奥樣遣れませんきにのをし。」

「子供は二人かのをし、三人かのをし。」

「四人で御座いますらあ、口と脊中が數で御座います故事が困難御座いますは…………」

お寅は賤しげな笑をする。昔のお寅はこんな女では無かつたとお蓑は案外に思つた。共に年取つた事を話したいと思つたけれど生憎雪はちら〳〵降つて顔に掛るし、風は強し、急いては居るし、それに物いふと咽喉が割けさうに痛かつたから強ていふ力もなく其儘押し默つて了つた。

お蓑は急用で生家へ行くのだとお寅にそいつたけれど、其實家に紛擾があつて、この夕ぐれ雪もよひにも關はらず、兼て用意して置た風呂敷包一つ取り出した許で傘さへ持たず當分迎ひの來る迄生家へ逃げて居る意で家を出たのである。默つて歩いて居ると思ひ出す。息子が日露戰爭に看護卒で召し出されて居る間の苦勞や、無事で歸つて思ひ懸けない恩金を戴いた時の悦や、新しい家を建てゝ美しい嫁を貰つて之から樂に暮さうとうち寛いだ夢の間の樂や、そして、貰つた嫁に突然息子を取られて邪魔物にせられる此頃の有樣や、先程家を出やうとした時いつた息子の言ひ草や、嫁の言ひ草や。

お寅は不意に大きな聲で、

「奥樣兄弟は他人の端と言ひますが他人ぢやあち這麼事は無からうと思ひます。雨でも降り續く時は眞實私等水を飲うて泳えて居りますけんど弟は知らん顔して。夫はまだ善けんど少い子が御座います故疊が損むといひまして丑の奴近頃私等が寢る疊を上げまして古い琉球莚を敷きました。私は夜中に目が覺めて見ると片身凍つて覺えん樣になつちまいます。」

お寅は恥も外聞もなく身の難義が聞いてもらひたい

らしい、お蓑も惹き入れられた樣になつて、
「まあ、のをし、お前樣の亭主さんは未？」
「ありやお前樣おかしげな事して懲役へ行つちよります。懲役つたやうな。來年は歸るいひますけんど私がさういひます。親仁が歸つたちゝ悦ぶな。親仁のお陰てお前等這麽難義目に合ふぞいうて私は子供等に言ひ聞かします。」
「けんどまあ父さんが歸つたらお前樣も安かる故精出して子供等の世話してやりや——あの丑さんの嫁さんは何かのをし、お前さん等に優しうするかのをし。」
「否げの奥さん、御話にやなりません。情もへつちやくれも有る人間ぢや御座いません。」
「まあさうかよ私はまたあんな可愛らしい人ぢやきにお前樣等に信切にするかと思うて。」
「人の涙は百年も我慢するたあの人のことて御座いますよ。」
聞て居る中にお蓑は幾日も怺へ〳〵た涙が止めどもなく流れるので抱へて居る風呂敷包に幾度も顔を押しあてた。一里半の坂を下り盡して郡道から畷道に入た時はいつか日が暮れて袖ともいはず手ともいはず眞白に雪が積んだ。向の橋の上に何にか蹲つて居ると思て先程からお蓑が透して見て居た者が此時すつと立上り、
「お母、お母」
と叫ぶ。聲は子供てある。近寄つて見ると板笠を被て居る七八つの女の子。
「楠かや、汝何しよりや其所て、雪に濡れるを知らんが阿房だらが。」
とお寅は強しく叱つた。お蓑の子てあらう。此所て二人は別れるのてある。お蓑はふり返つて、
「丁度一所て私はほん善かつた。お陰て淋しい事も知らいて、ま、精出してお道り、又善い廻りの來る時も有るだらう故。」
といふとお寅は、
「ほんならお休みなされませ——」と聲を長く引いて被つて居た手拭に手を掛けるかと思ふと「とつとと歸んか」と又しても子を叱つて、土橋を渡り、竹垣の上から畑の出て居る其所の小家に驅け込む。
お蓑は一人になつて力抜けのした樣俄に足は緩んだが、家を出る時、息子にいはれた言葉や、嫁にいはれた言葉、それをまた我しらず繰り返して居た。

（評）キビ〳〵した達者な筆てある。描寫もうまい。併し内容がプーアだ。

秀逸

○淋きおもひ

安藝　桐原紫都子

「眞個に久振りなのねえ。」と、芳子は嬉しさうに微笑を堪えて、昔懐かしい友の菊子を、わが室へと導いたのである。

四邊には縫さしの袷や、針箱や、熨斗や取捌かれて机の上は例に依つて、文具や書籍の數々が亂雑に措かれてある。

芳子は別にそれらを片付けやうとも爲無いで、友に座蒲團を與へながら、

「妾見違へてよ、餘り風姿が變つてるもんだから」と莞爾々々爲ながら、今さらの如く菊子の顏をうち目戍つた。

「最うお婆さんの仲間入を爲たんですものねえ、ほゝほゝ。」と、對手は可愼しう。

「あら爾うじや無いわ、貴孃が緣家へ嫁つてから、始めてなんですものねえ、だけど妾矢張り昔の菊子樣の樣に思つて居たんですもの。」

「毎度もお邪魔に參つては、お喧騷せしましたつけね」

菊子も又友懐しさに芳子を訪れたのだ、來る途中ては越し方の樂しさを繰返す積りてあつたが、膝を交へた今、何處からか制裁を加へられるやうな、自分ながら四角張たやうな心地がする。

「此方から押掛けて行かうかと思つたんけど、妾恥かしいから御無沙汰したのよ。」と、芳子は甘えるやうな語調て云ふ。

「おほゝゝ、恥かしいなんて、誰も遠慮の要る人は居無いのですわ、良人は晝間居宅には居ませんしね、假令居たつてなか〳〵洒落した性質なんだから、誰ても初對面の人じや無いやうだつて評ふ位ですの、加之にお姑さんが至つて談話巧者でね、他には松やだけなんでせう、恥かしいてとなんか些とも無いのよ。」

言葉は順々しいが、お世辭がましいもの言振りてある。

雖然、芳子はそれを氣にするほどの餘裕は無い。

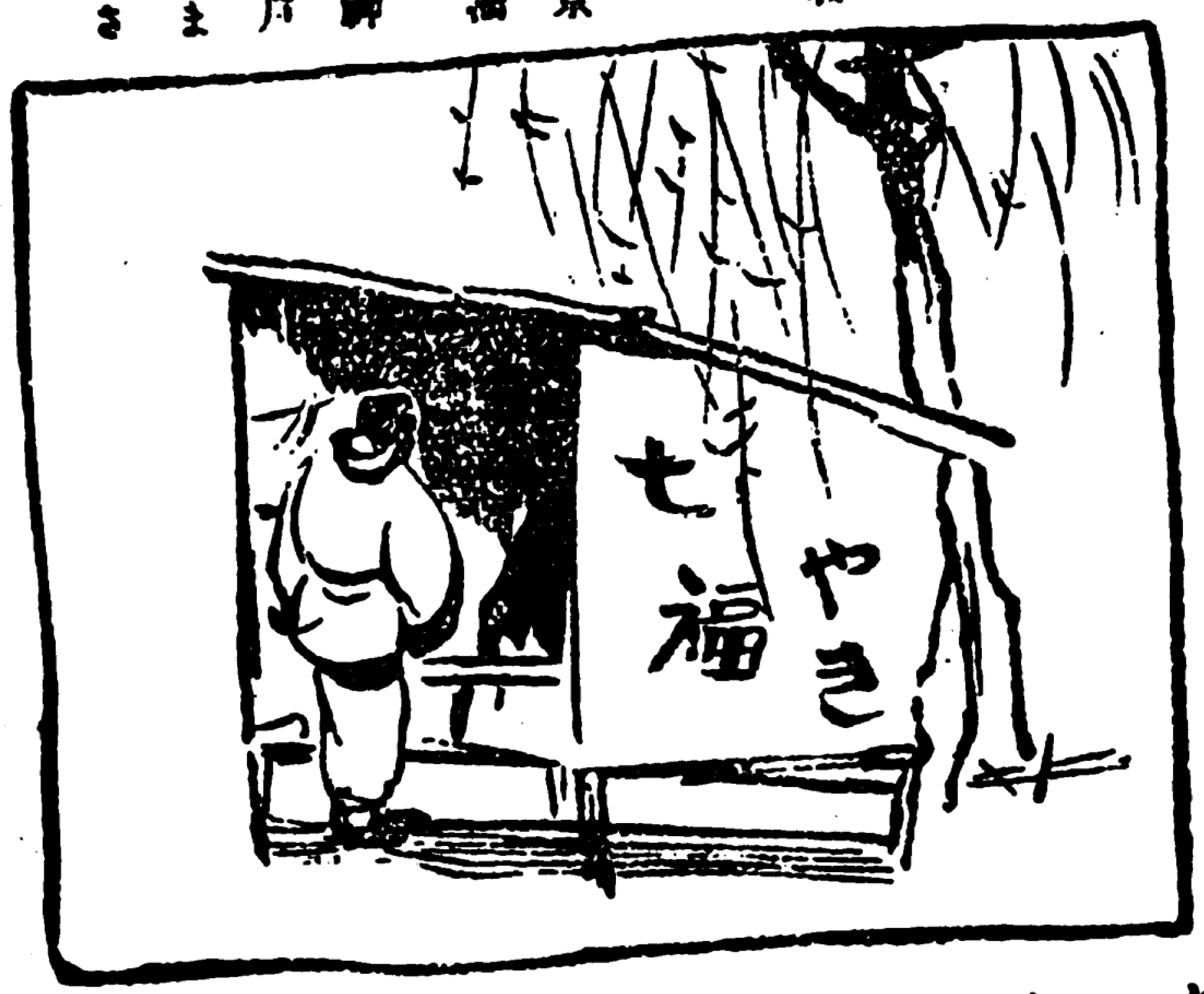
「爾う、妾寄せて頂きますわ……乾度。」と、これは彼女の腹から出たのだ。

「はア、乾度待つて居ますからね、違約なすつたら罰金ですよ、宜くつて！ほゝゝゝ。」

「宜いてとよ、妾違約なんか爲無いから‥ほゝゝ。」

相見て二女は、又微笑む。
と、隔離の障子を開けて顔を顯はしたのは、白髪混の頭髪を小く束ねた五十女、それは芳子の母が茶器を運んだので。
「何卒、お構ひなく……。」と、菊子は優淑にお辭儀する。
「いえ最う、貴孃が來て下すつたのは、我家の子女のやうに思つて居ますから、些とも構はないで、放任ときますよ、ほゝゝゝ。」と、母は愛想能く鐵漿を含んだ口元を見せて、其處らの取亂してあるのを見廻しながら、全然豚小屋のやうに汚してるのね、眞個に爲様が無いのですよ、始終八釜しく云ふのですけど、あれて未だ乳兒見たいなんですからね、ほゝ。」
「那様のが宜しうムいますよ。」
菊子は恁う云つた計り、後は雜談に紛して了つた。
二時間も經つたてあらう。芳子が名殘惜さうに引止めたけれど、菊子は他に要事あればとて、再會を約して辭し去つた。

露店　京福　神戸まき



其後姿を見送つた母は、「菊子さんも立派な奥様にお なりなすつた、芳子も早く身を落着けないと不可がね。」と、獨言つた。
芳子は急に、淋しいとも心細いとも、言はんかたなき悲哀の感に打たれた。彼女は菊子と相携へて、あられも無い空想に耽つた時代が、戀しうなつたのてある。
それはかりては無い、芳子も又良配あつて、遠からず千秋萬歳、目出たしと人に祝さるべき身上なのだ。口にこそ言はね泣かぬ螢のなんとやら、つい先刻まて嬉しいやうな恥かしいやうな、そして柱時計の秒を刻む音が、莫迦に悠然して居るやうに思はれたのだが、それが口善惡無い下婢どもに、お轉婆なお孃様とまて許はれた友の菊子が、庇髪にこそ結つて居れ、美しい奥様姿の、その沈着いた優淑かな風姿に接して、自分も身の自由を失つて了ふやうな、情無い感想がむらむ

らと湧いて來る。

（評）筆はかなり達者である。處女の結婚前の哀愁を書いたものだが、その哀愁が深く書けて居らぬ。お轉婆であつた友が、結婚後の落付いた態を書いて、その哀愁を一層痛切ならしめやうとしたものらしいが、菊子は別に沈んだ女とは見えぬ。

○藪入

京都　廣瀬あさ江

丁度三年目で故郷に歸えるのである。寒い風が四邊の木立に渡つて、灰色の雪曇の天氣は身に浸みて寒い。自分は何の氣なしに行手に連つてゐる大きな橋を木間越に見透した時、幼兒の時分にあの橋をブックをかゝへて學校に通つて居た時のことを思ひ出した。橋を渡ると、にうり屋や、青物屋や、駄菓子屋が三四軒ある家の前に出る。右側には大きな社があつて、松や杉が蓊鬱として半空に聳えて居る。

もはや藁屋が彼方に見える。

私は、此處が加茂村であることが解つた。——其昔なじみの村がなつかしい。

此村には私の親達が世話してやつた桶屋がある。其家を訪ねやうと思つて遣つて來た。て、其家の近くまで來ると、コンコンと箍を懸けてゐる音が聞えた時は、唯何となくその音色が、昔は某でも今は零落れたものには好い挨拶をせぬぞと云ふやうに思はれて、急に私の心は沈鬱になつて、店の前迄來ると何だか入り惡くて、後へ歩みを返さうとしたが、それでも外に此村の人達に深い緣のあるものもなければ、是から一里山手の幡枝に一人の親しい友が居るから、其處へ行つて遊ばせてもらはうと思つて、そこ〳〵と桶屋の前を過ぎやうとして、もしや店のものに見られはせまいかと心配でならなかつたが、折よく誰の目にも付かなかつたのでやつと安心した。

あれは夏の朝方である。瀨戸の疎籬を綴る朝顏の花には露をしつとりと置きて、比叡の山にかゝつた白雲は、底に淡すりと眞珠のやうな光を有つて、直ぐ其處の杉木立が、濃い靄の中から重い枝を搖がせてゐる曉風に、軒端の風鈴が悠く鳴つて居る。

お父さんは庭に下りて盆栽をいじり、お母さんは奧で寢間の掃除を、私は朝餐の仕度をして居ると、細い涼しい聲で、

「花入りませんか、花……」と云つて街道を過ぐる少女があつた。私は直ぐあれは、大原から來る花賣女であることを知つたが、何だか彼の花賣女の哀れな聲が慕はしくて、不意に呼び止めて夏菊を一枝買つて遣た。

少女は瓜實顔の色の白い、愛嬌の好い女で、上紺の木綿の上つ張りに燃ゆるやうな眞紅の襷を斜にかけて、大きな籠に盛つた赤、白、紫の奇麗な花を白手拭の頭に戴いて、一寸萌黄色の手甲を入れた細い腕て抑へながら、歩んで行く後姿を見ては艶麗と云ふよりも、寧ろ敬愛するやうな氣持がする。私は茫然と佇んで其の後姿の見えなくなるまで見詰めて居た。それからは毎朝この花賣女の來る度毎に花を買つて居たが、見れば見るほどこの少女が懐かしくてならんので、遂にお父さんに頼んで下女代りに來て貰うことにした。之が即ち今の桶屋のお神さんである。

少女の名はお初と云つて、立居振舞のしとやかな、口數の少ない、それは〳〵慕はしい女である。私は常に心の好い姉さんが來て與れたもんだと喜んで居た。お父さんもお母さんも「お初は、おとなしくて默りものだから氣に入つた」と言ひなさるのを聞いた。そのたびに私の胸の血潮は躍つて、何となく嬉しく感ぜらるゝのである。

お初は私の家に居ること三年、終にお母さんの媒ちで近所の桶屋へ嫁入りすることになつた。それが私には遠い離別をするやうに思はれて、お初の袖に縋つて泣いたこともあつたが、早や五年の月日を小車のうちに過ぎた。



大入　牛込　佐野良子

私ほど不幸なものが亦と世にあらうか、親には早く死なれ、たゞ一人の兄さんには遠い〳〵滿洲に行かれて、將來身を托すべき許嫁の淸さんは頼りのない私を振捨て、何處の空に暮して居給ふことやら、微と吹く風の音信のあらばこそ、尋ね出さうにも便宜もない。今では全くの獨り身である。故郷に歸つたからとて歸るべき家もなければ、是より一里山手にゐる友を訪ねやうにも道は遠し……。

もはや入日は山の端にかゝつて、野原には百姓の影が忙がしげに動いて居る。私は獨り京街道を辿りながら、あなたの森に隠れやうとして居る、自分の生れた

村を今一度見返つた。

「あゝ、あの森の向うがそうだ」と熱い涙が湧き出た。

私は時としては故鄕の人殊に自分の愛して居たお初までも呪ふやうな氣になるけれども、今目の前に故鄕の親しい森や、山や、家や、人影を見るにつけ悲しくなる。もし父や母や戀しい淸さんが居て下さつたら、どんなに久振りで歸つた私を迎へて喜んで下さるであらうにと思ふと腸を斷たるゝやうに悲しくなつて、疲れた足を引摺りながら、落つる淚を拭ふた。

「友の家で遊ばして貰うも一日か二日だ、又あの六ケ敷い主人の家へ歸らねばならん。いつそ川へでも身を投げて死んでしまはうか……」こう感じて立止まる、時しも夕日はとつぷりと山に沈んで、遠寺の鐘がゴンと夕燒の空に響き渡ると、遠くて唄ふ歌の聲も家の中に沈んで彼方を里娘が薪を戴いて來かゝると、若者が横合ひから出て代つてやり、二人は娛しげにさゝやきつゝ夕霧の村に消えて了つた。

悵然として頭を上ぐれば寒風は斯く慨き悲しんで居るに關はらず颯々として廣野を吹き荒むのである。

(評) 文章は未だ幼稚だ。整はぬ處がある。然し、實際の惡みに偏らずに書いてゐるのが嬉しい。零落し孤獨に成る理由には、幾らか拵へた氣味もあるが、主人公の哀愁が[illegible]て、[illegible]と書けてゐる。

○母

周防谷滿緒子

煕々と暖かい春の日影が障子に射る。火鉢も在るので聊か頭が重くるしい心地めするので、私は二階の五疊の間に、閉ぢ籠つて居たが、尠し戶外の空氣を、吸うて見る心算で、身仕度を始めた。

仕度と云ても、別に什麼するのでもなく、少し髮を梳き付けて、帶を締める程のとてある。一寸そこら近所を逍遥つて見るのでは有が、嫁てから未だ僅しか過ない。殊にあまり出嫌ひの私は、之が始めてゞある。

お天氣の可い爲めか、裏で下女が水吸む釣瓶の音が、何時より其の響きが遠い樣に聞える。階下は夫も出勤て居ないので、寂然として、向いの方に何の鳥か、威勢の可い聲を張り上げて啼くのも聞ゆる。

此の時、階子段を二三段上る音が、ミリ〱と響くので私は、障子を啓けると、お母さんが階子段の口から差し覗き、私を見られて。

『あら何處かお出るか?』とお呼掛けなすつたので。

「一寸。あまりお天氣が好いものですから外の方へ出て見やうかと思ひまして」。

「然かね。――然し私も明日もお天氣が好ければ、法

傳寺へお前と一處に參らうかと思つて」。
「爾うて御座いますか、爾麼ら今日は私、止めに致しませうか」。
「然うしなさい。而して下へ降りて離座へても御出んか、お茶でも飲みませう」。と莞爾なさる。
「えー」。と言つて私はお母さんの後を付いて行く。
お年齡は五十三四とか、頭髮は眞白になつて、少し屈んだお姿。あまり御健かな性でも無いが此の頃は少々元氣が可い樣。加之に萬事に付けて御柔しくして下さる事。私は後から付いて、言ひ知らぬ心の奥庭からいとも有難い思に涙が出た。
離室は五疊の間て、庭に面した小瀟洒とした所である。お母さんは火鉢の向うに御座りになつて。
「さあ此方へお寄り」。と。私は近く寄りそふと、お茶道具を出される、湯がしん〳〵と滾るのと、障子に蠅が止まつてバチ〳〵當るのが聞えるのみ。暫らく二人は默つて居たが。



花の路

三重縣　加藤つたへ

「早いものね、お前がお出てから最う一ヶ月にもなるが」。と。お湯を注がれる。
「然うて御座いますとも、實に早う御座います」。
「其早いのが私等には追々と近づいて來るのだがね」
「ほゝ。其麼事は御座いません、此の頃は大分お元氣に見えますが」。默つてお茶をお出しになるを私は飲む。お菓子を茶棚から出し乍ら。
「开れもお前が來られてから少々賑やかになつたので私の氣も何だか元氣付いた樣てね、ほゝほ未だ小供でも出來たらと思はれますよ。开れに付けても度々聞かせる樣だが、私が可厭な事を少々云ふこともあらうが、老人の癖であるから必らず惡く思は無い樣にね」。
勿體無い程深切なお言葉。お母さんの氣に入つた私の此の身、どれ程幸福なものでせうかと、俯むいて私は默し熱い慈愛の涙が膝に一滴二滴零れるを知らなんだ。

（評）結婚當時の、姑と嫁の温い仲が好く書けてゐる。平和な家庭の樣も、姑や嫁の性質も偲ばれる。

日記文

中村文學士選



▲規定　文體は問はざれど日記に限ること、實際の日記其儘にても可なり、二十四字詰三十行以內、用紙前同斷一人一章限り、投書締切每月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

二等　○新歌謠日記

福島縣河沼郡野澤町　泉はなゑ子

二月一日。土曜。都に比べては何事も後れ勝なる田舍の事廼、曆も陰曆、今日は師走の大晦日、春の仕度求めむとて、在方より出て來る人の往來繁く、罵り騷ぎて叫び呼ぶ聲喧し。吾家には、病める人缺けたる人もなくて、皆一堂に樂しき夕餉の箸をとりぬ。洋燈の光燈明の光、華かに照り添ひて、誰の顏にも露惱める影もなきは、一家としての喜悅此上なく嬉し。

歸宅待つ妻門松竹は、暮が近づきや門にたつ。
老いし白髮の羊の歲も、今宵一夜でさるの年。

二月二日。日曜。初音賣の兒の呼聲に驚かされて未明に起出づ。若水汲んで洮面の後、一家の幸福と御國の安寧とを心に祈りて四方の神々を拜す。元旦なれども、羽根突く子鞠弄ぶ兒等もなし。されど地味に强張りたる晴着着て、神詣てする里人の姿など見れば、雪は尺餘の寒國乍ら、何となく心地暢然として春めく。空はよく晴れたり。夜カルタして遊び、終りて吊柿の白くなりたるに舌鼓うちぬ。祖母樣手製の物なり。

澁い苦勞の日數もたてば、やがて世に出る吊柿。
色は黄金で角たつ蜜柑、酸いも甘いもかみわけて。

二月三日。月曜。各商店にて賣初めなりとて、子女老幼群をなして、鷄鳴時より賑ふ。妹蔦ちやん四拾錢の買物して一反の景物得たりとて、家中飛廻りて喜ぶ。戸外には大人も小供も雪辷り賑かなり。

霞棚引く雪消の大路、嫁菜賣り行く紅襷。
行燈搔消し枕をひいて、そつと敷いたる寶船。

二月四日。火曜。朝より春雨靜に降り、夜に入りて止みぬ。今夜は節分なり。豆撒く音、豆拾ふ兒の聲、內外呼應して面白く聽ゆ。父上異樣の裝束して豆撒き給ひぬ。わらはは、豆稈に干魚の頭挾みたるもの、入口毎に指し挾みて廻りぬ。室の紅梅一輪綻び初む。

夜半は寒かろ春まだ淺い、小夜着かしましよ室の梅。
わたしや深山の木の根の雫、しばし木の葉の下くゞる。
豆は撒かずと無病息災て、稼ぎや入り來る鬼もない。

（評）老熟の筆、一字の加ふべきなし。

三等　○舊正月一日

下野　青木たか子

今日はいつになく暖かき日なり。老母は珍らしく心地よしとて床をはなれましたれば、一家揃ひて樂しくお雑煮戴く。寒からんと思ひて炬燵に入りたるまゝ、老母の髪を結ひまゐらすに、短くて根〆も出來ぬ程なるに驚く。お隣りの勇樣靴と軍帽を着、肩いからして見せに來ぬ。いつもながら愛らしう、福々と肥えたる頬は林檎の如く、赤く圓く細き目、小さき口、額のおでこなるが一入の愛嬌そへて見るからにほゝ笑まるゝ。師の君の許に年始にても行くならんか、美しく装ひし舊友二人打つれて通るに、何とはなく胸亂れぬ。されど今の身の羨みても甲斐なければ、唯趣味ある書物に慰藉を求めんと、老母の側に机持ち行き書を繙けば、透き間もる薄紫の日影は、我持てる春雨日記の上にちらちら躍れり。讀書の興に餘念なき折から、ふくとはなくて、大氣のゆるゝ毎に忍びやかに音づるゝ香に怪しみて、障子あくれば、庭の白梅二三輪、ほゝ笑みそめたり。おゝ清き梅、汝も我慰藉の一ツなるよと、直樣一枝手折りて花瓶にさせば、馥郁たる香は室内にみてり老母はいたく喜び給ふ。今宵は月こそなけれ、金粉を散らしゝ如き星月夜に辻うら賣の兄弟にてはあらぬらしき十一二の男女なり。玉をまろばす如き聲の、いかばかり人の心をやひくらん。其聲の美しきに似ず身には見苦しきつゞれをまとへり。あはれ二親やいかに、住居やいづこ、寒き夜の更くるまで大路をさまよふあはれさよ。

書齋　長門　原田春子



二日。今朝は屋上の霜眞白なり。老母はまだ床をはなれたまはず、午後ふさ子樣と、くに子樣來給ふ、うれしき事限りなく、樣々なる話にいつまでも興つきず、ふと心づけば、夕日山の端に沈みて、金色の雲赤う障子にうすつけり。意地惡く今日の日の短きよと云ひて、ふさ子樣に笑はる。歸り給ひしは、羽根の音も凧のうなりも絶えし頃なり。今になりて思ひ當りぬ、今朝袂の中に蜘蛛のをりしは今日のうれしき音づれの前ぶれにてありしよと。二日の夜紙の舟を折り其に歌を書き、枕の下に入れてふせば、夢に其年の幸不幸を知ると母上の宣ひし事思ひ出

し、早速半紙一枚にて舟を折り、「長き夜のとをのねふりのみなめざめ波のり舟の音のよき哉」としるし神燈を捧げて三拜せり、今宵の夢のめでたかれやと。

（評）詩趣汪溢。
又曰く、原稿、文字拙く、文字文法の誤謬極めて多かりき。草稿と比べて誤を會得したまへかし。

四等　○春の二日

淺草區千束町二ノ四二三　赤倉とみ子

七日。昨夜雪様を門まで送つて出た時、お月様が暈を召して入らつしやつたが、其の故か曉方から降り出したので、久々で向島の乳母やを訪づれやうと思ふたのも見合はせる事にする。二階のお掃除を終つてから硝子窓のカーテンを絞り上げて見渡すと、泉水の傍の八重櫻があやなく散り亂れて、石燈籠の笠やら飛石の面やら、至らぬくまも無く薄紅の花片が貼りつけられ、春の色も此の雨で褪せて行くやうな心地がする。風が出て來たのでザアザアーッと雨がしぶいて硝子にかゝる。夕方京都にお出での父様から十日に歸るとのお葉書、美ちやんはお約束のお人形が頂けると言つて大よろこび。

九日。雨上りのほかほかと暖くて、軒の雫に朝日の照るのが恰どダイヤモンドを見るやうに美しい。髮を洗つてから、日當りの好い母様のお部屋の低い窓に倚つて、新緑に染められた庭の面を眺めて居ると頬がほてつて來る。二時頃に思ひがけ無く向島の乳母やが見える、お櫻餅の籠と私の好きな桃の花を下げて、ふとつた身體を重さうにニコニコして入つてくるのはどう見ても春の人だ。好く來てねえと美ちやんと二人で右左から取りつくと、まあ大きな赤兒がと母様がお笑ひなさる、でも乳母やは嬉しさう。危い手際ながら心を盡くして拵へた御菜で、お夕飯は皆寄つて樂しく頂く。明日は父様もお歸りだからと無理に引止めて、さて種種の話に春の夜はふけた。灯火の色も今夜は何となく榮えばえしく思はれ、懷かしい父様のお顏までが目に見えるやう。

（評）やさしく艶ある筆つき、「乳母や」の句云ひしらぬ味あり。

五等　○やよひ日記

上總國市原郡鶴舞町　ひさ子

二日。見し夢の懷しさ、『癒えまさば』と宣ひし澄江様の今日もやと籠とゝのへて待つに、あだなりき。野は淺みどり、霞の色も匂ふめれど、ひとりは行かむ心地もせず。

午後、日南の緣に花莚しきて、止めらるゝを强ひて針もつ――たゆたひの指の運びや、時ならで花の摸様も褪せにしを、何がため長くは裁ちし袖なりけむと、そぞろ心のまた湧きて、對ひ合へる母様のお顏まさ目に

は仰ぎ得ず、つと目を反らして其となう紅梅の散るを數へぬ。風なよやかに靜けき日なり。

三日。髮洗はむと思へど冷えてはと母樣の止め給へば唯梳りて置く。醫師も惡しとは宣はねど……。

お隣の千代ちやんが毛糸持て來つるに何と問へばおきんちやを編みてよと眞紅のリボン搖ぶりて笑むなり。優し、いぢらし、わらはも今一度御身のやうになりたくてよと飽かず其手をとりぬ。

夜燭して久しぶりにてオルガンの塵を拂ふに、奇しきかな指のみだれゆきて唯胸のみぞ打騷ぐ。小机ひきよせてロオレライの曲を略譜に直し、やがて枕につく。――あゝ雲燒ゆるラインの夕べ！そのかみのわらはにも似たる少女の魂や、盡きぬ恨みと汀に歌はとゞめたりけむ――あはれ眠りがたなの宵にもあるかな。

五日。昨夜の黑雲雨ともならで、小窓にのぼる花の影、霞に消ゆる鳥の歌、あゝ世は皆春なり。吹くともわかぬ花の香の、靜心また亂しゆくもわびしくて……

澄江樣よりお使にて、明日こそ野へのお誘ひあり。嬉し、悲し、菫の花は笑むらむも君や窶れの頬を咎め給はむ。濡れてはいつか額髮のあやしう癖つきしさへあるに、ともすれば亂れがちなるほつれ毛を、彼君何とは宣はすらむ。

妹つれて草履求めに行く、紅緒のそれは幼きにこそ適へ、わがうす紫の藤色は、わか草の野のみち行くにふさふやと。

夕霧夢となきて空はおぼろに晴れたり。今宵は月もまどかなるべし、あはれ。

（評）訴への原因あまりにおぼろとて、讀者の同情をよぶこと少きを惜む。

秀逸

○三日日記　小石川　三宅恒子

十二月廿三日。にび色の雲怪しう蔓りてあはや降り出てなん氣合！習字する手ちゞみて筆うごかず腹立し。Exileを讀む。かゝるしぐれ日の夕暮、行方も知らず漂泊ひ行く人の淋しき面わ見ゆる樣にて哀ふかし。夜食はふろふき太根、柚子味噌つけて。あつき中は一寸味よし。冬至なればと母樣仰す。さてこそ。かくは寒きなめれ。

廿四日。花をとまだき霜柱ざくざく碎きて裏に行く。床しき香！「寒ぶ」と襟すくめし風につれて……そよにほふは臘梅なり。己が好む花！隱れし清き人に似たれば！枝振なほすにお晝迄かゝりしも口惜しとも思はず。恭樣より御便りあり。嬉しう拜す。いつもながら御水莖の跡美しうかき流し給へり。いと羨しう。

二十五日。近頃になき晴天。もの皆蘇生るごと心地よし。花の香ゆらぐ六曡に順禮紀行をよむ。日記もかく趣味深う認め得ば樂しからむ。午後西村にインキ求め

んとて行く。共同賣出の樂隊賑しうはやし立て、菓子屋の店頭には賀餅致候と大書されたり。忙しげに走る掛取り。嬉しげに大凧かゝへ行く小供、はや門松かざらんとてか、松竹擔ひ行く若者、砂糖袋もつ淡裝の人等、織る如し。忙しき中にも春めきて樂しう見らる。坂下に人立せるに窺へば倒れし馬起さんと人々打わめく也。幾度か半より地響させて打倒るゝを漸く引起しぬ。ほと息つきし隙もなう鞭あてつゝ、重き荷ひかせ行きぬ。情知らぬ馬子かなと面そむけぬ。痩せさらばひし姿見るに得堪へて……薄命なる荷馬の行末すこしにても幸あれと祈りき。

宵より星のまたゝき美しう……片破月は骨のみなる梧桐を地上に寒うゑがきぬ。よき宵を歌ふもえせず更かす我身の口惜しさよ！。

(評)　例の如く懐かしき筆つき、入賞に値すれども、今回はわざと秀逸におとしぬ、願くは更に想を練りて一位に入るべき文ものしたまへや。

○日記の一ふし

越後　歌川幽草女

一月二十六日。日曜日。

頭痛くてよもすがらうつら〳〵して明けぬ、昨夜湯冷めして風引きてはとの母樣の御心遣ひなほざりにして、更たくるまで讀書せし報か、常ならず終日此儘床に有りてと思ひしも、今朝は父樣詩經の御講義の當日なればと、強いて起床す。九時には例の學校の先生方初め、他の人達も集り給ふ。皆男子の人達のみなれば、次の間に、小さうなりて、拜聽す。何時もならば、今少し長かれと、思ふべき御講義も、けふは、只形式的に、ページ繰るのみ。夕方母樣の、お止め遊ばすも聞かず、臺所の手傳す、あちこちと、立ち働く中に、頭の重きは、忘れし樣なり。朝よりの雪、夜に入りても、霽れず、玉昨夜出てしまゝ、今に歸らず、此頃は、猫食ふ惡習の、流行するとか、一貫四百二十目の、あの大猫、もしやと、祖母樣、御心配大方ならず。

一月二十七日。

昨夜來の雪、二尺猶霏々として、間斷なく、雀寒げに枯枝に集ひ、玉は未だ歸らず、憂き時の神頼みとか、玉無事に、歸る樣にと、下婢を稻荷樣へ、お參りに遣す。夕暮、本屋掛乞に、來る、是より、三里の歸路、寒からんにと、母樣甘酒出し給ふ、いたく喜びて、歸る。今日の市日に、求めし山鳥あり、今朝、在の乳母より、人傳に、早梅に添へて、到來の蕎麥あり、夜食の仕度して、祖母樣の、離れに、使に行く。床には、梅の香ゆかしく、暖き圍爐裡に、父樣は酒酌み給ひ、祖母上、母上、わらは、下婢も、共に、談笑の間に、箸取る、外には、板戸打つ、霰の音、凄し。

一月廿八日。火曜日。

一月遲れの正月も、間近く、杵の音、淡暗き中より、響く、臺所のあたりに、何やらん物音のするに、もし

やと、急ぎ起くれば、待ちに〳〵し玉、昨日の御利益の、現れしか嬉し、此様に皆に心配掛けて、何處を、さまよひ來しものか、ぐた〳〵に疲れて、終日炬燵に眠る。今宵は、赤飯に、油揚添へて、御禮參りに、遣る。雪また一尺も加はりて、町は兩側の庇に、屈かん、許りなり。

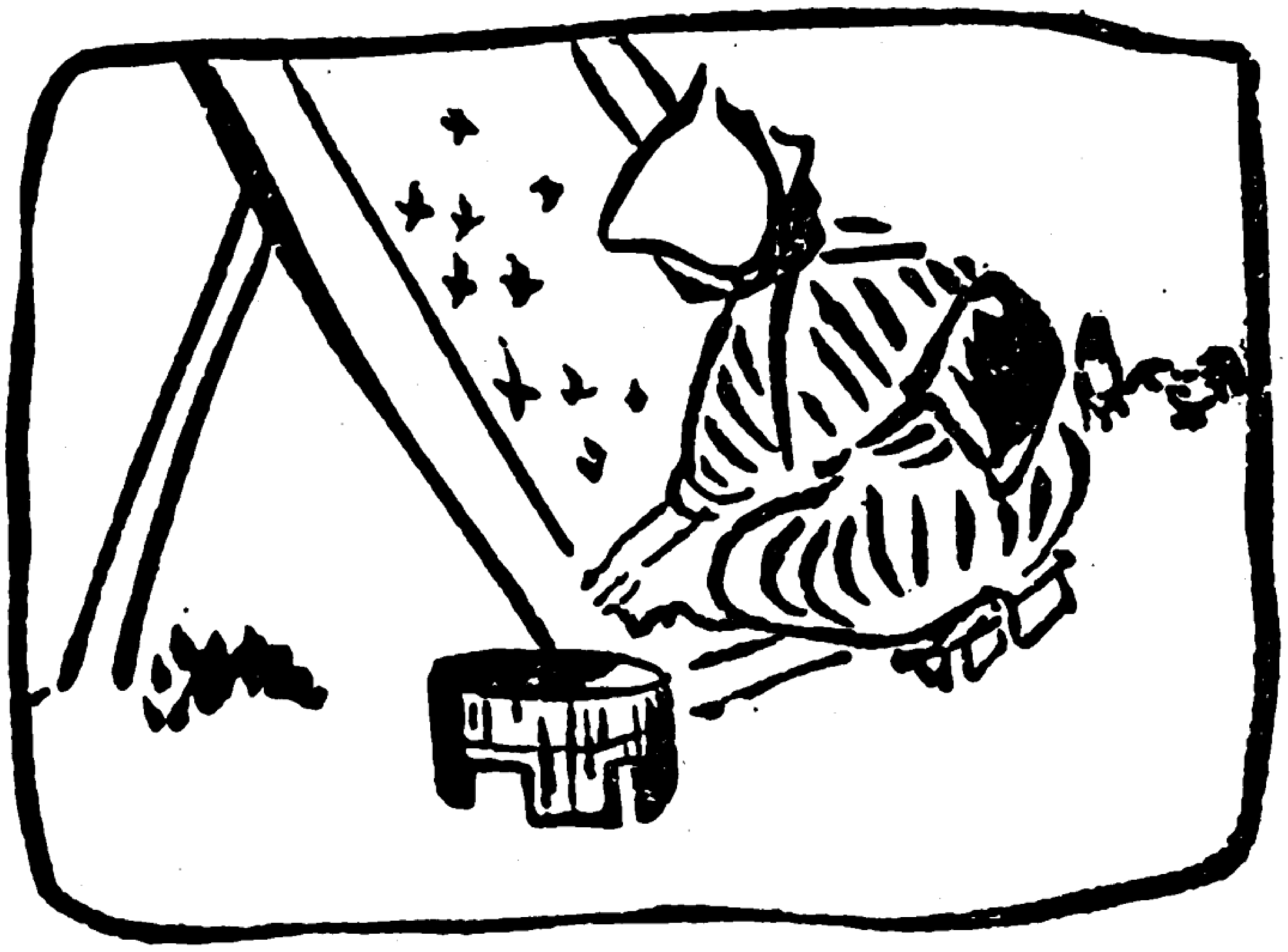
（評）趣意の文

○寄宿舎生活

鳥取縣　桑本貴佐子

九月二十八日。けたゝましい起床の鈴に惜しい夢を破られた。朝は餘程涼しくなつたやうだ。急いで點檢に出る。先生から時間變更の事をきく、走つて結髪室に行く。まだ朝の秋風が窓から吹き込む。まだ明けやらぬ曉の星は金盥の水にうつゝてぱつちり輝いてゐる。匆々に結んで室に歸る。お掃除番の人だけまだ歸つてられない。間もなく自修の鈴が鳴つた。英語の本を開いたが、少しも氣が入らない。昨夜の夢が思ひ出されて、何だか故郷の事が懐はれて、――ぼんやり考へてゐると、自修時間がすんだ。代つて御飯の鈴が、「お料理は何でせう？」つて小田さんが、「あなたの嫌ひなもの、」つて澤野さんがお仰有る。食堂に集まる、好きな卯の花汁。登校準備の鈴が鳴る。何もしてたからすぐ隣室の秋本さんを誘つて裏庭を逍遙する。昨夜の雨に私等の白萩はもうこぼれてしまつてた。

はりもの　八王子　芳村秋水女



お晝運動に、寄宿舎參觀の方があつた。さすが女子だ、と、よく整頓してゐるのを賞められた、と。三時歸舎する。歸りに返して頂いた作文を見る。二重丸がついてゐる、うれしい。

室長さんから手紙を貰ふ。尋常三年の妹からなのだ。嬉しさ懐しさの限りを知らず。紅の傘かたむけて學校に通ふ姿、隣の梅ちやんと浦島太郎歌ふ顔など、目前に浮ぶ。四時すぎ浴室を出ると、校庭の西洋柳の葉がさら〳〵揺いでゐる。小さい雨が降つてゐるらしい。

今夜は自修時間はない――住野さんが小説「行く雲」を話して下さる。終りの點檢がすんだ時、岩成先生が私に少つと用事があるとお仰有る。何だか胸がどき〳〵する。常はお母さんのやうに思つてゐる先生

が、今夜は恐ろしい樣な心地がする。然しいつもの懐つこいお顔でお仰有つた事は、決して恐しい事ではなかつた。

（評）平凡なる一日の生活を書きたるながら、讀みて飽かぬに筆の力をみるべし。

○一日記

遠江　黒田繁子

二月一日。晴。寒は未だ明けないが、今朝は何となく暖かで春のやうな心持がする。今日は舊暦の大晦日なので、おぢい樣は半僧坊樣へ年籠りに行くといつて、七時頃お出掛けなさらうとすると、今年四つになる妹のてるちやん「あたいもおぢいちやんと一所に行きたい」つて大困り、おぢい樣が「てる子やおとなしくお留守居して居ると、たくさんお土産を買つて來てやるよ」と仰つたのでしぶ〲ながらあきらめた。

八時頃妹ふみ子の髮を結んで居ると、郵便＝妹がきれいな繪葉書を持つて來た。「どなたから」といへば「姉さんの大好きな方」といふ。手に取つて見ると靜子の君からの御玉章、くりかへしくりかへし拜見した。

午後、二三日此の方、待ちに待つた女子文壇が來たので急いで開いて見たが、自分のは一つも載つて居ない。けれども撓まず屈せず投書したら、いつか載るかも知れない、もつと一生懸命に書かうと決心した。三時頃妹が歸校して、先日栗田樣に貸して上げた本を持つて來たが、其お禮として見事な折詰を下さつた。

夕方竹内樣より兎の子を買ひに來らる。八匹の中二匹をえりだして上げる。今日までは親子とも一所に居たのが急にわかれて行くのかと思ふと、かあいさうであつた。

夜は女子文壇を繙き夜の更くるも知らなかつたが、おばあ樣に促されて十時頃床に入つた。

（評）飾らぬところよし。

日記文に就て

枯林生

本年から私が本誌の日記文を選ぶこと丶なりました。私は中學校女學校の作文課を受持つて、随分悪文には少からず悩やまされて居ますので、この上、悩まされてはと、一時御受けを躊躇しましたが、扨て實際諸子の御作に接しますと、大體に於て諸子の筆に感服して選評が樂みの一となり相です。この樣な豫想外の結果をえたとは、一に文稿を寄せらる丶諸子は少くとも文筆に親しんでゐる人達で文學の趣味を皆有して居るからであると思ひます。が、然し諸子の文に接して滿足は未だ出來ません故、老婆心から一月募集の文により少々注意しておきます。

（一）文字の明瞭。文字は充分明瞭に願ひたい。上手下手は致方がないもの丶、わかり易く丁寧に書いて下さい。随分中には走り書で、亂雜で讀み悪いのがあります、亂暴に書くのは自分だけの日記なら兎に角、殊に他人の校閲添削を乞ふ樣な性質の文には失禮に當るので愼むべきことです。恰度獨言をいふ場合は何んでもかまはぬもの丶、他人に向つて云ふ時、殊に目上のものに向つて云ふ時は丁寧にわかる樣に云ふのが當然、文章もその通りです。

(二)紙の表にかくべき事。これはつまらぬ事ですが、一回の應募の文中四五人は屹度裏にかいてゐます。紙の表裏位わからぬ事がない筈ですが可なり有るから困ります、殊に女子としてはこの樣な注意は萬事に必要です。云ひ換れば衣服を裏返しに着ると異るところはありません。

(三)詞の女らしかるべき事。女子の文は女子らしくなければいけません。ところが時々男子の詞遣が見えます。一二の例を申すと。

同情の涙は持つてゐるわい
先生は待つてゐて呉れた
蟲をぬられたには閉口した
へんてこな形に出來た
教科書は實に無味て欠伸が出た
大の字なりに仰向きて

(四)材料の撰擇。腕は慥かであつても取材の平凡なものは選抜に洩れる道理、花實共に供つて始めて妙文と云ふのです。日記はその日の記事を有のまゝに書くには違ひないのですが、その材料に就て考慮撰擇は勿論必要です。

(五)規定を守るべき事。投稿規則中、日記文は卅行限りと正しく斷つてあるのに、規定以上の日記文が一月應募の文中十篇ありました、中には佳作もありましたが、規定以外なので採用しませんでした、その人々の名を注意のため次にあげます、

下野、高子。　本郷、むらさき。　京橋、三好まさる。
上毛、藤波ゆき子。　北海道、山田くにえ子。

彼岸詣　北多摩　原よし子



下谷、蕉雨子。　靜岡縣、福井道子。　高知、田村幸子。
布哇、上土井定子。　本所、秋山欣子。

その他。殊更に遣はずともよい處に英語を遣ふ‖たとへば。本といへばいゝのにわざ〳〵ブツク。門といへばいゝところに、ゲート。寺といふべきにテンプルなどは、あまり英語をふり廻し過ぎ文情を損ひます。又歌と句との區別を知らないで、歌日記といふ題であり乍ら、かいてあるのが俳句ばかりなのが二篇ありました。假名遣文法上の誤は追つて纏めて注御意しませう。選者の側から申すと毎回一等を撰びたいのですが、未だ一等をつける樣なのが參りません、どうか奮發して、一等の毎號出る樣に願ひたいものです。

○胡蝶日記

仙臺　河原榮子

四月十日。朝より春雨しと〳〵と柳の絲をよりかけ、餘り陰氣なるまゝに、讀書も手につかず、悄然として椽に佇みぬ。昨日まで蕾かたかりし緋桃の花、今朝の雨の露にや、二片三片咲き初めぬ。そが上に羽翼きまでぬれたる蝶のとまれるいと興深し。

同十五日。心地よく瑠璃色に晴れ渡れる空に、糸遊ゆう〳〵と立ち昇るひるさがり、野原續きの北向の離れ家に針運び居れば、やゝ遠き野に時色のリボンさしたる女子が、黄なる蝶と共に追ひつ追はれつ戯るる、いと愛らしく見ゆ。

同二十日。先頃來の雨の露ひにて、榴ケ岡の櫻は滿開となりぬ。長閑なる一日を野に憧憬れんものをとうかれ出てぬ、少女ならで今日は我も若がへりて胡蝶追ひつゝ進みゆきぬ。心樂しき日なり、歸れば我無二の親友光子の君より自筆の繪ハガキ、御得意の和歌一首添へてたまはる、ゆかり深きなかなればなり。今日はいと心ゆく日なりき。

新體詩

横瀬夜雨先生選



▲規定　詩形詩語何れも自由なり、成るべく振假名を多くし、句數は二十句以內とす、用紙も締切日も前同斷、一人一篇か限り明晰に認むべし　懸賞は甲種の規定に據る。

一等　○嫉

はこだて　山田邦枝子

てら〳〵と、太陽はあくどき熱を吐く、
眞夏大野を、つと走る、青きさらめき蛇の、
瞳と合ひし我魂の、秘めしねたみや——
今やけ石にもえさかる、熱のいぶきを吐き出せば、
黒きかげろふゆら〳〵と、又彼女をのせて湧きのぼる
ねたましや——
極熱の地にうね〳〵と、上りし影をたゞ死ねよと、
我魂は、あせりにあせり、（八千丈の綠の御髮かきむしり
胸のほのほに焼かんずー）と、ひたはせに、影なる君
を、追ひゆくや、——あゝ眞夏の野——、
ふと三尺の美しき、野守の神が御鏡を、
ゆく手に近く見出しぬ。
（澄める面に名も知らぬ、小さき水草薄色に、
又限りなき蒼空の、不朽のかゞやき、
同じ面に影うつし、平和の王國を示す——）
あせり狂ひし我足は、ものゝおびえにすくまりつ
らん〳〵と燃ゆる瞳にかへり見し、
胸の鏡の醜の影——
（生命の水はかれはてゝ、殘るは罪の堅き澱。
醜の石ころーてら〳〵ともゆるほのほに息づみて
一つ〳〵にかげろふと、ねたみの毒氣わきのぼる）
我胸はわなゝきそめつ、—影はや——と見やる彼方、
いつしかと影は消え去り、
大野の熱にさからひて、男々しくたてるかんらんの
すゞしきかげを見出しぬ——。

三等　○產土神

徳島縣板野郡松島村　長曾我部菊子

葉は木より散りつくし、萬象の戰慄ける
十二月なり。松稀に、森こそは木を透いて
高澄める蒼穹を見すれ、實に冬は「崇嚴」の
まさり行く野の社。

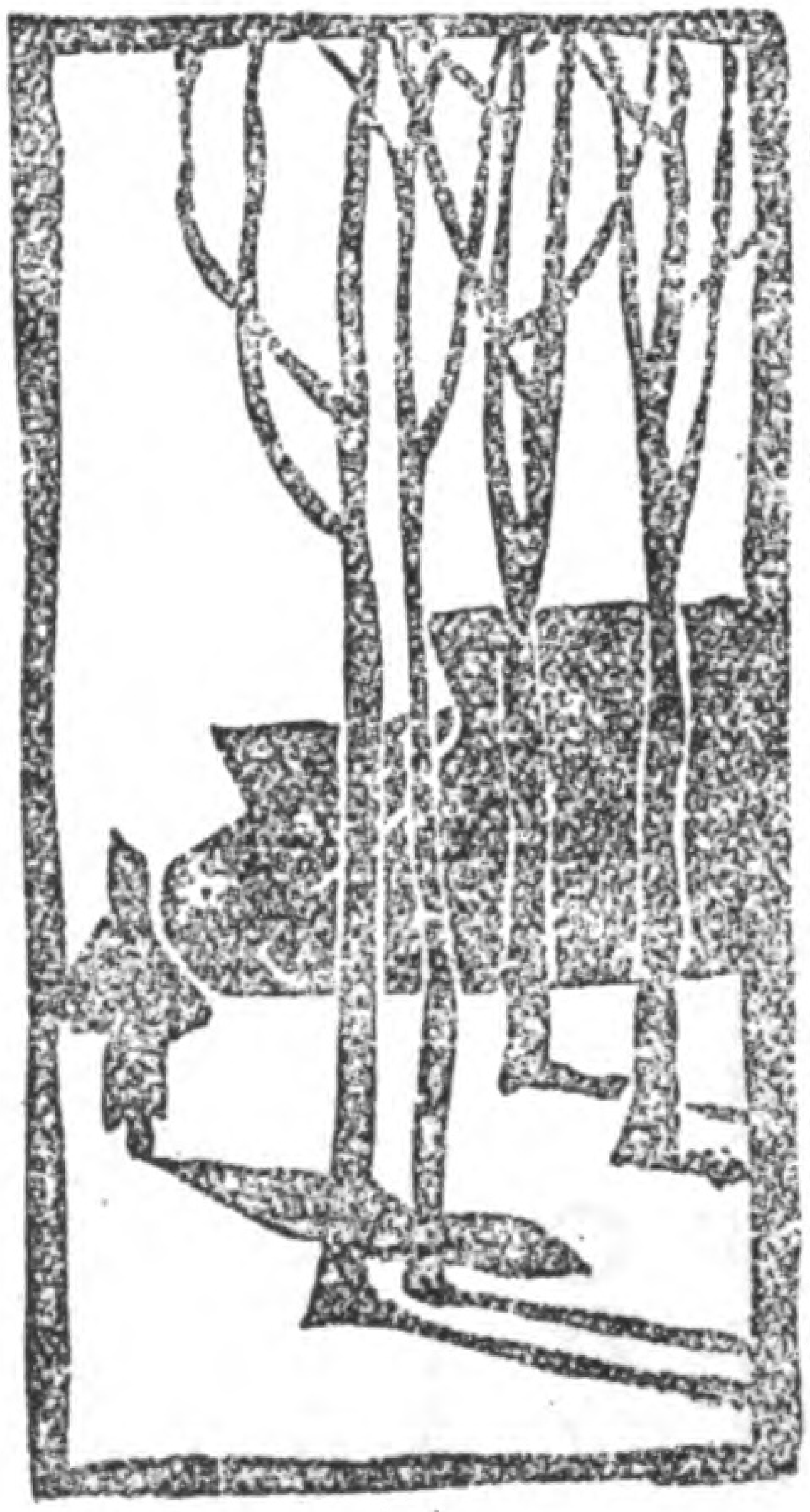
現心なや――濕めり葉は、
ほそほそと漲ぎらせ、
羽を伸してのびやかに、
（つと憶ふ――十三にして、
双頬は仄の羞恥に、
たわや手にからめける。
境内はるか柔き香を
在りし代の白鳩は
華表をばとべるかな
女となりし年の春
嫋らなる振の袖
「幼時」の微笑や――）
うら悲し今胸は、
「誘惑」の征矢をえて
終夜に痛苦むもの――。
軀の罪に立ちなやみ、
驚愕の瞳を見上げ
野の宮の枯れ木原、
見はるかす遠春の
あゝさては夢むなし。
流石なる泪にて、
「榮光」を切に想ふ――。

四等　○少女の胸

日本橋區濱町二丁目十一番地　若杉とり子

開け放ちたる我胸の、
只暗黒の胸の室、
扉を打ちし其刹那、
月朧なる夜の如、
他にほこらんのほこりより
身を横にして出て行かん、
扉は風に閉されて、
悶え惱みの手をのべて、
薄き光のさし入りて、
扉口に人の影立ちぬ、
扉開けなばその影は、
行くな我春永久に、

悲月夜　京都　寵梅女史



かへりみる世の坂は
散る花ときえにける

五等　○恥らひ

群馬縣利根郡久賀村須川町三九　森下花子

胸なる機は幼な氣の、
白き經いと柔らかき
少女の心のびくくと、
數ある玉の管を巻く。
今筬を投ぐる、刹那こは、
愁ひか幸かものゝ影
あな素絹の端緒は
不安もまじる鈍のいろ。
幻影を追ふ足どりに、
筬がひく糸の數を吸ひ、
金絲もさては眞黑なる、
ツとこそくどれ經糸を、
少女なりきのわが自覺、
きりくはたり踏交ふる、
こゝろの機の緯絲は、
我は少女と成りてゆく。
虹の七彩よろこびの、

失ふ戀の悲しみも、
一人をおもふ夢ごゝろ、
眞白の絹に問なく織る、
あゝ彼は孕らむされ今、
機織の少女わかき身は、
耻らひといふ紅の色。

秀逸

○膝

茨城縣　久野たか子

誰れ添ふとなき一人ねに、
鳥の羽入れし枕して、
抱けば抱かれて忍びかに、
寂しきかげや母あらば、
見せぬは若き耻らひの、
夫もとがめじ、ふくむれば
かくてみとりの花園に、
母とも呼べな紅の、
長き春日をみとり兒の
遣はしゝ夢は淡からむ
何をか願ふめの色の
人見しりする子ならんに
乳くびよ黒くならざれど
出てぬに吸ふか親なき子
戀の夢こふ日とならば
てがらかけたるわれは人妻

○夢幻の境

麹町　野村光子

異象の其中に
憂愁に沈む若き子を
惡魔の號呼いと高う
幽冥の世に導くと
嘲罵の笑冷やかに
打ち下さんづ其刹那
かすかに響ゆる細聲は
青年を憐憫の天使が
救はんとての其みこゑ
あゝ危しや一瞬時
奈落の底にと陷つものを
天使の凱歌いと淸く
ふと目醒めしよ夢路より
叱咤の鞭を振りあげて
沈淪の淵へ落さるゝ
愛の眸の優しくも
救ひのみ聲なかりせば
敗れて惡魔かげもなう
安意のむねを撫づる時

○秋立つ日

上總　內山雅子

朝日射す門に吊せる
燕はもの怖ぢしてや
雛子に秋こそ立てれ
畑じめり莠は伸びて
南蠻黍は赤鬚たれて
河近き里にしあれば
破風の上に舌鋭になきて
胸白のみ使者の樣や。
篠木の風に搖げば
幾度か來れども入らず
芋の葉の銀雫れ
幼き蜚とぶや
懶げのしほたれ姿
鶺鴒はけぶれる母屋の
秋立つと告るが如くも
西向のくゝり枕に

執念くも病は癒えず、
傷手負ふ蚕をあはれみ
毒草の蔓る中へ
飲み饜きし牛乳をそゝぎぬ

○ひなまつり

静岡縣　増田せん子

紅けに黄色にむらさきに、
七彩はける宵の灯や、
牡丹、から獅子、金鶏鳥、
工こらし丶繪襖や、
金屏めぐる奥のとの。
つゝみ篳篥、笛、太鼓、
五人ばやしの合奏に、
けふをはれ衣の謠ひ女や、
緋扇かざし舞ひ姫も、
七福神も舞ひやせむ。
七重の綾羅をかつぐなる、
花の寶冠いたゞける、
眉はにひ月たまひとみ、
はしき姿の内裏雛、
花のかんばせ桃かをる。
裳かゝげてはぎ白く、
磯ぶし奇しき汐汲の、
陰にかくろひ花あらなくに、
いきどほるまゝの矢大臣、
胸に高なるせめづゝみ。
草もち匂ふそがうへに、
まつ毛長かる鶴千代や、
政岡乳母も侍べりて、
いともひもじき仙松の、
雀の歌のあはれなり。
下にはひなもはづかしき、
櫻と梅の乳姉弟、
白酒くみて嬌樂の、
乳母さゞめく祝ぎ歌に、
笑まひ羞かし女夫雛。

○白露

三河　藤野ふさ子

例へば少女十七歳を
肌や白き柔胸に
戀しき人をゑがきては
紅き血潮の高湧けど。
さておぞましき逆潮の
たけびに消えて一人泣く
吁さむしろの陰府の扉に
知られて朽ちん妾の如。
愁を抱きて立てる身の
運命は同じ露の身の
あゝたゆたへる其の胸に
如何なる思籠もるらん。
冷き陰府を永劫の
行手と急ぐ身にしあれば
末裔思ふては今更に
凝愁の眼朦朧と
消え行く曉の白露見たり。

○動物園

長野縣　金衣公女

山茶花の蕾のよだむ、
小春月空に雲なく、
雄孔雀が瑠璃の彩羽に、
麗かの日影匂ひて。

繪工が筆とる樣を、　いぶかしむ白衣丹頂、
荒鷲は古巣夢見て、　徒らにうつらくと。
南歐の鳥の囀り、　聞きながら檻に獸せる、
やもめ虎細目長閑けく、　園守に蒭餌論ふらし。
活動に瞳かゞやく、　獅子王は起居あらゝに、
金髪の流るゝ背に、　こぼれたり紅葉一ひら。
小羊に懷紙與へて、　逍遥の園は日たけぬ。

○冬

三重縣　北村みつ子

大杉の葉はうちふるふ　姿は森の星あかり
見よ、大童黑髮を　まばらに亂す姿かな。
星は氷りぬ、空洞木に　夜を目醒す木兎は
寒み羽ばたくひと音に　巢に寐る鳥はをのゝきぬ。
死の手とひゆる木枯に　杉の大木はまたふるふ
そのたまゆらに森の魔は　怒り、狂ひぬ、かゝる時。
天の氷雨はおぼらかに　森にそゝぎぬ、森の魔は
つよき力に人里へ　投げぬ、つめたき玉霰。

○蕃椒

京都　宮原薔薇子

萬象は萎れ行く、　いらくの眞夏にも、
拗ねものやたうがらし、　優しくもしろき花、
やはらかの靑き葉に、　たしなみの姿ゆかし。
ものみなのよみがへる、　こゝろよき秋の日を、
何ゆゑの憤怒ぞや、　熱焔燃え血を湧し、
傲慢の舌を刺す、　小氣味よき唐辛。

○森の人

美濃　川上村女

日の神の、閃輝き昇る、み光に、
冬の魍魎は、奥山へ、逐はれにたるか、
滿ち亘る、春の氣配。」
春姫の、肌にふれたる、微風に、
優しき音色、送り來て、宮殿に響く、
春の曲、——鶯の聲——。」
綠濃き、老樹の梢、美しき、
森にしあれど、神寂て、いと崇嚴の、

神の領、（いよ〳〵尊し）。」
たゞ一人、詩に狂うて、さまよへば、
聖き天使の、みつげにと、鳥の諸聲に、
我にかへる『森の人。』

○涙は流る　京都　吉田靜枝

深紅の色に染めかふる
あゝそは戀か心なる
花の香あさり蕊むしり
倦み遠去り移り氣の
情なし君を憎み得ぬ
弱き心をはげませど——
空ろの胸の野づかさに
蟲の穴して殘されし
魂の壙、鈍眼して
たゆたひ勝に見かへれば
涙は流るおのづから——

○荷馬車　名古屋　宮地すみ

曉けぬれど、
さびれたる大氣は默し、
亡骸かも巨き胸して
萬象は息吹くとすれど、
北風に。
大橋は、
裸身の肩は寒げに、


つれづれ　大坂　今四こゆき

横樣に、
痩馬は生血のにじみ、
活動の『刹那』を前に、
碎車又何時の期か
蹲み勝、河面けづる
雪どけ凍てし胸の苦痛、
空車響を立てゝ
過ぎぬるや、乾れたる肋骨
堪へがたき思あるかに
ゆるぎしぬ。
ふときゝぬ、
寒空に鞭の高鳴り、
荷馬車今勢にまかせ
から〳〵と踏み出す刹那
慘ましう覆りけり
橋の上。
白息ずむ振の哀れさ、
頽れて喘ぐか、あはれ

執りゆく。

〇夢　　越後　清和歌波

しゞまなる獸しの道は、それとなきねはりのまよひ
耳鳴りと遠野のひゞき、果てばては思もほそり
花白くほのりと浮ける。
君戀ひのわれは夏野に、語らひの夢見のさなか
とゞろきの思にさめしと、夢中の夢がたり。
青木立根よりのどよみ、すみ行きて花とも浮んに
よりそへば君また消えて、高まれる胸さはぎ。

〇香の火　　周防　谷滿緒子

人もなき——
辻の御堂に、炷香の　火の光をば憊疲しる
不安の眸にてかいま見ぬ。　——
小さき頭に瞬ける　煌は莖にくひ入りつ、
みじかき身をば寂滅し、　むげにし昇る香煙に
沈寂のゆらぎたゆたひつ　灰の亡骸慄きて
殘には殘る—然こそわが　魂に溟涬身に傷けて
殘るは戀の亡骸よ。——

〇霜柱　　美妙子

朝の宮殿さら〻かに神のさざめる霜柱
菊の枯葉も底る紅うすき玉床や
櫟の木の根一めぐり土のやはきをたよりては
うねなしたてる長き城遠く枳殼の垣根まで
こゝに小山の裾により光り輝く殿造り
光榮ある座裡にして扇は人に秘められぬ
やがて旭の昇りなば稜角彩を現ずとも
鳩の下り來て踏まぬ前運命脆く壊るべく
命短き朝あけよたくみの長き思ひてよ
わりなく落ちし我が泪珠の柱は流れたり

〇寒月　　土佐　石川きよ子

さら〳〵と水は岩間を、すべりゆく聲す幽谷底
冬の夜の月はとろ〳〵、寂寞の山をのぼりて
月光は今深々と谷底をさすあゝ怖れ岩は震ひぬ。
蕭やかに霧はみなぎり、青丹づらう光ふらふら
冥の國凛よひ來れ「陰と暗」おぼろかに

幽谷の底よりうかび出つ、あゝ怖れ生は凝りぬ。

○駒生れぬ

若代 根本松江

価なき百花咲きて、萬象は甘き香に酔ひ、
罪の子の醜き骸、窈冥戸の隙より洩れて。
星影淡き春の朝、
いたいけの駒のいなゝき、
馬小屋に起りて、
栗毛若駒生れ出てぬ。
（あゝ去にし霜月、
失ひし戀の甘酒
谷に求めて馳り行く――
砂礫路に歩みぞ疲れ。
悔悟と嗟嘆の負傷激しく、
あゝたぢろぎぬ世がくれぬ。）
冬枯れの胸にして、
春待たぬ身にしあれど、駒生れて吾血温みぬ。
紅き雲西にたゞよひ駒の嘶き春風ときゝぬ。

記者曰。詩欄の選者横瀬夜雨氏微恙ありて本號に限り評語を缺く、特に諸嬢にお斷り致し置く。

花實り　佐賀縣　樋口御幸子



○異郷

布哇 上土井定子

拾有餘年住みなれし
波濤萬里の雲へだつ
野分けの中の女郎花
製糖場の汽笛音高く
オアフの月のさやけくも
心はいつも故郷の
戀しき故郷をあとにして
異郷の空にながむれば
深き思ひに沈むかな
小さき胸に響きては
エアの流れは清くとも
小天の空に通ふなり
幸多かれよ父母よ
健かなれや妹よ
秋風たちし昨日今日
恙なかれと祈るなり

○病

佐世保 井手芳子

あゝわれは病を知り得たり。
若き血の迸る頭を、
青菜にも似たる顔して、
病は苦しきものなるを、
病は死神の使なるを、
使を追ふか遁れ行かれるか、
人世病の無きならば、
苦悶とてはなかるらん、
あゝ厭はしや病して、
われは苦悶の子となりぬ、
空は漸々暮れ行きて、
あゝわれ病みぬ苦悶の。
温泉の湯氣の立登る、
病の今日も失せなんとす、

○夜鳥

臺北 稗貫みつ子

夜の鳥こそ飛び来れ
梅の梢に羽音たて
と見ればまたもかへり來て
飛迷ふごと思はれて
月の光の下にして
遥きみ山にかくれ去る
たとへば人の亡魂の

新論文　編輯局選

▲規定　論文と云へどむつかしき事に限らずやさしき議論を歡迎す、同じく二十四字詰三十行以內半紙又は罫紙に認め一人一章限り、投稿締切は毎月十五日、懸賞は甲欄に據る。

四等

○誌友倶樂部論

上毛磯部　元　子

私は近頃誌友になりましたばかりの淺學者ですが、誌友倶樂部について愚意をのべたいと思ひます。先交際から申します是には永久的と云ふ語が餘程見えますが一時的の方が宜しいでせう、總て女子の嫁した後は、娘時代の樣なわけに思ふ樣にゆきませんそうですから（人々によつて異ひますが）一時的として其の後に、よいと思つた方に永久的にと交際を求めても決して後れません。次には男子の方て、本誌は女子の讀物てすが男子にも隨分、愛讀者や投書家が多かろうと思ひます、したがつて誌友倶樂部にも、女に化つて居るものがありませう、いえ必ずあります、現に私の近所にありました、てすから信ずる事が出來ません。もし男子て交際が求めたい時は、本名を記してもらひたい、芝居の聲色の樣ですが、匿名などては甚だ卑劣千萬。この樣な男はろくな者てなく、兵士になつても鐵砲の音に驚いたり又は戰爭の場合等には逃げたりするのてせう。それから圖書交換これは有益の樣てすが、讀んで見ると驚きます。曰く魔風戀風金色夜叉濱子夏子（內容は知りませんが何れ戀物語てせう）この樣な物が過半をしめて居ります、私等が斯樣な小説を讀んて有益てせうか甚だ益があるとはいへません、こんなものを手に入れて喜ぶ人は、愛だとかラブだとか唱えて、內心理想の夫はこんなのがよいとか、或は自分もこんな美人になりたいなどと小説中の人を見て突拍子もない事を考へて的もない戀愛病を想像して居るのでせう、同じ書物でもこんなものゝ交換は見るも嫌です、處が多い、て有益の書の名は中々見つからない。益ある書物の交換をして、得る處あり、得る處あつて圖書交換に花は咲いたので、小説などは只一時の興を、むさぼるばかりて後の爲になりません、なぐさみには、お伽噺か本誌新聞位て澤山てす。今後は盛に有益の書物を交換し、價値ある讀書をいたそうてはありませんか。

永久的より一時的は記者も同感、小説交換も文學の修養の爲なら一槪に排斥出來ませんが、皆同じやうなものゝ取りかへ引きかへ交換して居るのは少しをかしい、もつと書物の種類が變化せねばならぬ、要するに此論、誌友倶樂部寄稿家の一讀に値ひす（評）

五等

○獨身

周防國呼坂局内　熊野綾子

私が或る獨身者に向つて、世帶の苦勞や小供の世話がなくてさぞ氣樂であらふと云ひましたら、其人が、孤獨の便りない味をしみ〲と話して聞かせましたのでなる程と、あるあはれの感に打れて、深く〲其人に同情しました。

人と生れて不具で無い以上の獨身者は、人の人たる道に立たぬいはゆる日陰者とても云ふべきて在ませう、近頃の女子は、あまり學問が頭へ上つて居るせいか、獨立心に富て、やれ米國婦人がどうの、理想の家庭てなければ何ぞと云つて、折角の良縁を爲めに打てはされる樣でありますが、そんな人こそ先が知られます、なるほど獨立心も誠に必要て在まして、いざ一家の破産となれば十分自活の方行を立てるしかくもなければ成りませんけれど、それはれい外て、一旦女性に生れた以上はあくまても夫に從ふべきて在ませう、いたづらに我意をつのつて理想のほこさきを向ると、それこそ忽ち衝突して火花を放つ樣になり、厭世の淵にしづむ元てす、獨立は理想て、女性には入用の少ない方て、いざの時以外は之を常に出すべきて在まいと思ひます。

米國婦人とても決して獨身者を尊ぶでもなければ又獨身を好むでもありますまい、むしろ自分の運命を悲しむ方で在うと思ひます。

獨身論者頂門の一針、論は奇抜でないが急所を衝いてゐる（評）
又曰く、獨身と獨立とは違ふ、女子の獨立とは獨身を守つて我意を張れよとの事てはない、自意識を持てよとの事てある

秀逸

○圖畫に就て

愛知　永田舞鶴子

圖畫に就て不才の妾が、第四年第二號の圖畫について、少し妾の所感を述べて見ます。

まづ、一番眞先に、二階から見た通行人。工合よく書けて居ります。此の畫は仲々老練家てなければ書けません。貴女の觀察の點にはほと〲感心致しました。けれど、彼れに少し似よつたのが或雜誌に有つたかの樣に記臆して居り升。次はしばかり。身躰の割に柴が上の方に多くつて下の方が少いかの樣に思はれます。また、出した足を右としますると、一寸横に屈んでは居ませんか。又左としてもどうか可笑しく思はれ升。初日の出。日の出の工合は此んなものでしようか、太陽の光が水に映つた所ですと、木の邊りまで池ですか川ですか。飴賣。頭の上の重みて潰れたのか、顔が大きく、おまけに丈が短いぢやありませんか。また太皷叩く棒が割合に長すぎる樣に見えます。お正月。ブア

イオリンと云ふ物はどちらの手で引くのか妾は知りませんが、左の手で引くものでしようか。桐本梅子さんのお書きなすつた此の畫の人は、左の手で引いて居られます。尤も引く其の人の得手にも依るでしようけれど。年のくれ。針仕事して居なさる此の人の左手は、少し高くは有りませんか。洋燈が前に据えてあつて、針臺の陰が右の方に映るのは不思議です。また針仕事しなさる人に陰が有つてよい處に無いぢや有りませんか。佐野次郎左衛門。いくら圖畫だからつて是では無茶です。うしろすがた、これは餘程よく書けて居ります。然し陰のないのが不足の様に思はれ升、鬼ごと。彼の顔の態は如何です。令嬢としてある間敷き畫です。以後注意して貰いたいものです。まづ此の位で止めて置きますが、第四年第一號で今西こゆき様が呉れ〴〵もお仰つた通り、皆さんは、書き放しの無茶書きですから不可ません。少し光線の工合から、釣合と云ふ事によく注意して、書いて貰ひたいのです。

要領を得たら、此種の新論文もたまには結構です、人生問題や婦人觀などもよろしいけれど、先づ議論は手近から始めた方が確からしい（評）

○家庭の讀物に就て

岡山縣　國富榮子

一般に家庭教育と申しましても種々ありますが先ず家庭に讀書の風習を注入すると云ふ事は我國目今の家庭の狀況から見まして最も急務であろうと思ひます。元來讀書の利益は第一に精神に慰藉を與へ第二に其人格を高尚ならしめます其他不知不識の間に大いに得る處がありまするのは私しが今更事新しく申し上ぐる迄もありますまいと思ひます、語を換へて申しますれば家庭に讀書の風を盛にしまして文學趣味を加へますと云ふ事は其家庭の圓滿なる平和と幸福を保持するに缺くべからざるものと信じて居るのであります、然らば如何なる書物が家庭の讀物として好適であるかと申しまするに家庭の讀物と致しまして第一に歷史的讀物即ち孝女、貞婦忠臣義士の傳記がよかろうと思ひます、斯う申すと私しの頭腦が舊式であるとか見識が低いとかお笑いになります方々もありましようが、私は飽くまでも此の說を維持したいと思ひます、總て少さい時から道德的精神の修養を積ませまするには直接高尚なる倫理的書物より、其材料を歷史的に採た方がよいと確信致して居るのであります、併し之れも餘り詳しいものになりますると讀に困難でありますし又學校へお出掛の諸孃樣には課目の勉强の妨げとなりましても恐ふございまするから、可成淡白した簡單な書物がよいと思ひます、此意義に於きましての講談物等は最も歡迎致すのであります、それに次いてはお伽噺の樣な物もよいと思ひます併し愛に過ぎ奇に偏する嫌いのある

ものもあるかも知れませぬが、あらかじめお伽噺なる事を呑みこませておきましたならば、害は少しも無かろうと思ひます、まだ申し述べたい事もありまするがあまり長くなるから一寸此處て筆をおく事に致します

○人の善惡は家庭による

少し書き方が堅くるし過ぎるが意は能く徹底してある（評）

臺灣　稗貫みつ子

或る人曰く「人は天然皆同じ心もて生るゝものなりされど、萬異なる家庭に生長するものなれば自ら萬人萬異の心となる」と允に其如くなり我友人に立派なる人あり世人一般に「かれは性分よかりしかば彼の如く立身せり」と評せりとは誤解せる言ならずやいかに性質よき人たりとも生れし時は誰も同じ心なりこれを善にするも惡にするもひとへに家庭の敎育による立身せる友の家庭は世の模範にしたき程の良家庭たりき友の成功せしも家庭敎育の力なりと云ふべし孟子の世に其名を高めしも家庭によれり我友に世間より排斥せられ詫しく日々を送れるありよく其家内を見るに其祖母なるは古へ某大名に宮仕へせし人にして常に自慢話し絶えず「われは幾百人の意地惡き女の中に交はりて一言も惡樣にいはれし事なし」嗚呼此言のいやみ多きよ意地惡き女とはそもよき語なるべきか此一言にても其人の心は讀まるべし家人二三人集へば他人の惡口陰口の話しのみなり幾百人の宮女と交際して一度も惡しく言はれし事なき友の祖母は年老ひし今尙ほなど人の批評を云ふべきさるを先きにたちて人の陰に家人の惡口までも喋々とのぶるは若き昔の行ひも自ら知られていと苦々しさても家庭の其子女に及ぼす感化の偉大なる哉我友は其家庭の感化を受けて萬人に對して「僞り」「自慢」を言ふを恥ぢとせず人をのゝしり陰口を云ひて泰然たり其心恐ろしと云ふべきかだいそれたりと云ふべきか實に惡みてもなほ餘りありと云ふべし憐れ我友は惡しき家庭に育ちて天然の清美なる心を忘れたり望み多き若き身は家庭のためにくちし身とはなりぬ、くちし心は快復せず、唯老いて悔ゆ

梨賣　盛岡　節子



るのみ。

一個の處世觀、今少し論法の適切を缺く（評）

○樂しくくらせ

羽前　波華せい子

やれ貧乏でつまらないとか、あゝ誰さんは幸福な人、私もあんなになつて見たいとか、女といふものは、兎角愚痴ばかりこぼしたいものでございますが、私は、かやうなことは、ほんとに好みません。

どうせ短い生涯ですもの、長くはない命ですもの、一日でも半日でも、此貴い生涯の一部である月日を、愉快にすぐす方が、よつぽどましだと思ひます。

貧乏でつまらないつて、いくらこぼして、みたところで、どこからお金が出て來ませう、まさかおとぎばなしぢやないし、天から降つてきますまい、地から湧いてもきますまい、だんだんに、心配に心配を重ねて、遂にヒステリーにでもなつて、世間の笑ひ種になるばかり、それよりか、今日は、何を、明日は彼れを、それが出來たらこうしよう、あゝしよう、と前途に希望をいだいて、何かはなうたでも歌ひながらせつせと、働いたらひとりで豐かになりませう。

あゝあそこの奥樣が羨しい、こゝのお孃樣が羨しいつて、いくら他人を羨んでみたところで、どうするわけにもゆきますまい、それより何も彼も天命と諦めて、樂しく暮したら、それこそ眞の幸福でございませう。

それで、人はなんでも、自分をはかなんだり、人を、羨んだり、そねんだりをばしないで、何時でも、快活に、例へば、花笑ひ鳥歌ふ樂しい春のやうに、神樣に賜はつた運命に滿足して、樂しく生涯をすぐすべきものだと思ひます。

快樂論者、少女の時代は此方が好いかもしれない（評）

○共　同

岩手縣　佐藤篠子

人の數多集る處に居る人は、いづれも共同といふ事を念頭に置いて働かねばだめです。なぜといふと私は實際其事を味はつて、見たのですからよく覺えて居ます。私はこの寄宿舍へ初めて入舍した時は皆やさしい人人だとばかり考へて居ましたが中々そうではありません。だんだん月日を送る内には總ての人の、眞性が現れて來ました。人の陰口をたゝく人もあれば亂暴な人もあり勤勉な人怠る人さては不品行な人迄があつて、新聞にあぶつたりして、一人のために皆が世間から無視されて居ます。寄宿生百人の内私と心の合つた人はたつた一人しかありません。だから皆が何か話すと心が合つて居ぬから、どこ迄も自分の事を成し遂げようとするから遂には口論迄して仕事もはかどらず。日々心持が惡くなります。してはいけぬといふ事を爲し、してもいゝといふ事を捨てたりするのは、共同心がないためでせう。一家の主婦となるべき私等は共同心にかけたならきつと一家が圓滿でないでせう。私等は或る事業を起そうと決心して居るのですから相談すべき人はたゞ前にいつた通り心の合ふ人一人の外誰れもありません。一致共同心のないのは誠に困つた事です。これが國家に及ぼすのですから、私等は共同心を養成して事業に失敗せぬようにしなくてはなりません。私は同室の人が共同心無いのを遺憾に思ひます。

和歌

佐々木信綱先生選



▲規定　殊更に舊派と言はず、從來の如く清新の調を望む、原稿は半紙を用ゐ一人一首を限りとす、本名を記入すること、締切は毎月十五日、懸賞品は乙種の規定に據る。

二等

鐘の音はわが眼の前に故鄉の
　ひろき野見せてなり渡るかな
安房國大山村釜沼北　兒松ひやく

三等

佐保姫の花の瓔珞緒をたえて
　眞玉散るなり白藤の雨
上總　ひさ子

四等

かりそめのみ言葉にさへ涙ぐむ
　弱き心をわれとあはれぶ
豐橋市鍛冶町五五增吉方　ます子

秀逸

○周防　萬差子
しづけくも葬送のこれの行き過ぬねむの花咲く森の下道

○伊賀　菊山かね子
鶯の雛と孵らば我が思ひかりそめならず君に飼はれむ

○備中　菅森紫水
街はづれ菜種黃に咲く掛茶屋の店に舟まつ女づれかな

○播磨　生田睦子
佳き人は細らに戶あけ鶯の初音うかゞふうらゝかき日や

○遠江　增田ぎん子
つみ草に倦みて眠れる少女子の夢のゆく〳〵花野飛ぶ蝶

○下野　榮谷德子
白鳥の群れて飛ぶごとあさあけの空を流るゝ初夏の雲

○三河　桃山すま子
ほとゝぎす青葉のかげに高鳴きてほの〳〵明けぬ水匂ふ里

○上野　木暮香子
磯づたひ花藻あさると海士少女うたふ小唄に春の潮わく

○神田　宮原白鈴
花のせのやさしき聲にあけそめて春の雨ふる京の町かな

○上總　內山雅子
うき人のまろ寢さましぬさと香り琴に來て泣く春の夜風

○長崎　一瀨みどり
草花に契りはかなく別れてはさゝやきひくき野の小水

○伊賀　前田くに子

灰色にうるむみ空と海のはてを白き帆過ぎぬ故郷おもふ
○千葉縣　內山苔花

しら姫の御使馬の蹄ちらかす玉のくだけの薄雪ぞふる
○群馬縣　飯塚ちすゐ

日うら／＼緋桃白桃みだれ咲く中に家あり機の音する
○大阪　今西こゆき

春の夜や遠音の琴をなつかしみそゞろ歩きぬ花散る小路
○美濃　目島眞砂子

若くしてわれは病みけり蔓草はものによりても花の咲く世に
○仙臺　河原染子

花に雨薫づる春の黃昏やよき人めかし琴彈いてゐぬ
○下谷　細谷鏡子

夜は更けて一人ねむれぬ折からにまぼろしに見ゆ亡き友のかげ
○熊本縣　池邊しづ子

なつかしみそとよる窓にひら／＼と舞ひてこぼれぬ緋牡丹の花
○岡山縣　智世枝子

うら／＼と濱路はるかに眺むれば畑につゞくあまのひと村
○秋山　みどり子

若菜摘む里の乙女の影失せてかすかに響く夕暮の鐘
○信濃　花世子

おん姉の淋しき笑みに泣く宵や秋雨ほそう小はぎ亂るゝ
○大阪　ますみ

一枝は君にさゝげむしら梅のあまりにきよくわれにふさはぬ
○遠江　林衛子

みどり葉の茂る大野をなが／＼と白蛇の如く春の川かな
○若狹　長谷川菊尾

小流れに鍋の飯洗ふ若き人の畑うつくしき梅日和かな
○伊賀　岡本露子

雲いろ／＼夕べの空に飛ぶ鳥の行衛もしらにちりぼひしかな
○橫濱　鈴木染子

夕暮に笛の音遠き松並木牛引きかへる里のたをやめ
○靜岡縣　吉川敏子

綠野の牧場見廻る小童の膝によりくる小羊のむれ
○廣島　たつ子

梅が枝に雪のつもるを花と見て去年の跡とふ谷の鶯
○兵庫　田中春子

うかりける世にすてられて世をすてゝ入りにし山も浮世なりけり
○大分縣　原たも子

白壁に梅の香薫る椽の端に蝶ならで風の飛び來ぬ
○伊賀　阪本逸子

朧月二十五菩薩居ならびておはする堂の春寒きかな
○牛込　櫻井美園子

初雛や筑摩河原の松多きばら／＼村は紫にして
○佐渡　本間みづほ

朝の日に深き櫻の雲はれて若鮎汲み居る瀬の筏かな
○越後　志賀美代子

玉あられたばしる夜半に胸のなやみいよゝもつれて泣きくづ折れぬ
○神戸　松永龜枝

わが魂は君を慕ひぬ春の日を牧人慕ふ小羊に似て
○本郷　朝井千とせ

契りしあすの花見や如何ならむ風雨さびしき夜半の春雨
○岡山縣　小林雪子

なつかしき君見おくりし夕まぐれ雁むれ渡るあら濱の上
○美濃　飯島みゆき

なぐさめて心ろすゝませ賜ふ身かと運命思へば又も泣かるゝ
○茨城縣　塚田きみ

月はおぼろ亡き人しのぶこの夕風なき庭に櫻はなちる

○ 大阪　華桜
大君のみ手にそだちし常盤木のたけより高き君のよはひな

○ 京橋　三好まさる
梅かほる南のゑんに京紅をとかしつゝ聞く鶯の聲

○ 越後　欧川幽草女
なまの音をしるへに乳母のさとゝひぬ花ふゞきするゆふぐれの野を

○ 上総　奥いち子
僧一人座禪に耽る山寺の眞晝靜けき白桃の花

○ 芝　若松咲子
朝まだき野路のほそ道分け行けば散らすも惜しき若草の露

○ 常陸　塚田そう子
鐘音の起らぬ儘に時告げて心得顔の庭つ鳥かな

○ 信濃　駒澤みつ女
今日かぎり君と別れぬ君行きし方を朝夕吾は眺めぬ

○ 日向　甲斐玉歌子
春の夜の心清らか春の山胡蝶飛らん花の若葉に

○ 福井縣　片山千里
冬の宿榾火圍みて旅人が峠の雪を語たらひ合ひぬ

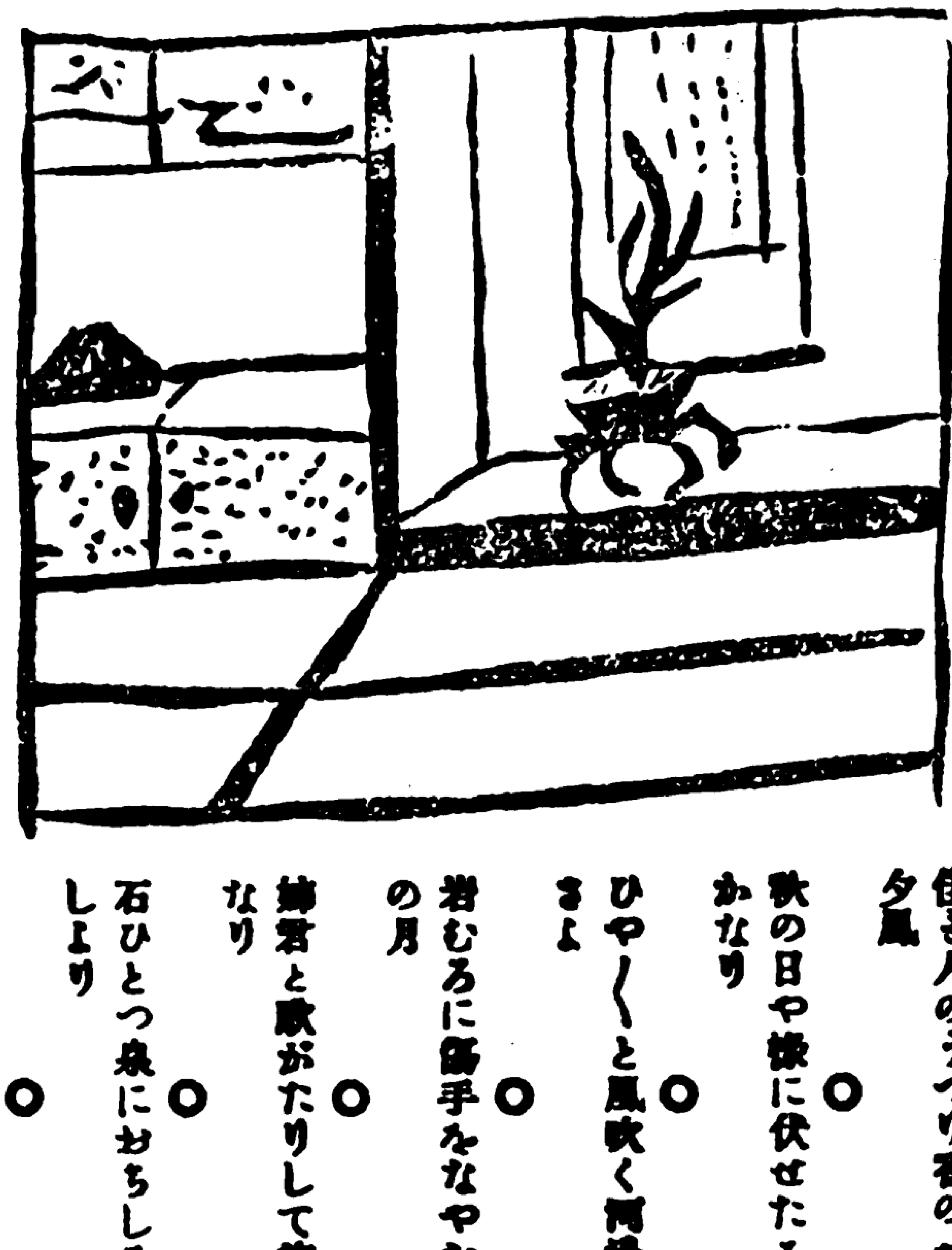
○ 信濃國　二葉子
破れ籬繕ふ人もなきまゝに梅亂れ咲く遲春にして

○ 府下　瀬々とし子
汐風に松原つきて春寒み淋しう笑みぬやつれにし姉

○ 常陸國　今泉磯千鳥
鶯の子がなやみに春を怨ぞと息吹く霞か野山うするゝ

○ 伊賀　伏見富子
力なき蝶のゆくゑを見て泣きぬ君ゆく旅に事なかれかし

○ 豊橋　大原ひさ子
行く人の霞に消えて追分の歌のみ聞ゆ春の山里



床の間　手塚たい

○ 静岡　根岸真江子
春の朝嵯峨に生れし朝霞み漂う流れて越國加賀へと

○ 石川縣　きみゑ女
梅が香に奥山出てて我庭に一聲落しぬ鶯の聲

○ 三重縣　西山銕子
今朝見ればつもれる雪に神さびしふるの社も新しく見ゆ

○ 信濃　とき子
佳き人のうつり香のせて翠玉の緋房ゆすりぬ春の夕風

○ 若狭　津田汐汀
秋の日や柿に伏せたる檜の笠に蜻蛉止まりて庭静かなり

○ 越後　石寺とりゑ
ひや〳〵と風吹く河邊に少女子の大根洗ふ肌の白さよ

○ 豊前　霞女史
岩むろに傷手をなやむ荒鷲の聲ものすごき冬の夜の月

○ 山城　廣江正枝子
姉君と歌がたりして梅谷の梅の花見る日はのどかなり

○ 伊賀　芳澤きし
石ひとつ泉におちしそれのごと心さわぎぬ君を見しより

○ 金田錦子
谷間なる古寺の森にさら〳〵と吹く木枯の音のさびしさ

○ 羽前　近野野霞
何賀ふ鳥の哀れも見えて春の雨墨繪に似たる村はづれかな

○ 信濃　世良田ゆう子
水仙の香りは夢に通ひつゝ想ひのくにの花をつみけり

○ 東京　濱田錦繍子

春雨にしとゞ打たれて落ちて散る花の芳魂何處へかゆく
○　肥後　富丸敏子
黒船の湊をさして入りくめりかの島かげに笛の音のする
○　本郷　竹村清子
龍住むと里に噂の五百年お山が池の社寂びたり
○　下野　くに子
送り來し君と別るゝ追分や東の國はかすみのうちに
○　愛知　野菊
降りやみて庭の木影に美くしく月に照されのこる白雪
○　福岡縣　青葉女
美しくとも花はあらしに散る者ぞ散らぬは君の情けなりけり
○　鳥取縣　桑本貴左子
春の夕よき人ふたり花の道すぎ行く彼方に花霞たつ
○　八王子　芳村秋水女
徑やんで寛の水の音は澄みぬま寄靜けし椿寺かな
○　石川縣　木屋蓮舟
春雨や土堤を往來の蛇の目傘柳にきえて日はたそがれぬ
○　佐賀縣　岩井くり子
早咲きの梅はいつしかちりにけりまだ鶯の初れ聞かぬを
○　筑後　れんげ
若菜摘む小女が袖に見ゆるかな軟き初し野邊の春風
○　千葉縣　深山りゆう子
見わたしの花は夕に包されぬ撒出す鐘のひとつ〳〵に
○　長崎　平田すみれ
我里の藁家にのぼる白煙り鎮守の森を薄うぼかしぬ
○　下野　宇賀神くに子
有明の月はかすみとなりはてゝ梅まつしろき春の山里
○　京都　武田とし子
京へ三里嵯峨野の奥の我が家の砧打つ響臨に消えゆく
○　静岡縣　大木みよ
人よりも心はつよし梅の花諸花に先だち雪と戰かふ

○　愛知縣　内山ふみ子
春日や散る山茶花に其のほゝも似て美しき笛染むる人よ
○　奈良縣　中富よしみ
急ぎ行く山駕一ッ又一ッ木立に消えてたゞ冬の風
○　麻布　細谷櫻村
うす月夜花と詩とにあかしつゝ國にひめてしわが戀路かな
○　下野　手塚みつ
よしさらばいざ友よばむ春日和七尸もやひの桃の花さく
○　神奈川　森田靜江子
月を賞め歌ふ聲よし花の宴酒酌む皿に櫻散りける
○　宇都宮　藤掛孝
春の日の霞たなびく其間より見ゆるともなく見ゆる富士の嶺
○　埼玉縣　熊宮光江
沼に沿ふ十餘尸の村霞してかひ家鴨なく長閑なる日よ
○　西多摩　森田志満
さゝやかな村にも春の日はてりて水鳥遊ぶかたへ菜の花
○　君津郡　鈴かつ子
夕ざくら花にかくれて青嶋のなくなる山の塔に雨ふる
○　群馬縣　森下花子
象乘せし異國船の涅槃祥に錠卸ろせる人もうて哉
○　土佐　高橋白ばら
つゝましう火影にかしこむふり袖や春をわが世の平和姿
○　越後　五十嵐みつ
夕まぐれ柳の小橋急ぎ行く少女の袖に春雨の降る
○　下野　宮田いち
ながめつゝ思ひに更けり秋の夜の月かげ清き故郷の空
○　三河　梅子
餘念なく詩歌の案ひもとけばまどに差し入る有明の月
○　紀伊　杉若白波
島山に着けば日の出やわが舟をかもめ群して歡び迎ふ
○　福井縣　文子

思ひ出に今一度と立ちかへり別れを傳ふ里の谷川
○ 千葉縣 三浦あい子
そよそよと風の調も靜かなる夕月淸きひなぞ戀しき
○ 紀 村 みつ子
年立てば野面の雪も斑にぞきえて嬉しき鶯の聲
○ 信濃 鹽川ゆき子
かぞふれば三年の昔棄てられし母もの云はず寫し繪の中
○ 金子片枝
よき聲を桐のうれ實に秘めおきてすゝ虫よ汝はいつ地いにたる
○ 攝津 小百合
一枝を君に送らん梅の花ひとり愛づるも心ならねば
○ 日本橋 神藤喜代子
春の風よろひの武者の駒とめてうらむ勿來の花ふゞきかな
○ 東濃 鐵女
夢醒てといちの君を思ふ哉淋しく聞ぬ春雨の音
○ 埼玉縣 岩田婦左屮
櫻咲く一里の堤は黄昏て見つめし蝶の白かげきえぬ
○ 美濃 內藤みち子
花の春青葉の夏のその暇を結ぶゆかりの藤の花かな
○ 姫路 尾田三三子
兩翼かざして立ちぬ野の果の一樹の上にひそめける鷺
○ 日向 乙女
しろたへのなかにかほれるうめのはな赤きこゝろをいろに出しゝ
○ 上野 桂浪なみ枝
緋桃白桃若鮎むるゝ水に沿ひおさの音すなり霞の底に
○ 愛知縣 數女
垣の根にすがたやさしき菫ぐさ東風吹く今朝を花の咲きそむ
○ 越後 婦久子
經の音にふと我針のゆるむ時おぼろながらも亡き母を見ぬ
○ 千葉縣 佐藤よし子
大空は梅の香に霞みつゝきりに明け行く男松原かな
○ 弘前 佐野てる子
ふりし世の約言おもひけふもまたひとりもとほる花の下かげ
○ 備前 高橋[illegible]生
紫の狩衣よそひ笛吹きて興じゆかばや櫻ちるみち
○ 熊本縣 富野かずを
佛前にそなへし櫻はら〱と幼き喪主のかたに散るなり
○ 岡山縣 宇佐美文子
父母は如何おはすや白雲の積る思ひも晴れぬ空かな
○ 近江 太田靜花
秋の野に風さわめきて旅路の榮華よ人の今夢はてぬ
○ 奈良縣 中富よしみ
汝が父を泣きて見送るこの夕べ背の我子よ何を夢見る
○ 大坂 眞田芳子
春日和河を隔てゝ粉壁の小さき寺見ゆなつかしの國
○ 上毛 都野盈子
うらわかき花の子春をやさいきにうたふは神の幸福多き園
○ 京都 田中文月
宵のほどかすかに見へし薄月の影は隱れて雲ちぎれ飛ぶ
○ 青森縣 木村てつ子
野に行けば胸のひめ草花さくを忘れましなと春の風ふく
○ 巖手縣 佐藤銕子
春の海遠くかすみて明け方の星消ゆる時舟一つ出ぬ
○ 安房 ゆきえ
春雨にぬれてたゝずむ梢より落るしづくは梅の香ぞする
○ 兵庫縣 黑田[illegible]葉
きのふまで春し來ればと松が枝に積もれる雪も今朝とけにけり
○ 長門 藤井[illegible]子
たのもしく友と遊びし我庭に白梅老いて花二ッ三ッ
○ 鹿兒島 犬飼たき子
散る花にものおぢするか我が宿のとだへがちなる鶯の聲
○ 大阪 木村すゑ

ながしゆく糸の調も凍る夜に狂女川邊に子の名呼ぶなり
○　韓國　義田せい子
いとゞなほ故郷の君を忍ぶかな飛び行く空の雁をながめて
○　常陸　平澤やよひ子
月の瀬の梅まだ寒き衣更着の問ふ人もなき春の山里
○　相模　末子
夜もすがら深き思ひにしづむ時あわれ身にしむ山寺の鐘
○　石川縣　大屋日枝
よとせ振り思ひ出多き古里の門の青柳はや見え初めぬ
○　下野　梅澤哲子
父と母はらから三人いつたりは月に興じぬ梅匂ふ窓
○　遠江　伊藤みどり
むらさきに暮るゝ野の水野の端山鐘の音きへて夕月ひくき
○　岡山　池田芳子
波越さぬ末の松山越えてきて千賀の浦曲に君おもほゆる
○　高知　竹村よし子
たゞひとり默して歩む野の道を霧雨細う闇せまり來る
○　伊豆　石原時子
朧夜や花の息吹にさまよへば屋てる方に笛の音聞ゆ
○　熊本縣　藤村たくゑ
あきらけきもなかの月もくもるかなきみしのぶよひおのが涙に
○　秋田縣　鈴木紅子
たゞ一人思ひにふける薄月夜ほろ／＼と散る梅の花
○　土浦　佐野常代子
からころと下駄の音さゆる朝寒に網うる子の聲あわれなり
○　秋田縣　佐々木貞子
淋しさを共に語らん友一人そゞろにほしき春雨の宵
○　大阪　明子
鶯の遠音きゝつゝ曉の夢に彷徨ふ月ヶ瀬の里
○　羽前　杉葉女
たそがれて清々と漕ぐ船の帆の影赤き湖の春
○　靜岡　貞水女
ほの暗き洋燈の下に我母は煤け古びし糸車繰る
○　沼津　笑村
花陰によれば昔の忍ばれてかたみの御歌口すさむかな
○　徳島縣　若槻徽子
物淒きこがらし今や音たえて若菜摘むべく野はなりにけり
○　伊豫　曉子
稲守る衣よき人をうらやみぬ美しきを命の乙女子なれば
○　栃木縣　東原けい子
暗燈に荒れ手をかざすやもめかな賤兒泣くあたり春風のもる
○　韓國　佐藤房子
雪の朝寒さを堪へて歌よみぬ拙なきふでの先こゞらして
○　伊賀　山村龍子
柔草に小羊あそぶ野の中の乳母が家戀し春雨の日は
○　岐阜縣　柘植ちか子
遠山の雪ほの白う傘を並め干す街の春あたたかき
○　鳥取　岡垣淑逕
新玉の朝汲みたる若水に清き心の影ぞうつれる
○　西多摩　入倉有子
四方の山去年のみ雪はのこれども春とし云へばいと長閑なり
○　上總　牧野とよ子
いつもより早く明けたる雪の朝餉とり急ぐ我が兄のきみ
○　伊豫　高井白百合
初かすみ立ちけり山は佐保姫のきぬのもすそをひき給ふ如
○　長野縣　津金澤枝子
山里は峰の嵐に雲はれて庭の千草に月ぞ宿れる
○　岩代　沼澤信子
皆人は花咲く春や待ちぬらん我身に積る老も忘れて
○　岐阜縣　度會清香
世の中の波の立ち居も打ち忘れしばし長閑けき花の影かな
○　備中　鶴英子

花もゆれて新潮よすを美しとしばし見とれるいその曉　石見　松浦信子

○あれ果しいゑりの園の梅の花いと床しげに咲き匂ふかな　周防　磯部松代

○寶島は柳の枝に曇りて長閑けき空に春波ぞ立つ　岐阜　しげ子

○流れ行くこの一片の菫花誰が無情のみ手を離れし　伊豆　上原よれ子

○朧月や小夜ふけわたり入霧たてば海神いかりて波起しけり　伊勢　佐々木らく子

○まとゐして昨夜のつゞきとせがむ子に笑みて語ぬ白鷺の翁　下谷　霧雨子

○寶鳥の夢まどかなる梅が枝に月も來てぬる春のよはかな　大阪　廣瀬正子

○梅が枝に鳴きてうつろふうぐひすの翅ましろにあは雪ぞふる　山形縣　鈴木とく

○小がへるものぼり行くかなひとすじのやなぎの枝にたゞさはりつゝ　大隅　富來みふ子

○ふりつもる雪の下より梅の花香り床しく咲き初めにけり　沼津　長井とら

○影薄き山の木かげの道もせを獨り樵夫の急ぐ夕暮れ　茨城縣　小松崎なをえ子

○くれなゐの脈のほれの岡よりすゞに似る眼を見はりたる君　長野縣　橋本今江

○故郷になき友の家おとづれば替らぬ梅のにほひこぼるゝ　大阪　岡[illegible]枝

○楳の村柳の村の境川舟に帆を見ず春の雨降る　福岡縣　細川村雨

○常盤なる松の緑に色はへて染る血汐のはち紅葉かな　京都　綿引鳳砂

○給はりし忘な草を鉢にして君がめぐみをとはに眺めん　阿波　西野みどり

東の障子に鳥の影見せて夕たづれ來ぬなつかしき友　千葉縣　森たち子

○出でまし〻姉がかたみの笛袋解きてそと調す月の細徑　下野　野中とみ子

○古城や雉子飛び立ちて夕淡の虹の輪くゞり菜の花畑へ　京都　宮原紫紘子

○小春日や信濃の人と紀伊人と舟待つ宿に我里語る　京都　岡千代子

○うす煙人ほど高く山越えぬ船の庭燒く春風の磯　金澤市　高村やす子

○いやましに御稜威かゞやく大御代を仰ぐもかしこ橿原の宮　奥　碓井松枝

○去年の春契りし事のあだ枕夜半の嵐と君は散けり　京都　吉田靜枝

○乘船の白帆に群れて飛ぶ鳥の影のどかなり波靜かなり　山口縣　鬼武美津子

○久かたの空ゆく月のさやけさにをちの野山も見え渡るなり　鳥取　山田萬壽子

○



スケッチ　上毛　飯島きよ子

おばしまに我立よれば朧夜の月にさやけきつま琴の聲
福岡縣　香月綾子

○

笠城山峰の白雲むら消えて麓の里ぞ霞棚引く
熊本　山崎くに子

○

乙女子が琴の調べもあわれなり花ちる窓に春雨のして
千葉縣　山本きかど女

○

窓押せば山ははるかに霞りてふもとに桃咲く古郷の家
濱田　小松原女

○

若水をすゞりに受けて妹と二人歌かく窓に初日昇りぬ
伊豆　杉山すぎ子

○

さびしきに語る人なきみなし子のつらき運命をいかにせむはや
上總　松本ふじ子

○

凪ぎぬを數しと見ゆる春の海霧を浮べて水鳥遊ぶ
飛驒　野口ふじ

○

うれ〳〵とまがれる路は春たけて菜畑くわ畑きみが家見ゆ
茨城　大崎誠子

○

よもすがらなくやふくろの聲はしてれ心淋し冬の山里
臺灣　稗貫みつ子

○

夏の夜半三つの人影しのびゆくかささぎの山の新月の空
秋田縣　伊藤けい

○

幸ならで數に泣く子の世に多し吾が手にたのむ神はいづこに
京橋　飯塚時子

○

今宵しも君かへらんとまちし夜も音なく明し君はかへらじ
工藤榮子

○

芹つんで返る少女の袂ふき春風かほる小山田のくれ
豐後　田能村米子

○

谷間もる初音の主や何處なる過るを返し耳かたむけぬ
越後　和歌波女

○

うらさびし我がなつかしき姉君の嫁ぎたまひし日のこゝちして
茨城縣　谷貝雄子

○

花はちり木々の梢はしげりけり春のゆくへを誰にとはまし
長野縣　内山けさよ

○

七色の雲たなびける遠方や浪しづかなる蓬萊の島
豐後　姫島佐智子

○

沖を來る風白ふして鹽田に鍛た走しる島の冬哉
佐世保　井手芳子

○

うつさんと染めし繪筆も擲ちぬあゝ美しきなつの夕燒
下總　平山きさ子

○

青柳に懸る春雨音もなく流るゝ水に家鴨戯る
茨城縣　永井誠子

○

平和なる若野をひとりさまよへば春風ゆるう雲雀の謡ふ
滋賀縣　ふき子

○

梅さくら花の盛の春はきぬ人の心も浮き立ちにけり
青森　村林矢須子

○

紫の雲のうすれの絶へまよりもるゝ夕日にかざす銀扇
北海道　秋霞生

○

女郎花桔梗かるかや亂れたる山路たどれば月さしのぼる
和泉　高橋輝子

○

初霜に足をもたたぬ巡禮人杖ほし顏やあわれなりけり
伊豫　勝山みどり

○

野も山も里のわらやも白銀のたゞ一いろになれる今朝かな
千葉縣　高濱尙尾

○

順禮の聲ゝほのかに夢に似て聞えもすなり菜の花日和
播磨　佐久間紅花

○

遠寺の鐘もかすみて聞ゆなり梅ちる里の春の夕暮れ
茨城　道江女

○

よしたとひ常盤の梅は見えずともせめて送れよその香なりとも
熊本縣　むらさき女

○

濃緑の潮もけふりて醉ふこゝき春の海べに櫻鯛釣る
巣鴨　農夫子

○

津輕の海霞こめたり層なきあいぬの里も春や知るらん
徳島縣　濱口かれ子

○

田舎路の端もえ渡る草の上につれなく見ゆる春のあわ雪

○　大和國　花菖洳

駒とめて猶ちる花を惜むかな風もなこその關の夕くれ

○　安房　伊藤くに女

あを〱と野邊に生ひ立つ若草を雨が摘み終ふ口惜しかるらん

○　彼志　橋本千草子

冬の夜や雪ふみ分けてたどり行く過ぎし昔を忍ぶ彼の峯

○　横濱　野崎謙女

風死して入日の影のあか〱と殘る古城の松にかゝれる

○　伊豆　佐藤安子

灯影みなうす紅の花小町稚兒にひかれて雛もとめぬ

○　愛知縣　永田舞鶴子

初霜や夜も白たえて軒毎に國旗まばゆく新領の土地

○　大阪　辻廣子

東雲や朝日に匂ふ雲間よりたなびきわたる初霞かな

○　臺北　鋏芳子

風もなく虫の音もいとたへ〲に枯野に冴ゆる冬の夜の月

○　秋田　三條みさほ子

吾友がいまわの際もしのばれてかなしき秋夜をたび雁のなく

○　大連　棉本千枝子

言問へどいらゑも得せぬ一つ家よ軒の月影言寒うして

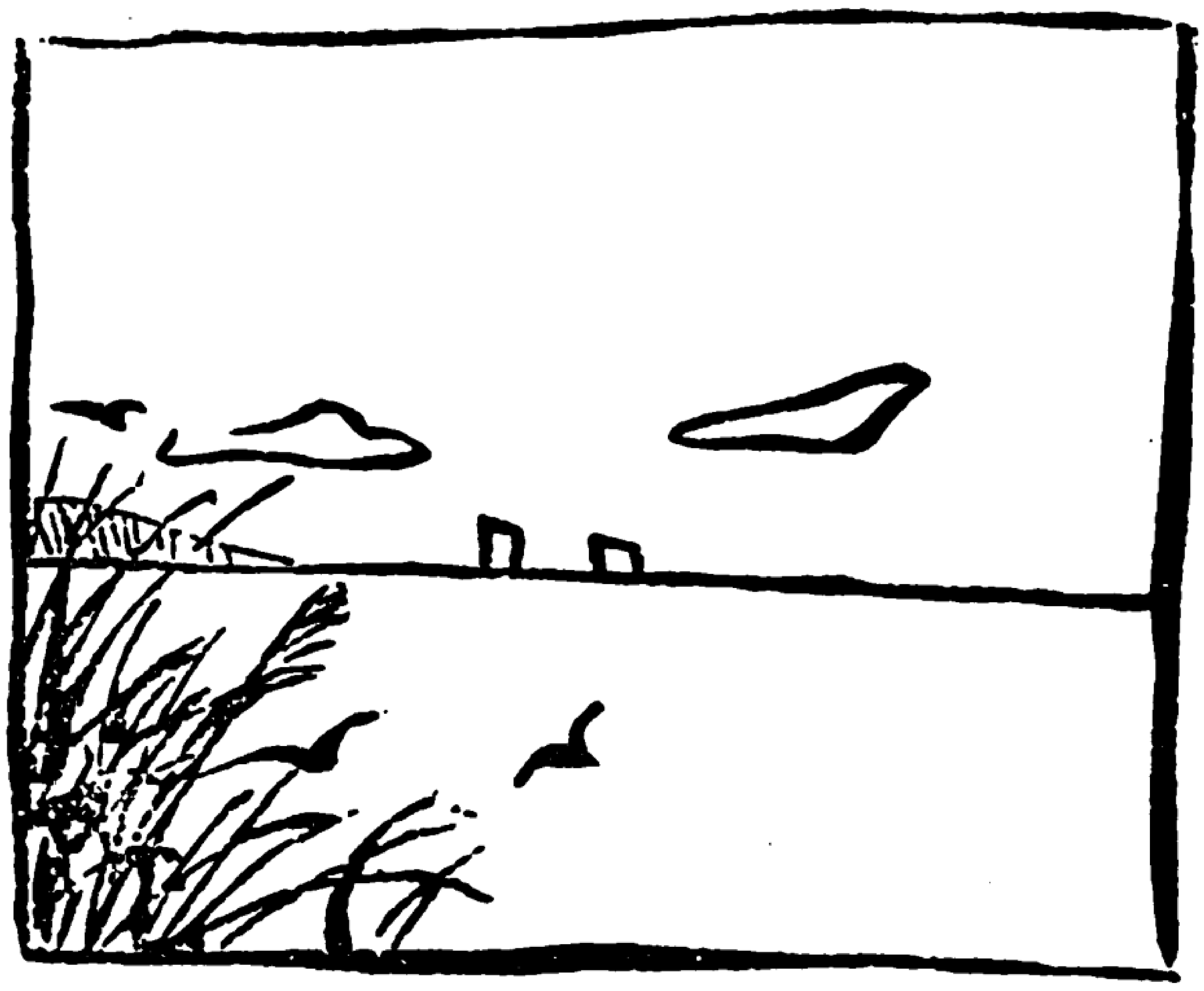
○　安藝　兒玉天涙

春の風亂れし狂女が髮を吹きて薫の花白う闇にこぼるゝ

○　名古屋　渡邊慶子

春雨は天のみ姬がしめやかにうち振る鈴と木立に降りぬ

春の海　岐阜縣　日野歌子



○　北海道　篠原靜枝

霧もなう猫も眠れり妹も眠れり春の椽先にして

○　大阪　龍江

あざやかや紅こぼるゝ振袖の鳥追の曲舞いぬ美き子の

○　鹿兒島　稲子

ほのかなる夕月影にそゞろきて花ちる下に君とかたりぬ

○　安房　兒松籟

藍王寺へ車して行くよき人の袖めづらしみ吹く春の風

○　相模　鍋田靜子

紅梅の香床しき丸窓に詩集輿がる美しの人

○　横濱　本郷以楚子

黃昏の鐘のひゞきも水の瀨もゆるう流れぬ河添の村

○　大分縣　御手洗操子

木枯しのすさぶ夜頃はしかすがに病みます母の身ぞ偲ばれぬ

○　筑前　鈴木たけ

白梅の香にほふ里の賤が家に初鶯は春ぞ告ぐなり

○　兵庫縣　田中ますゑ

夜の人音を枕にうたゝ寢の面わやさしと今日の日記に

○　豐後　菅原芳子

若草の大野の中を一筋の白糸ひくに似し春の水

○　土佐　門田富士子

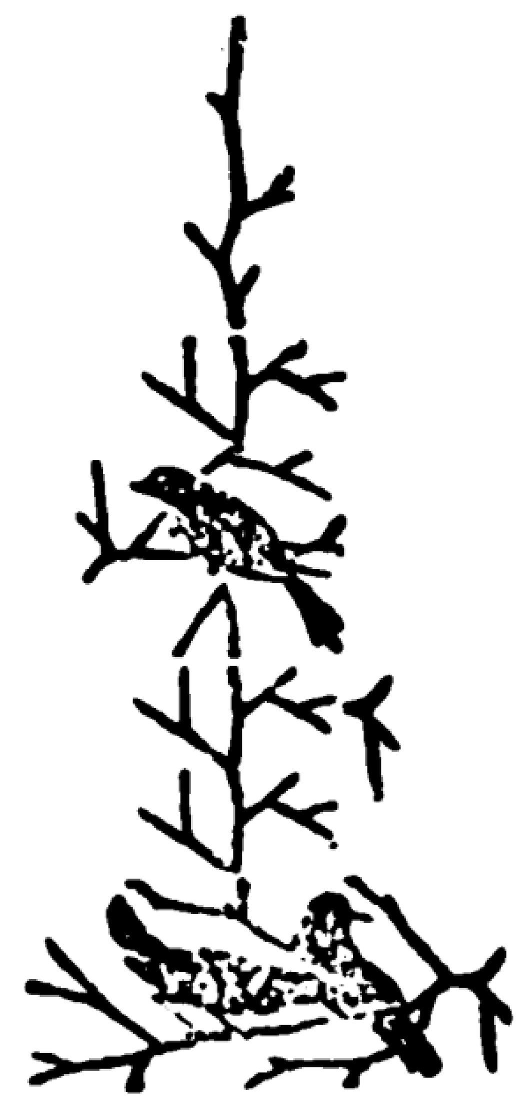
來む春はまた語らむとのたまひし君は夢か永久に別れぬ

○　四谷　八重子

朝露や砂路たどりて少女子の木屑拾ひて家路急ぎぬ

○　大分縣　加納豐子

美しき國より來しか幼子のゆめの枕にむつるゝ蝶よ



短文

編輯局選

▲規程　文章の種類は凡て自由なるべし、簡潔なる文字を採錄す、二十四字詰五行以內にして總て振假名附、半紙又は罫紙に認め一人一文を限りとする事、締切前同斷、懸賞乙種。

二等

○野道

筑前直方　田中とよ子

おや霧が降る、私は夢から覺た樣、考へると當もなく此處に來たのてある。只此道を先へ行つたら何かに逢うだらうと思つて、と云つて此樣野原の一筋道、行つたとて何があらう、さあ歸ると立ち上つたが何故か歸り度くない、矢張り夢の樣な霧の中を先へ行つて見たい。

意味あるやうな、無いやうな、夢囈のやうな感想だが、其裡に或る詩趣が含まれてゐます

三等

○水ぎは

北海道日高樣似村　宮越讓

私は海岸の最も水際を通る事が好て、毎日學校の歸りにはいつも足跡のない美しい、砂の上を一歩一歩と下を見ながら來ると、昨日は白砂砥の如くてあつた所が、今日は小石貝殼が山をなすといふ風て毎日變つて行く。

汐の滿干ぞ世の姿なる

四等

○ほしいもの

神川縣小川町齋藤地鳥海女學校內　水野照子

母樣が皆何がほしいか云ふて御覧と仰つた時に、六つの富ちやんが人形、九つになる花ちやんが手毬、妾がリボン、去年お嫁に行かれた姉さんが赤ちやんが欲しいと云ひました。そこで花ちやんが母樣は何アにと問ひますと、母樣は笑ひながら皆がえらい人に成つて欲しいと云はれました。

幸福なる母、幸福なる子

五等

○犬

茨城縣　翠子女史

玉屋の犬が白て、瓦屋の犬が黒て、與作の犬が赤て、油屋のがゴマて、村長のがジャミて、妾のがカメて、酒屋のが洋犬て、金貸のがハヂて何時でも村長のジャミにかまれる、妾のカメと玉屋の白と親子て瓦屋のと酒屋のがラブて與作のが泥棒て油屋のがフシヤベリて

妙な犬の社會が組織せられて居る。

村長犬の社會政治家も妙

秀逸

○片田舎

青森縣　三浦愛子

私の村は四方山に圍まれ海にも遠くステーションにも離れて居る片田舎であります。先日學校で地理の時間に先生が汽車を見た事のある人はと問はれると十一人ありました、船を見た人は唯一人でありました

數語ては日本の山、日本の海を一目に見れど

○雪祝

越後　日下さよの子

西洋の諺に、雪の下にパンありと云ひますが、妾の地方でも雪の多く降る程悦んで、一丈積ると雪祝とて村内のもの皆お寺に集まつて、酒宴をする習慣があります、今年は例年より早く、一月五日に雪祝がありました。

雪を厭ふとは珍し

若き母　仙畫　金かれよ



○夜學

播磨　佐久間紅花

バサーリ、バサーリと波の音がする、ザーザーと云ふのは松吹く嵐、遠く、ステーションの方でゴーゴーと終列車の音が聞える、宿題がやうやく出來たからそろそろ寢仕度をする、とたんに柱時計がねむたそうに十二打た、やれやれ之から七時迄一寢入りしませう。

其夜、其響、其所、其人が五行の文字に現れてゐる

○我家の鳩

長崎　島名ふじ子

私の家に五羽の愛らしい鳩が飼つてあります、お友立のお出てになりますと、すぐひらひらととんで來て、なれ〳〵しくよく歡迎します、其樂園は筋向ふの會社の屋根に仲よく遊んで平和な生活をして居ます。

鳩の一家に風波も起らず

○私の黒髪

肥前　紫　子

私の黒かみは長さは一尺二三寸あります、生れてからまだ一度も切らないと母が云ふて居ます、七ツ頃から結ひ初め、おさげでしたが其次は牛若丸の様な桃割、又次には束髪になり日露戰爭の頃は、二百三高地、今は戰爭後ですからピラミツト式の五百三高地に結ふて居ます。

五百三高地で能くくづれませんね

○雪消　秋田　鳥の海女

私の家では毎年舊の三月頃になると、表の雪消をします、金の様にかたまつた雪を兄様は大鋸でひきますと、私と妹はそれを橇で搬んで川に流してやるのです、こうして消さないと四月になつても雪はあるので。

小氷山、流れに浮ぶ

○花の盛り　府下　森田なか子

府下で一番名高い小金井の花盛りには、私は例も茶店の雇ひに参りますが、川岸半道餘りは丸で人の山の様な賑ひです、其故晝は目の廻る様に忙しい爲めお花見處では有りませんが、夜は獨り川岸に立つて花の雲間をもれる月の、きら〳〵と上水に映つた様を見ると思はず恍惚として、まるで天國へでも行つた様な氣が致します。

眞に花見る人

○雪茸　静岡縣　大木みよ

私の村は極山の中です雪が降ると雪茸と云ふ茸が生へます雪が降らねば決して生へませぬそれ故雪降の翌日皆人が打ち伴れてそれを取りに行きます然し楢かはんのきの切り株の近傍で他の木には生へませんそして僅か半里下の村には最早ないのです今年は雪が澤山降りましたから多く出ました。

雪中の茸、都ならば一大奇瑞

○福壽草　麻布　細谷茂子

いつも薄暗い御床間に咲きますので淋しい悲しい花とばかり思つて居ました、福壽草も今年は新築の暖い御椽で延々と大輪に開きました、そして私は初めて優いのどかな緑葉が彼のお袴の様な中に藏て有事を知ました。

福壽草初めて復活す

○光の色　大阪　倭文子

朝の光は紅く晝の中は白く夜は黒だとすれば曇つた日は鼠色だ黄昏時は淺黄色でせう

鼠色を灰色とも云ひ、黄昏をオレンヂ色とも云ふ

○大雪　越後　白蘭子

どんよりとした灰色の空からは、天の白鳥の毛の樣な雪が、絶えまなく降つて來ます、もう今日五日になります、庭の松も何も折れさうになつてをりましたが今朝はもう埋れて小山の樣になつてをります、一昨日から人足が絶えて、新聞屋も牛乳配達も郵便脚夫さへも參りません

心細い

○製紙　埼玉縣　岩田不在子

姉樣方が綿入を重ねても、大寒々と云ふ頃當地では單衣一枚で製紙に一生懸命です。小川紙とて名高く、戰時は軍用麵麭の袋紙、軍服の下着紙を製しました。平時は細川、障子紙、反物紙を製します。一日照れば一村百戸で、千圓になると昔からの云ひ傳へてです。

月冴ゆる夜の紙ぎぬた



雪の小川　名古屋　きよし

○田井戸　豐橋市　滿須子

乾割れた冬田の中の田井戸を覗いて見ますと、蒼い水があつて目高が浮いてました、是は此地方にのみ限つた事かも知れませんが、夏の旱の用意です、あゝ此目高、其れは大雨でも降つたなら、廣々した田の中をも氣儘に動けるのでせうが、私は、何うしたら遠い都へ出られるのでせう。

出れば出られます

○夢　落葉

お父樣は富士登山の夢、お母樣は竹やと二人汽車で三越にお買物に出た夢、兄樣は米國へ遊學のため、横濱から汽船で出發した夢、妹は伯母樣からお人形とリボン頂いた夢、それは〳〵大さわぎ、お前は？、と皆で尋ねますが妾何だかお耻かしくて云へませんわ。

試みにあてゝみませうか？

○御柱　長野縣　澤路れん子

私の地方では御柱と云ふて、七年目毎に、諏訪神社の御祭をします、村の若い人達が、三かかへも、ある大

きな御柱を、社の前に、建てます、そして七年前の御柱を倒しますそれ故里の人は、建家婚禮などは、七年毎に、破壊れると云ふて祝事は一切やめます今年は丁度その御柱なのです。

諏訪の御神に捧ぐる太しき柱は木曽より出づる檜か、樅か

○郵便の聲　牛込　しげ子

妾は親友と三人知るべの一間をかり女學校に通ふてます、となりへくる郵便の聲に驚かされ三人同事に立ち出ますと郵便配達夫は氣の毒そうな顔をします、何と此聲なつかしき事よ。

よその音留

○折枝　津市　徳田榮子

昨日靜子さんと御庭先でテニスをして居まして誤つて私の大切の鉢植の紅梅の枝を半ば折りましたので、早速糸でくゝつて水を掛けて置きましたが、中々花が咲きませんので私は、一輪でも早く花の咲くのを待つて居ます。

花にあやまる外はない

○歸り咲　高知　古山香花

何時に無く庭を歩いたら薮と木蓮の間に彼岸櫻が歸り咲きして居たので物好に花瓣を數へると五枚のと一枚足らぬ四枚のがあつた。

歸り咲には歸り咲だけの缺點あり

○守歌　伊勢　山路くに子

私は子供の守が野鄙な謡をうたひますのが嫌ひてございますから、諸姉様が御作りになつた新歌謡の愛らしいのに節をつけて、歌はせる事に致しました、また字も覺えるやうにと歌帳を拵えて與へました。

新歌謡、面目を發揮す

○水仙の花　東京　眞琴女

地の精の凝り固まりが、佐保姫様の御惠みに、温められて生ひ立つたのが此水仙姫だといふ。白銀の臺、黄金の皿には、聖らな戀の泉を秘めてゐる。

每朝街道通ふ花賣少女の籠の中には、常に香はしい泉が湧いてゐる。

高潔の文、能く其花を代表せり

○初春　周防　谷滿緒子

最うぼつ〳〵花の噂が始まる頃であるが、私の所の山中の寒さは早く覺め難いけれども、此の四五日の暖氣に樹々が皆翠の芽を悉く吹き出し、痩せて居た山も何となくふつくりと柔らかな味を持つて來た樣です。

香濃、山野に動く

○鳩　長野縣　こよ

妾の幼い時分には、鎮守の森に澤山の鳩が居りましたが、段々減り三拾七年の五月頃には、一羽も居らなくなりましたので、人々は日露戰爭に行つたのだと云て居ります、今に一羽も歸りませんが皆な名譽の戰死をしたのでしやうか。

忠魂を弔ふ

○歳くらべ　松本市　矢口さだ子

私の家は人數が十三人あります其中でお祖父樣の歳が八十祖母樣のが七十二、二人のとしをよせると百五十になりますそれだのにあとの十一人で百四十八しかなりません然し來年は五つよけいになります。

○雪國　米澤市　加藤はる子

私の里は御存じの通り非常な雪國です。只今では白雪が四五尺も積つて日毎の通學も誠に困難であります折から冬休みで御歸省なすつた兄樣の御話を承りますと東京はもう羽子板つきで塵が立つて仕方がないそうですお私はそれを聞く度毎に飛んで行きたい樣です。

○順序　京橋　野田はつみ

私は二卷一號から本誌を讀み始めました其時は十三になつたばかりでしたから皆樣の作られたむつかしい文章は少も分りませんでした三卷になつてやつとそれがとけるやうになり四年一號の今年からやつと下手ながらポツ／＼投書するやうになりました。

子守　筑前　深町よし子



○喫驚　千葉縣　喜多田智惠子

時は三月、學年試驗も間近き頃、一人物思ひに耽りつゝ運んで、ある家の側に來ると頓狂な聲でワンワ……ンと、思はず驅け出した、後を見ると大きな眞黒な犬の畜生めが失望顔、向ふの店に若者五六人、からからと笑つて居る、妾の喫驚したのを見てでしよう。

○櫻花　南總　靜子

うら／＼と、いと長閑な小春日に、暖い風が櫻の花をのせて、妾のお室へ舞ひこんで來たので おさへようとしたら、美麗な胡蝶と化して妾の手へとまつた。

○落日の影　神田　宮原白鈴

落日の影、やう／＼暮れそめて、四方一帶の空をオレンヂ色に染め、餘光は更に野や松原や山や川や、さては その間にある家、舟、馬、玉の如き聲もて 追分節を歌ひつゝ家路急ぐ農夫までも、遍く照せり。塒に急ぐ 晩鴉の一群の、落る如く飛び行けり。

○別れ　大阪市　和田芳子

もう今日一日で此の懷しき土地を去らねばならぬかと思ふと、何んとなく悲しくなる、あゝ長らくなじみ馴れた、天神山や吉野川にも、今日限り接する事が出來ないのであると、思はず窓によつて外を眺めると、無心の山はいつに變らず美しき姿を横へ、清き流は今日も自然の音樂を奏して居る。

○雪　駿河　天野ふじ子

重々しい雲が低く往來して空氣はどんよりと濃く妙に冷たい風が吹くかと思ふ程、雪がちら／＼と降つて來ました。先づ飛石の上、それから石

燈籠、庭の樹木迄も徐々に眞白く粧はれました。夜手燭を灯して庭を眺ひますと、まだ頻りに降つてゐます。

○姉樣へ　上總　山下美枝子

茂原町に嫁に行つた姉樣から、漸く昨日產をしました女の子ですと云ふ知らせがあつたので、何んとなく嬉しくて堪らなく、早速一月の女子文壇に、成長なすつたら此の雜誌の愛讀者にして下さいよと、書いて一丁ばかりはなれて居る所迄て行き、ポストに入れました。

○此口　芝　小林脤子

生れ落つるとお母樣のお乳を飮んだ此口、朝起の御褒美にお菓子を頂いて食べた此口、赤いお衣をねだつた此口、オルガンと合せてよく唱歌を唱つた此口、卒業式に答辭を讀んだ此口、來年の春には坊やお乳！お出て〳〵を云ふのであります。

○寒あけ　宮城縣　咲枝

きりし前髮の大びしまげ仙臺平の袴に紫縮緬の振袖姿まるで繪に畫た樣だつたよ。お父樣は。謡は——內——と云ふ聲が御殿中にひゞくと聞惚ない人がなかつたそうだよ。とお祖母樣は御小性時代のお父樣の事をおつしやる。私はあのお父樣にもそんな花の樣な時があつたかしらと思ふた。

○東京　芝　德田末

私は生れてこのかた東京に十八年も居りますのに御話しするもはづかしいくらゐ東京の圖をしりません此の間も田舍の人にきかれまして返事に困りました。

○妾は　名古屋市　藤井しづ子

笑ひ遊ばすな、妾は目方拾六貫あるのよ、年は拾八歲番茶も出花よ、姓は楠名は清子と申しますの、至つて肥滿だわ、此頃しきりに英佛語練習中なのよ、然し此別嬪を嫌いなさる殿御があるの、妾此頃失戀に泣いてますわ……。

○頭髮　新潟縣　川崎貞枝子

後から引張つて見たいはオサゲて、前から突いて見たいは庇髮、摘んで見たいは丸髷、もいて見たいは島田髷、なでゝ見たいはチヨン髷頭、燃して見たいは縮毛頭、叩いて見たいは禿天窓。

○銀の高樓　小千谷　廣野敏子

例年にない降り樣で僅の間に何處も屋根の雪下しをする樣でしたから狹い町の處々には家の二倍もある程の銀の高樓が出來まして大層見物でありましたが惜しやさすがの高樓も此頃は半ば醜しい水と化してしまひました。

○合唱　長野市　姬ばら

私共兄弟六人每晚各々の豫習や復習がすむと皆一ツの火鉢に集つて唱歌をうたふのです、君ケ代から桃太郞まで皆て二十二あります、一所に大きな聲をはり上げて、慨搦て根付けに餘念のない父樣も時々筆とる手をやめて笑つて聞いて居らつしやいます。

○勝鬨　上總　內山雅子

青い空に高く輪を畫いて居た鳶が、ヒラリ落ちて水を切つた、鏡碎けて五尺の虹！、花か雪か、白沫が深碧の湖面に消えた時、尺餘の銀鱗を引摑み日を望んで高く舞ひ揚つた——と、ピートロ〳〵、空に響く勝鬨の聲！。

○瓜もみ　北多摩　すみれ子

母樣が瓜もみ作て切て、入らつしやるそばて私いつも思ますの、いくつになつたら私にあアいふふうに切れるてせうと、今日は思きつて私こしらへて見ませうと、庖丁持たら手のみなののき薄く厚くどうしても切れませんの、まあこんなて今に他家へ嫁たらどうするてせう。

○貯金　神田　齋藤春生

私の家ては字の讀める者は、各自每日壹錢づゝ貯金して每月十五錢內外月刊雜誌を求めるのてあります、そして皆の殘りは、年末に一まとめ

にして慈善へ寄附するのでございますが此時は何となく嬉しいので家中ニコ〳〵して居ります。

○先生がた　沼津　敦野

河井先生は髪を分けたお鬚のピンとしたお方、藤谷先生は丸顔で常に笑つて居られ想な方、佐佐木先生は丸々した白鬚のあるお爺さんで夜雨先生は面長な細そりしたお體付の方、とこんな想像して居りましたのに一月號を見てビツクリしましたわ。

岩瀬通ひ　京都　しづ枝

○殘念　静岡縣　貞水孤讀

私の村は上内田村中内田村下内田村の三が村では千戸以上あります、其上内田村一村でも三百戸以上ありますが全体に職務繁忙の爲、文壇雑誌など購讀する人は皆無と云つても宜しいの、ですから妾の連になる人は地方に一人もありません、妾殘念で堪らないの。

○嫌な習慣　安房　ゆきえ

私の村では夫を養へぬ女を嫁に貰はないのです。漁のある時は四斗樽二つに魚をつめ三里餘の處迄日に三度も車で運び、不漁の時は汚水流して農業します。でも宅の嫁は働ぬなど、いふ人があります。なんて酷い事でしよう弱い女を。早く此嫌な習慣がなくなればよいと思ひます。

○紙すき　滋賀縣　春山女

諸友の皆樣がお用ひなさる半紙や半紙は私宅で製造するのですが夏はよいが冬は紙となるべき汁に厚い氷がはる故其れをやぶりてすくのですからなか〳〵ではありません。



○家の寶　岡山　内田なつえ

私は家の寶と云つて別に財産もないのですが唯八十九歳のお爺さんなもつて居る事です、少さいお方ですが體量がある、毎日飯の食量と時とは定まつて居る、酒も煙草も飲まず、如何なる寒中にても浦の小川に出て冷水浴を仕て居ます、此健やかなお爺さんを家の寶と云ふのです。

○迷信の極　埼玉　中村勝子

私の地方では双兒が生れますと、父親が肥を一荷擔いで家串に上り「双兒だよーイ」と三度怒鳴るのです。でないと普通の人間にはなれぬとか。此間或家で其通りしますと登つた父親は眼が暈つて肥桶と共に屋根から墜落ち氣絶して藥や醫者よと大騷ぎでした。

○月の子　上總　渡邊汀子

野良から歸ると、さあ御湯がわいてるよと、御母樣が縱手で焚いて呉れた加減のよさ、水晶のやうな湯から頭だけ出して、嗚呼よい心地と見上げる空、夕月はほんのり〳〵頭の上の源平桃にかゝつてゐます、そよ吹く風に散る花片、月の子では無いかと妾は思ひました。

○夢日記　香川縣　西山杳瑞子

私は日記等面倒がつて一寸ともした事はありませんがそれでも夢を見た時はいつも之を書いて置くのが規則なのですそれはそれは樂しみなもので夜前なんかも富士山の夢を見ましたが日記をくつて見ますとこれで丁度四度目で御座いました。

○京の言葉　京都市　寺田靜子

京都の芝居を御覧になつた方は御存じてしよう、あの番附どうどす、御菓子どうどす、との賣聲、社會が日進月歩しても、都の最中で昔時に變らぬ、どうどすの聲、或人は古へより行はれる事は宜しい、と言はれますが、私も京言葉てすが、あの言葉改めたくて。

○結婚

北海道　吉永豐子

「壓ちやんは大きくなつたら殿夫さんの所へお嫁に行くのネ」と姿やが云ふと、赤い顔して「いやよ」と長いたもとをふり上げてたゝいて居たのが最早高等女學校を卒業しいよ〳〵殿夫さんと結婚した、姿やがなあー壓子さんと云ふときつと横目てにらみほゝ笑んだ。

○宴會の花

靜岡縣　彝姬女

凡そ何處の宴會ても、男子ばかりては實に無趣味て榮えない、然し其の中に一人ても婦人が居れば何となく華やかて趣味ある、要するに女はこの世の花てあると共に生命てある。

○摘くさ

淺草　登美子

綠遊燃ゆる野にうちむれて草の花を摘む樂しさ、末の妹が振袖の、丈にも餘りて頂げなるは、霞の濃きがもつるゝならむ。『アレ蝶が行く。』追はむとして轉びかゝる弟を支へ給ひし母樣が左手の小籠には、はや綠の色うづ高う。

○お庭の梅

北澤白雨

今朝見たら梅の花が一ッ咲いてゐましたまだこんなに寒いのに私はおもはず息を吹きかけてやりました。

○仲よし

札幌　齋藤れい

西には藻岩の山が眞白な姿いかめしく聳えて居るそして朝には殿な美くしい祖夕には夕陽が僅かに影を山の端に殘して居る雲は樣々に變る見渡す限りまばらな家これが私の通學の途中の最も仲のよいお友達てある。

○追懐

尹きえ

工場へ通ひますのが半年あまり、初のうちは女工募集何々と貼札のある門を入りますのが、いかにも、恥かしい氣がしていつも一人限りてしたが、此頃ては三人五人待合しては、雜談しながら、踊るやうになりました、あゝ知らず知らず、人ずれてしまひました。

○絲屑

岩代　佐藤君枝

母樣がやかましく仰有るので、とき物をする度小言を云ひ〳〵つないておいた糸屑て、此間私が織て見ましたら、赤青白黑などそれは〳〵面白い絣が出來ました。

○二十三夜

信濃　犀波子

毎月舊曆二十三日の晩には三夜講と云つて村の娘逵が集つてお月樣を拜むのが私共土地のならはしてす。夫て怠らず缺けた者はよい處へ早くお嫁に行かれると申て居ます。私も是からはれむくもがまんして人樣のようにお月樣を拜んで、一日も早く嫁いて幸福なるホームをつくりたいものと思ひます。

○好きな物

丹後　鹽見千代子

白茶の無地袷に、極小さな銀の羚止めしたのと、前髮を黑いリボンて結んだのと、手先の美くしいのと、凡て着物のがらが、自分にじみ過ぎる位なのと、袖の振口が何枚重なつても、よく揃つてゐるのと、口中セムの香を匂はしてゐるのと。

○誰か知ら？

神戸市　山本いさ子

親樣からお借申した、夜雨樣の花守日記を片附机に凭て讀んて居るは妾てすの、家の人はお芝居行て妾と竹ばかり、オヽ寒う、遲度晩にすみ樣ても歸入しやると…アラ！彼て下駄をはたく音、誰か知ら？…。

○妾の務め

下總　三森ゆき

妾は今年十九の化粧盛りてありますが、山里のならはせとて化粧どころか眞黑になつて、それは〳〵朝の入時頃から夕五時まて野原て働くのてす、そうして夜は兄と薄くらい灯のもとて詩を論ずるのてあります、之れが妾の一生の務てす。

俳句

内藤鳴雪先生選



▲規定　先人を模倣せざる獨創の佳句を望む用紙は半紙を用ゐ、一人一句以上の投吟を許さず、締切は毎月十五日とす、懸賞は乙種の規定に據る。

二等

舞衣の袖重き日や春の行く　福井縣丹生郡吉野村余田區　片山千里

三等

曉や夢の行衛の薄霞　奈良縣生駒郡片桐村　清水雪軒女

四等

花吹雪關の小萬が遁りけり　伊勢國鈴鹿郡關新所町大原傳七方　しづ子

秀逸

徒らに黄金の鈴や浮れ猫　越後　藤原鍋子

春雨や傘を斜に町娘　大阪　倭文子

春逝きて鶉啼く里詩人病む　岐阜　白ばら

天の川流れ〳〵て年の暮　秋田　木村はな子

姫松の影美しや春の水　下總　石原くら女

春の夜や隣りの花に灯の映る　三重縣　川原操子

春風の輕く消しけり小提灯　横須賀　吉岡艶子

ぬれながら鶯啼きぬ雨の垣　三河　雪子

遠砧賞の一燈まだ消えず　大和　花菖蒲

籠朶はこぶ海苔もみはりの彼岸かな　大阪　友野靜子

牛繩の弛きて走る時雨かな　德島縣　笠井葉子

松の上に小猿の面や初日の出　石川縣　福岡久子

那須野路やすゝき白けて水涸るゝ　下野　手塚花靜

蛇穴にいるとき椎の一あらし　周防　萬差子

雁風呂の殘る煙や浦の月　富山市　小林芳枝子

美人住むと噂の家や朧月　大阪市　生田花桂女

梅咲くや俳句に耽る古和尚　大阪　和田芳子

小謡や花守爺の月朧ろ　久留米　山口萬子

こぼれ井も餘寒の色や淺みどり　茨城縣　小堀みどり子

春の水今日も釣りして暮らしけり　上總　智惠子

鶯の影うつりけり歌机　天鹽　小林秋雲女

淺茅生や三徑荒て露寒き　因幡　哉節

菜の花に叔母許りを訪ふ小道かな　磐城　遠藤いさを子

夕月や山高々と霧深かし　土佐　石川きよ子

暮るゝ野に聲高々と雲雀かな　名古屋　清水きよし

桃日和君王堂におはします　京都　宮原薔薇子

明け初めて寒き響や車井戸　美濃　佐野富美子

さえかへる橋のたもとやむきみ店　山形　桂園女

春雨や小門の内の乳母車　石狩　篠原靜枝

朧やせて有明月の落葉かな　安藝　兒玉靜子

秋の夜や踊りの上のちぎれ雲　秋田　三條みさほ子

病室の窓に拜みぬ冬の月。　臺北　峽よし子

紅梅の宿に秘めたる籟の笛　大分縣　松岡こうめ

雪多き年の手柄や梅の花　上總　古山耶代子

草刈や裏門出てゝ雲の道　秋田　水村はな子
南天の珠數へ見ん雪の朝　伊勢　德田榮子
撞く鐘の一ツ〳〵に落ち椿　南豐　藤の家瑠璃子
十丈の瀧に散りけり桃の花　千葉縣　關まさ子
土筆すみれと春を採り競ふ　渡島　鷗島女
降り止めば二十日月なり春の雪　宇都宮　小川みどり子
春逝きて箆開く身とはなりにけり　筑前　田中とよ子
菜の花の匂ひにゆるゝ柳かな　茨城縣　鈴村勝子
池の端に蘆の葉そよぐ寒さかな　羽前　釜子
麥畑へ小道を走る兎哉　千葉縣　越川つれ子
淡雪の晴れし牧場や牛の群　常陸　中内泉子
花咲いて日に〳〵濁る谷の水　横須賀　藤野すみれ
蒲公英に飛ぶ蝶菫に移る蝶　越後　早津苞子
靜かなる春の一間や二日灸　大阪　淺沼桂花
朧や刄の如き月の下　山城　八田文子
我が戀は夏の月夜と竹婦人　靜岡縣　永井濟子
節若て飴喰ふて居る樂屋哉　芝　ひさし
花ちるや樂隊通る塀の外　大阪　菱田ゆき
うれ〳〵と小山めぐりて春の水　宮崎町　卯の花子
見るものゝなき野に冬の月一つ　白百合
山里は冬ぞ寂しき嵐かな　岩代　根本臘月
梅の花匂ふ處や乳母が家　埼玉縣　室田まさ子
人知れず人を待つ夜のさむさかな　印旛郡　南天女
結立の髱に吹くなり桃の風　相模　柏原美奈子
高樓に琴の音あれや春の月　下總　石原昇榮女
大空の限なきに降る時雨かな　遠江　原木富美子
しぐれする袖に怨のわびずまひ　沼田　三明千鳥
名も知らぬ草も浮くなり春の海　京都府　中村さち
吹雪して里近く啼く狐かな　岐阜縣　日野耿子
塔見えて石燈百百霞みけり　四谷　山脇香江子
夏山や雲の中より水の音　千葉縣　内山苔花

子を杖に病後の人の繪踏かな　横須賀　齋藤松代
夜は梅に別れて白き山家かな　大分縣　田北梅子
合ふ人も別るゝ人も花見哉　越後　福井やす子
揚雲雀寫生の人は芝に座す　越後　藤原虎子
後夜の打たるゝ門や鐘冴る　大阪　辻慶子
弟も手まりつくなり春の縁　牛込　紫千子
化粧して月待つ窓やほとゝぎす　金澤　高村やす子
銀瓶に水仙の花や夜明けの灯　大阪　岡喜
白梅に乏しき村のあかりかな　伊勢　葉きく枝
冬枯れに木の枝拾ふ少女かな　志摩　向井貞子
猪を屠る人に露の吹雪哉　千葉縣　井内津加子
名もしれぬ小寺の梅や薄氷　牛込　板柳千代
春雨や傘さして行く窓の下　伊勢　かすみ
月おぼろ在五の君を訪はゞやな　周防　谷滿鶴子
石寒く雲は亂れて入日哉　京都　黒野信子
春の日や筆筒に土筆二三本　越後　早津捨子
春風やうらわかき女のあらひ髮　横濱　長谷川花子
舟窓やかすかに須磨の家見ゆる　上總　渡邊汀子
一吹の夢さめて聞く春の雨　神田　水野照子
春雨やあひ〳〵傘の姉妹　名古屋　鵜飼理子
花見衣ぬひ上げて雨をうらみけり　羽前　釜屋まさ子
窓あけて梅に物云ふ女かな　遠江　増田舞姫女
母も醉ひ祖母も醉ひぬ桃の酒　淺草　篠崎よし子
須磨の夜や歌にもならで明け易し　北總　山崎富美子
窓の上に蝶々舞ひぬ須磨の里　富山　小林芳枝子
湯女の來て手をかざしたる火鉢哉　加賀　小島清子
朝晴れて若菜に風もなかりけり　上毛　飯島淡韻女
床の上に露の雨やこぼれ梅　芝　ゆみゑ
初夢や覺てはかなき古枕　長野縣　金衣公女
朝寒や羽織のえりのしつけ糸　靜岡縣　芹澤晴枝
梅咲いて斷食堂に日があたる　群馬縣　飯塚美越子

見ぬ恋の書ふ畑や夢曾き　臨書　澤田はま子
鄙の牧の幽眠に落し梅の花　下野　靜江子
深寺や椿の落つる夜の音　大分縣　工藤たき子
遊びなれた酒屋の道の蜻蛉かな　上総　古山はゝ
春雨や春に疲れたる肱枕　相模　鍋田靜子
卯の花に寒し根岸の朝ぼらけ　安房　見松ひやく
木枯しや焚火の跡の灰を吹く　京都府　春葉女
お白粉の匂ひもするや朧月　丹波　清水白菊子
松並木月影もれて涼　青森縣　松尾晩子
花散りて人も影なき夕哉　下総　加藤[illegible]生子
吹く風に押しあふ音や芭蕉の葉　駿河　稗貫みゝ子
打ち折りて何かにしたき氷柱哉　岐阜縣　度會よし子
起きて讀み臥て讀み春の日永哉　岩代　泉白雪女
こゝろよく谷ゆるされし花の里　長野縣　淬金琴枝子
雪に暗き野山の騒ぎかな　千葉縣　野滿
打ちあげし畑を見ながら煙草かな　栃木縣　東原けい子
秋の花に埋る地蔵を拜みけり　伊豫　曉子
よき人の恥づるに似たり春の月　靜岡縣　良水孤說
舟さして海苔とる人や春の海　仙臺　原霧路
朝日子は耕す吾に登りけり　岡山　池田芳子
鉦鳴て郷田に雨の雫哉　水戸　島田勝子
墨も實る奈良の翁や菊根分　茨城縣　中内春子
行く程に喰しき蛆や藤の花　備前　高橋霧生
桑の畑や孫つれてゆく春日和　長門　藤井韻子
水仙や旭さしたる經机　下谷　蔭雨子
姿をもしたひて來るよ野邊の蝶　岐阜　しげ子
靈小路雲雀かゝげて行く嬉し　岡山縣　桐本悅子
辻占や四十男の紅提灯　攝津　小百合
蝶とぶや菜の花つゞく美濃近江　美濃　内藤みち子
人ありと見ゆるに岸の柳かな　京都　野の女
梅の木に鳴りそこなへる嵐哉　初村みつ子

鶯や畫く書に墨散る　金澤　櫻龍藤子
今日の日や佛の好む椿餅　福井縣　平井霖子
帆かけ舟見るや松かけ夕すゞみ　越前　文子
旅にある人はいづこの時雨哉　千葉縣　千木松花月女
雛壇の人や演理梅咲る　紀伊　杉若白波女
初花や御幸むかへる道ぶしん　越後　日下きよの子
茶屋前になれし床几や藤の花　富山縣　富夢子
春風に馬躍らせて遊び哉　岩代　丹藤春子
兄君に見せじとかくす鏡かな　東京　うつせみ女
春雨や書窓の蘭發白き　越後　五十嵐ふみ
よき人の口なつかしや紅の花　土佐　高橋白ばら
水仙の花に霑く月夜かな　上毛　元子
鶯の起きて早しや今朝の窓　宮城縣　古川豐子
姉妹競ふて月に砧かな　四多摩　森田なか子
篠笛の段々近し夜の月　埼玉縣　龍宮光江
蝶高う舞ふや磯邊の浪の音　神奈川　森田靜江子
梅園や偶々來る勧化僧　下野　手塚みつ
獅子舞の遠音や雪の三ヶ日　宇都宮　藤掛孝子
鶯の土産なるらし此日和　丹後　佐々木泰子
春の野の胡蝶に狂ふ少女哉　日向　甲斐玉歐子
出がわりの下女の名を呼ぶ鸚鵡哉　信濃　花かげ
飯を焚く煙も近し梅の花　横濱　初野子
御幸けや雪早や解けて橋の上　伊賀　伏見萬子
梅さげし少女にあひぬ朝寒み　香川縣　長尾美峰女
神童の梅に笛吹く月下かな　信濃　岩波二葉子
突出てし岩の脊さよ春の山　信濃　駒澤ひろ子
春の夜の大河油の如くなり　南多摩　中島睦子
弓杖に還な眺むる櫻哉　上総　恭よか子
たらちねの聲せぬ旅や五月雨　岩代　水神まさき
青梅實る女の戀や日はながし　長野縣　若林かなゑ
戀しさに君があたりや春の月　下野　くに子

實用文

谷江風先生選



▲規定　所謂日用の往復文にして、手紙文又はハガキ文の實用を主としたる文字を歡迎す、二十四字詰十五行以内用紙も締切日も前同斷、懸賞は甲種規定に據る。

二等

○遠地に在る從兄に

本鄉　朝井松子

卯の花垣に白く新樹の雨美しき今日此頃を君には如何過させ給ふらんと針の手止めては坐ろ御あたりの空のみ眺められ候扨過る日久々にて麹町の御邸御訪ね申し候處御伯母樣には先々御健かに渡らせられ候へ共常に似氣無う何かと御沈み勝にて、有し昔を語り出給ひては折節怪しき露さへ御眼に宿し給ふに、元より隔無き妾の事故、何ぞみ心に叶はぬ事おはしまさば聞かせ給へ及ばず乍よしなに計らひ參らせんと再三申上候處、去らばとて御前樣の御文を示し給ひての御物語に、扨は御病氣御療養の爲めとのみ仰せられ候ひしは妾を氣安めの御僞言なりしかと實に驚き入候。

吁、忘れもせぬ二年昔の、花は紅を誇り鳥は梢に歌ふ彌生の中旬、御前樣が御誕生日なりとて妾も御席の末に列り候節、御床にはいつも乍（精心一到何事不成。）の御掛物なるに、斯る御祝ひの席には何ぞ芽出度幅をものし給ひてはと申上候時、「我學成り望達せん迄は如何なる大家の名筆と雖決して此の軸には替へじ斯くて朝二三誦夕べに二三誦して以て克己心を養はん」と仰せられ候ひしみ言葉よもや御忘れは遊ばすまじ、さるに僅再度の御落撰に痛くもみ心挫き給ひて長の年月親み給ひし書物を捨て、眼中一丁字無き農夫を友に鋤鍬擔ぎて世を送らんとは、ちと日頃の御氣性には似合はしからぬ御處置かと存ぜられ候。

さは云へ是迄いつも首席を以て御卒業遊ばされし御前樣の御事なれば御殘念さは如何計かと御察し申上ぐるさへ仲々に御痛ましうは候へ共、撰拔試驗は時の運とも申候に增してや一昨年は御伯父樣御逝去の折柄、又去年は御體すぐれ給はての御不覺、そを何故御廢學と迄御失望遊ばされ候や、扨もみ心の程計り兼ね候。

今若御前樣が是非に兼ての御宿望を抛給はゞ老ませる母君樣は誰を便りに何を樂みにおぼしてながらへ給ふぞ、人は皆月よ花よと浮るゝ閑にも只々御前樣の御成功をのみ祈り給ふ御慈愛深き母君樣が切なる御諫をも顧給はぬとは如何にも御孝養厚き御前樣の御仕打とは思ほへず候。

それは扨置き實は斯かる事妾より聞え上げんは針立つ山へ昇れよと强ひらるゝよりはより以上心苦しう覺え候へ共、當時次雄樣が御擧動は如何と思召す、一年を浮

世に疎き山住の御前樣には寢耳に水の御驚きとは存候へ共、先頃ふと惡友に親み給ひてより、ペン鉛筆の勞をうるさしとて昨今は只管遊惰の道にみ心寄せられ候由、ことはり分けての御伯母樣が御意見も上の空、學校よりは已に三度迄注意を受けられ候とか「斯ては此末如何成り行くにや……吁一雄さへ家に在らばこの不仕末は見ぬものを……」と涙作の御物語りに、重ね〴〵の御心勞の程さこそと御痛はしくて覺えず袖濡し申候、吁一雄樣、譬今御家は波間に漂ふ捨小舟の曳く人無くば徒に千尋の底に沈み果つべき運命にて候を、いかて君がみ手に救ひ上給はぬにや否君ならでは誰が力にも及ばぬものを、次雄樣とて元より賢しき御質なれば常々敬服し居給ふ兄君より理を以て諭し道を說いて教へ給はゞ必ず迷ひの夢より醒め給ふべしと信じ申候、されど時後れなば如何なる大事に至らむも計り兼ね候故こゝ寸時も御猶豫なく一先づ御歸宅遊ばして萬事御都合宜く御計らひ遊ばすこそ、實に御前樣の御急務かと存じ候。



なりはひ

定めし年若き妾より斯る御意見がましき事共聞え上候ては、おこなる沙汰よと御咎め遊ばさんかとは存じ候へ共、よそに見るべき塲合に無之候儘、御伯母樣に替りて御忠告申上ぐるにて候へば文中失禮の言は何卒廣きみ胸に廻らぬ筆の罪と見のがし給ひて、妾が眞心籠ての御諫め言を御聞き入れ遊ばし、早々御歸京相成候やう神かけて祈り上參らせ候

かしこ。

神奈川縣　渡邊春子

（評）取り出てゝ妙句警句のあるにあらねど思ふことのまゝに筆の從へるは眞情の致すところとも見えて何となく讀みごたへしたり。

三等

○鈴木さち子樣に

羽前　しら浪

妾は裏日本といはるゝ地の、こゝ一僻村に世を忍ぶ女にて候。

御名承るも去年が始めて、ましてや如何樣のお身柄におはすにや、推しはかり參らせも得ぬ御許樣ながら、遇然か、非ずか、一度ならず誌上に並びしも奇しき緣

と、妾は他の君のそれよりもより以上の注意もて、御手に成りしを讀み申し候。

御懐しや姫島の名、詩趣あふるゝ燈臺の姿、ことには寂棲の御兄君を、慰藉し給ふべく、若き御身もともにと佗び住居ひます御心の、たゞ〳〵御慕はしさの限りにて候、委しくは何もえ知らぬ妾にて候へども、なほ一人の兄に頼み難くなられ候ものから、他人事ならず涙催されて　繰り返し拜讀いたし候を、誰とてとがめ給はじな、指折れば御渉獵もやがて同じうは坐さぬにや、周防の海の寂音に腸を斷たるゝ御上や、妾は日本海の激浪の崇厳なる威力に、暫しは涙を忘れをる身の上、涙は同じ涙なるべきものを、然は思し召さずや我思の君。

やさしき御名は幸子様とや、よしやよし、今は如何様におはすとも、必ずや御幸榮あらん御生涯と、ひとりこゝより忍びまつりことほぎまつり居り候、果敢なき妾も名のみは人並みらしう千代とこそ申し候へ、世はまこと可笑しきものには候はずや。

未遇の君に無禮げなる節々の多く候も、たゞあつき御情愛の何ぼう御いとしの御心よと、御慕はしさのあふれてかくは耻かしきものを捧げまつるにこそ。かしこ。

（評）熱誠の餘讀み拔けり。

四等　○故郷の妹に

埼玉縣大里郡玉井村　中村勝子

玉ちやん！姉ちやんはもう東京の人に成ました。玉ちやんは一人で寂むの、姉さんもです。夜中などヒヨツと眼を醒して密つと床の中を探します。けれど可愛い玉ちやんの身體は有ません。噫私は寄宿に居るのだつたと思ふと急に涙が溢れるのです。玉ちやん姉ちやんが云てきかせた事は忘れぬでせうね。決して〳〵継の母樣だからとてスネなんぞしては不可ませんよ。今迄は姉さんが着物も何も世話して上たが是からは一人で出來る丈なさい。母樣には姉さんが能頼んで置ました父樣に告口なぞ決してするでなく、實の母と思ふて隔てなく何事も母樣にお話なさい。姉さんは知ぬ人の中に居る事故一入家が戀しいのです。夜友達の方は皆眠つてるのに姉ちやんは獨り玉ちやんの事を思ふて泣くのです。玉ちやん繰返しいひますが必と姉さんの言葉を守つてお呉よ。ね玉ちやん！。

（評）言々背情に迫り読むうちに強い感じを感じました。

五等　○梅花に添へて

靜岡市水落町二ノ二四　根岸良子

朧月は今しも薄う丸窓に照り何となく今宵は靜かなる

晩にて候。

二階の室にては武夫が文讀む聲微かに聞へ申候。父君は、晩御飯の折少しばかり召上られし御酒にて御機嫌宜しう、御得意の竹生島の一節を聲高らかに謡はせられ候。「月海上に浮んでは〻玉兎と波を走る面白の島の景色やのう――。」の邊り心地好きまで朗らかに聞え申し候。

縁側に腰掛けて、父君がお謡聞きつゝありし私も、一曲終り候ひし故靜かに立上つて、庭下駄突掛け飛石傳ひに彼の垣根際なる紅梅を朧月影に一枝手折り來て候、こゝに薫り床しきを此文にこめてお送り致し候へば、兄君様の文讀む机の片へになりともお置き下され度く候。プンと鼻をつくその香いには、乾度五年前に別れし彼の垣根際の紅梅をお想出しなさるべくと存候。そして、卒業を指折り數へて待つて居る妹の姿を御偲びなされ下され度候。

夜も段々更け行くまゝに、先は此處らにて筆止め候。匆々。

（評）其のあたりの面かげも將た其の人の俤もこの短き文の中に彷彿たり。

秀逸

○兄へ

日向　乙　女

美しき夕日に一入の美をほこりし前なる栗林のあとなき梢に吹きすさぶ風のはげしう候かな、こゝ日向の地にもなほ冬はきたり申候、まして寒き地にましますす兄様いかゞおはし給ひてか、何となう鳥の聲にも心おかれ申候、この干柿天を摩する枯木に時ならぬ花さきしかと人目をおどろかしたる名殘に御座候去年まで兄様御貯藏の御自慢柿の味はとてもこれなく候へどせめてゐろり火かこみて一二をきそひしむき柿を夢み給ふ材料ともならばと小包に托し御年の二倍ほどさしあげ候猶拍子とりは相變らず隣の太あちやんに御座候其の折をかしかりしことゞもは委細この柿に御きゝ下され度まづは右までかくなん。猶、添事ながら御自愛のほど祈り上げ候、次に母上は相變らず大元氣に御座候私はこの字の通りとおぼしめし下され度候。

（評）寒き地に在すといふなる人もかゝる情にはやがて暖めべく旅の心もかくて寂しからじと思ひやらる。

○奉公人の世話を頼む

福岡　白　露　子

そつじながら一筆申上候さて年頃召し遣ひ居り候下女事此度緣談調ひし由にて據なくいとま遣はし候に付代りほしきに候が御當地方には二十才位の女にて正直なる者は御座なく候哉御承知の如く小家内にて候へば朝夕の水仕の外にはさしたる用事も御座なく候まゝいとまの折には當人の意にまかせ裁ち縫ひ其他の業は數へ申べく候御多忙中勝手がましき御願ひには候へ共御許様には廣く御交際遊ばされ候まゝ若し御心當りも御座候はゞ右至急御世話下され度くれぐれも御頼み申上候

先づは用々のみ。

(評) これ將た實用文として最も恰當なるもの。

○仕立物をたのむ

深川　白百合子

急にお寒くなりまして平常心掛けの悪い私共では大きに驚きました、御存じの通り家内多勢であり乍ら働く人は少く七草よ菊よとうか〳〵する中に早昨今のお寒さ多勢の人々に同じように着せねばならぬのを兎角手まわしが悪くおくれ勝ちて困ります尤も常着の方はどうやらこうやら間に合せましたが晴着の方が何分まわり兼ねて大困りをいたして居ります誠におはづかしい事ですが御心安立の御願ひ羽織及び三ツ重ね二組程御けい古に參らるゝ御方の中で御縫ひ下さる事が出來ますまいか粗末の品ですから御丁寧には及びませぬ。御聞届け下さらば早速御持たせ致さうと存じます先は御願ひのみ、かしこ。

(評) 文意明瞭。

○花見の會に友を招く

下野　きん子

とく子樣櫻が咲いたらといつぞやの約束、長閑に吹く風になてられてやうやく櫻が咲きましたから明後十五日に花見の會を開く事にきめました少しの御用はおくり合せ遊してねきつとおいて下さいよ短冊も澤山用意しましたそれにすみ子樣にはヴァイオリン花子樣にはマンドリン貴孃にそれお琴一曲是非ねえもうきまりましたの！歌の題は貴孃のおこのみでよう御座いますけれども成ることなら月下花と言ふ歌をおきゝ申たいのです父初め一同のおねがひなのですのそれにそら尺八の名人亮様もお出でのはずね是非おいて下さいまし私門に出て待つて居ますよさやうなら。

(評) いさゝか輕佻の嫌いあるやうなれど親しみの情ありて面白し。

○親しき友へ

奈良縣　中富よしみ

苛酷なる運命の神はあはれ妾をして境遇の奴隷となるのやむを得ざるに至らしめ候、手折らてやはと誓ひし理想の花も涙をのみていさぎよく帝都に見捨て、再び故山に月を眺めざるべからざるの身とは相成候。

あゝ天は何故かく迄も無情なるぞ、幼くしては父と別れ、今又杖とも柱とも頼める一人の兄をも、とこしへに奪ひ去られ候ひぬ。

老ひたる母を慰むべく親類の勸めに委せ未だうら若き身に良人を迎へて、こゝに新しき家庭を作り申し候。

一ヶ月前の紫の袴は怪しげなる山袴となり、筆書物は鍬鎌と變じ、學校通ひは野良通ひとなり、あはれいたくもかはり果て候ひしよ。

然しながら手折らで見捨てし理想の花に對する未練は我身にかゝる重き責任と、良人が胸に宿り給ふ愛の光との爲追々に淡らぎ、今は全く見る影も無く世帯染み申し候。さても計りがたきは人の境遇に候かし向詳し

き事は次便にゆづりて、先は一寸御知せ迄一筆申し述べ候、かしこ。

（評）理想の花とやら手折らせ給はざりしがなかなかに御身の幸とこそおもほゆれ。

○堅餅に添へて都の妹に　ゆみゑ

雪さん此寒いのに風邪も引かずに御勉强ですつて、母樣と喜んで居りますの、田舎に引込んで始めての冬で中々しみますのよ、つらゝの樣な釣瓶繩をたぐるのが一番勞いの。東京でも矢張り水道が着物を着て、名物の風がきついでせう。私はよく本を持つた手を火鉢の上にやつて。表紙を反らした事がありましたが、そんな事はしない樣に氣をおつけなさい、毎度ですが學校から歸つて机の前にばかりかぢり付いて居ないで、氣をきかせちよくく叔母樣の御用を逹すやうにして、決して顏を膨らかしちやいけませんよ。

先達寒餅つきましたから、かき餅を少し許り小包で送りますよ。今年はね茶の間に眞中にランプを下げ、皆圓く坐つてね、藁で堅餅を編んだの。競爭したら寢る時も忘れて仕舞つたの。それを軒につるして干したのこれは母樣がお隣りから聞いていらしたので、こつちの風ですつて。去年迄筵に並べて居たのに珍らしいの。澤山送りますから三分の一だけ飯田町の咲子さんに持つていつて下さい。寒いにお氣の毒ですけれど。砂糖入りは燒工合があるから、叔母さん御存じなかつたら、雪さんの妙腕を奮つて燒いてお目にかけなさい。今度は進級試驗だから、しつかりなさいよ。



春の宿　神田　宮原白鈴

（評）。落ちついて居る中に警句あり、總じて妹を思ふ心行き届きたりといふべし、殊に最後の一句平凡なれど眞情見えたり。

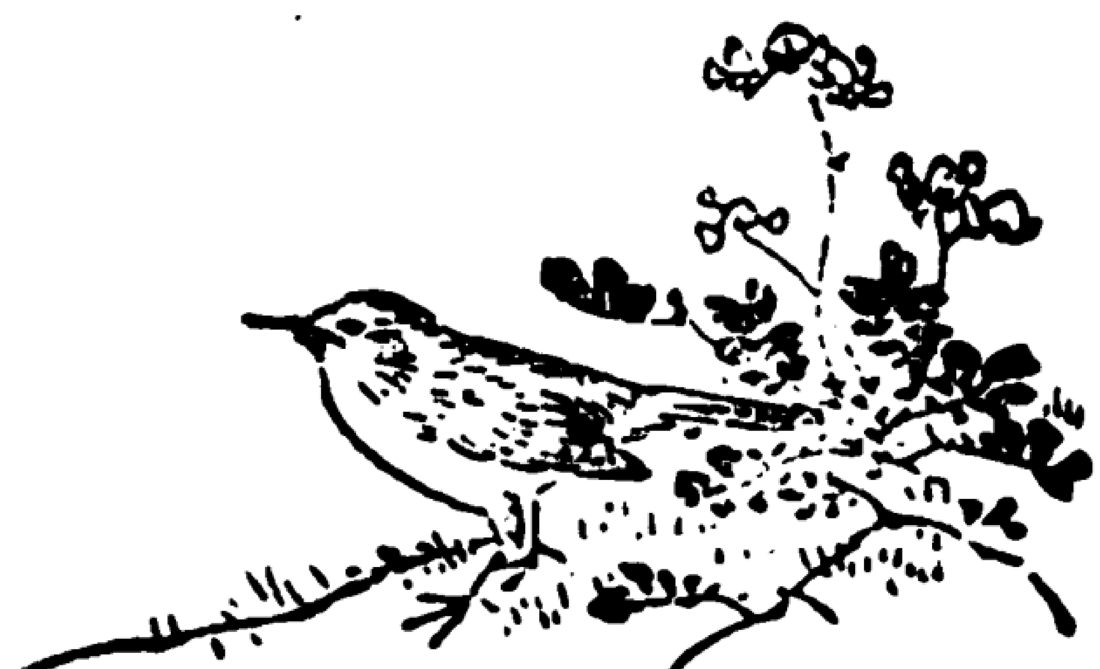
○都の友に　大阪市　辻廣子

恙なくてとの御玉章まち奉るも中々にて、東の空ゆく天つ雁かれのたよりに、御許樣の小車のあと追はせたる此の文を、何とか見そなはすらむ。さて、御許樣には水邊の梅花の如く、水面に浮びて希望の海にのり出し給ひ、妾は水邊の柳の枝の如く、影をば水にうつしながら從ふ能はずいかに遣るせなき悲哀の情にくれ侍りけむ、お許樣に別れて後は、心細さのまづせめ來りて、情深き面輪の浮びいでらるゝになむ。あはれ、察し給ひて、御面影おくり給はずや。

新歌謠

編輯局選

▲規定　無邪氣にして野卑ならず、現在の言葉を以て優美の思想を手近にうたふべきこと、是も一人一首限り、投書に新歌謠と明記せよ、用紙及び締切日等は前同斷、懸賞は乙種送呈



二等

○鳥になりたい孔雀の鳥に飛んで行きましよ九重に　　下野　三浦梅香

原作のまゝ。

三等

○飛べば愛らし留れば優し眠りや美くし春の蝶　　下谷區入谷町二四二　蕉雨子

原作「花の蝶」

四等

○買てたもれよ桃色りぼん村てかけぬは私ひとり　　千葉縣印旛郡中郷村海老川　加藤星月子

原作「買ておくれよ」「村てささぬは」

五等

○京は名物祇園の櫻月が昇ると火を入れる　　京都市松原通柳馬場東入　武田とし子

原作「京の」「月が昇ると花笑ふ」

秀逸

○風は帆を吹き帆は船をやる船は千石春の風　　青森　木村てつ子

○朝の六時に眠りはさめるなぜか「迷」の眼はさめぬ　　美濃　やさしの子

○都大路は琴の音ひゞくわしの村には水の音　　下野　手塚妙花

○東雷風吹きまする西の雷雨が降る　　羽陽　杉葉女史

○野邊の菜の花風吹く時は黃色蝶々が生れ出る　　美濃　みち子

○小濱溫泉岳登れば六里峰の白雪未だ消へぬ　　筑前　青葉女史

○初音配りにうぐひす來たか四十八谷をふみこえて　　伊豫　福井さゆり

○去年生れた眞白いおゆき妾のお庭て年越した　　上越　靜子

○たとへ雨風降ろうが吹こうが胸の戀花散りやせぬ　　埼玉　中村紫香子

○なんときれいなあの山茶花に星を入れたよな初霰　　京都　壽子

秋田　大越ひで子

○仲のよいのは男と女仲が惡いよに見えて居て
駿河 清水さち子

○夏は見せたい妾の里を向う野原の百合の花
上總 四之宮あき子

○思ひ出さずにゐられよものか月に歌ふた姉樣を
札幌 宮増喜良久女

○雪は六尺つらゝは四尺荷馬車人力車は橇となる
豊後 菅原尾花子

○一度着たいな櫻の花を縫ふて仕立た花衣
上總 鈴木梅子

○桧水峠を一息越せば相摸平野は桑の波
奈良 中宮よしみ

○天津乙女の見捨てた戀が落ちて咲いたか花すみれ
鹿兒島 靈萩

○與作流て愛馬を洗ふ岸をお梅が芹を摘む
相摸 鍋田靜子

○わしの村には巡査がないが犬が二疋て夜番する
若狭 田中良子

○君は都に妾は田舍はがきだよりを待つわいな
山口 深山鶯

○早くいにたや山坂越えて父と母との膝もとへ
岐阜 柘植ちか子

○梅の下ゆく提灯とめて七つお星を問ふて見た
仙臺 白菊子

○森の彼方にかゞり火見へる人の焚く火か狐火か
臺灣 稗貫美都子

○帆立の貝にお宿をかりて行つて見たいよ龍宮へ
茨城 永井融子

○風よ吹くなら靜に吹けよ父が船路をかへるまで
加賀 きよ子

○妹は節句に白酒飲んで雛と添寢の愛らしさ
丹後 鹽見千代子

○乙女笠きて緋の帶つけて露をわけ〳〵草摘みに
神戸 山本いる子

○お染機織るとんとんはたり嫁に行く日の晴衣やら
德島 花びし

○車通るよ五つ六つ七つほろてかくした花嫁御
筑前 田中登代子

○眞に神酒山登つて見たい上にや入色の雲が居る
石見 入杉都志子

○海老茶袴に桃色リボンかはゆらしいよ薔薇の顔
宮城 千葉楓子

○島や森へ行くみ空はくもるやめて歸ろう草かりを
上總 鈴木梅子

○わたしこれから學校はやめて母と二人ではたを織る
赤坂 高木杜若子

○私や雪ふる深山の女けれど胸には戀がある
茨城 松澤露子

○少女いとしや流れの簗に小さき指先はさまれた
高山村 有野貞子

○梅も咲いたよ櫻も咲いた早くお出な鶯よ
大阪 生田花観女

○五形すみれの花咲く野邊に三つと五つの姉妹
讃岐 白ばら

○父は田にゆき兄さんは山に爺や日當に繩をなう
茨城 佐藤有子

○まゝになるなら尾鰭をつけて行いて見たいよ龍宮に

滑稽談

編輯局選



▲規定　實際にありし滑稽談もよし、所謂一口噺もよし、摸倣や有りふれた作は採らず、二十一字詰五行以内、半紙又は罫紙に認め一人一章に限る、締切日は毎月十五日懸賞は乙種。

三等

○日記　土佐　白濱女

母「お前はそんなに夜遲く迄なにして居るのです」
娘「はい日記をつけてゐます」
母「ふてまわりな、なぜ朝から書いて置かないのですか。」

四等

○ネルソン　岳北庚　花園守

爺息子に向い「政此本に東洋のネルソンと云ふのが有るだが誰のことだ」
悴「ソレハ東郷大將のことです」
爺「フウ：それじや西洋のネルソンはたれだろう。」

五等

○口先きのよい人　愛知縣三河國寶飯郡一ノ宮　近田愛子

友子「お母様に無斷て參つたのてすから又問われたときに困ります故私もう歸りますわ。」
光子「おやそうてすか折角いらしたのにねえ誠に御早々樣てした私も一度おじやまに上りますがどうぞお母さんに宜しくおつしやつて頂戴。」

○電報　京都　宮原みどり

田舍者、電信局に行き
「もし旦那　少し急ぐのてすから、西京までの急行電報て行く切符を下さい……」

○なみだは白色　長崎　島名ふじ子

ことし五ツになる花ちやんお隣の西洋人の子供泣くのを見てあらまあメリさんが白いなみだを出して大きな聲て英語てないているよ、

○子息さん　千葉　今井しげ子

去年の暮に若い男が小作米を馬に附けて來ましたがお留守てお母様は其人を知りませんので、あなたは何方から？と聞きましたら、私てすか私は八乙女の石井常吉の子息さんてす。

○酒のかん　府下　とし子

棟上の日に隣の娘が手傳ひに來た、灯のつく頃大工は早く〱と酒のかんをせきたてたら、娘は一升德利を風呂の中へ沈めた。

○ランプとマッチ　天鹽　秋雲生

甲「あッランプが消えた早くマッチを取つて呉れ。」
乙「馬鹿言ひ此の暗いのにマッチが見えるか、それより早くランプに火をつけろ。」

○種痘　神田　齋藤春生

妹「今度五十才以上の人は種痘をしなくてもいゝつて云ふのは、どしてなの？」姉「人間の壽命は五十才ときまつて居るから、それ以上の人は死んでも、かまわないつて、云ふ事なのでせう。」

○遊ばれぬ　埼玉　米子

母「お正月てさぞ澤山遊んだてせう」
娘「いーえ遊ぶどこてすか羽子をつくやら、かるたをとるやら、芝居見に行くやらそれは〱いそがしかつたわ」



はしがき　好きな音樂と云ふ題て諸嬢に音樂のことを聞きましたら澤山お答になりました、題は記者がつけたのです、なほ此外に數十篇ありますけれど、紙面の都合で五月發行の増刊に廻すこと丶致しました。

好きな音樂

一等　殘月

大阪市東區横堀六丁目　木村春江

歌といひ節といひ、私の習た中で、一番好きなのはお琴の殘月です、「磯邊の松に葉隱れて、沖の方へといる月の、光や夢の世をはやう」こゝ迄歌てくると、もう胸がすウッとして、月の夜などは魂があくがれ出るかの樣、何ともいへぬ感じが致します。それて、「さめて眞如の明らけき、月の都にすむやらん」のあたりは、われながら不思議な程、美しくさえた聲が出ます、どんないやな晩でも、此曲を調べますと、心がすがすがしうなるので‥‥母樣も姉樣でも、雨のふる淋しい晩などは、きつとこれを歌へとおつしやります。

二等　仰げば尊し

兵庫縣神崎郡川邊村ノ内屋形村　女郎花

聞きたいものです

私の學校では、毎年卒業式に卒業生が、仰げば尊しを歌ひ、進級生が、螢の光を歌ひます。本年も此間から此歌を敎へてをられます。私唱歌の中で、此歌ほど樂しい樣な、又悲しい樣な、歌はなかろうと思ひます。式場で、卒業生が、高くひく丶、歌ふのは誠によろしいが、終りのいざさらばと、云ふ時、聲を得あげず下を向く生徒を見ると胸がいつぱいになります。

三等　薩摩潟

鳥取市鍛冶町　上山八重子

如何にも感に打たれませう

窓洩る月の光水のこど流れて、冴え渡る霜夜の鐘哀れに消え行く頃、薩摩潟の一曲を奏すると如何に心ゆくてせう。殊に「淸ら〱月の夜や——」と高音の獨唱から、「空に月は晴れながら胸に曇る思ひ哉——」と合唱に續いて、更に「天晴悲し英雄が避る所世にはなし」と轉ずる邊り、實に英雄が相抱いて世を罵りつゝ千代の恨を呑んで薩摩潟に身を投じた當時の光景が目前に浮びます。

又此文章も目前に浮びさうに書いてあります

四等

紘聲

青森市米町　村林矢須子

私の室に妹の琴が、立て掛けてありますが、朝にお掃除するたびはたはたはたきますと、コロ〱シャンと優しい音をたてます、私の樣な者が一寸障つてもこうですもの、都の何々流の奧義をきはめたお孃樣方が、絹ぶとんにお行儀よく座つて、お彈きなさつたならまあどんなにいい音がてるだらうと思ひます。

詩趣が備つてゐます

五等

新體詩

鹿兒島　鎔　萩子

母樣は大の三味線好きでしたが、今は上の岡に松風の音許り聞いて居られる。姉樣は三ケ月も師匠を雇ふて三味線と踊の稽古をなされたが、遠い處に嫁つてしまはれた。父樣の琵琶も當分きかれないし、兄樣の尺八はお上手で私も好きだが、亡き母樣や旅中の父樣を思はれて、悲しくなつてしまう。一番よいのは琴てすけれ共、内にはない上私は彈けないのていつも幸樣のお家にいつては無理におひかせ申して、蹄ると机の上て眞似をしては、お祖母樣に笑はれる、それで此頃は後の松原で、好きな新體詩を自儘の調て高らかに歌ふのが何よりうれしいのです。

詩人の知己



晴れ間　陸奥　村林やす子

秀逸

○好きな曲

三河　天野清子

音樂の中で一番好きな曲は琴では御國のほまれに四季の曲三味線は夕顔に虫の音ハーモニカは越後獅子、特に合の手を好む琵琶は廣瀬中佐に石童丸プアイオリンは孝女白菊にはなれ小島唱歌は大塔の宮に雁の叫手踊は松づくしなどは私の好む處です。

○琉球ぶり

琉球　初音

深く繁つた阿且染の植込の中て、片割月をあびながら、琉球古老の涙と共に奏ずる情にみちた、哀れな三味と、笛を、聞た時は、氣絶した刹那も斯くや、若し人の胸に、喜びの糸、悲しみの糸、懐舊の糸、がおるなら、眞に其にふれたので、琴は悲喜の糸、ピアノは喜の糸に、ドラときてはおう否、其より、秋風の來てひく音がどれ程よいか知れない。

○臨終の一曲

八王子　井澤菊江

私の、祖母樣は琴の名手てしたが、私はさまて好きませず、只折々祖母樣に敎へて頂きましたが、今は五とせ昔の事、蹄らぬ旅に急がるゝ臨終一曲とのお言葉に、私も此時は一生懸命琴取出して彈じ初め、其一曲終りし一刹那、淋しく笑まれて草葉の露と消えられました、其日其時より私は、琴が一番好きになりまして、今は、

雨の夜風の朝必らず調べます。

○千鳥の曲　勝山みどり

夕陽は伊豆の小富士に沈んで、海も山も人の顔もうす紅、自分はたゞぼうとして海面を眺めて居る、とどことも知らず松風がヴアイオリンの音を送つてくる、曲は千鳥の曲。

此時から急に、自分は音樂殊にヴアイオリンが好になつて、母樣にお願ひして習ひ始めた、が千鳥の曲ひくやうにはいつなれるでしやう。

○彈く人の想像　愛知　內山ふみ子

彈く人を見ずに、聞く時には、私は、其人を、こう想像します、バイオリンはハイカラ好の人が、氣取つて彈いてゐる如く、オルガンは、必定敎師でせう、賑やかな、庭を隔てゝ、お琴の音が、もれくる時には、新夫人か令孃か、何れ優しき人の、すさびてあらうと、其人が見たくなります、洋琴は、ぢみを好む、手風琴は無邪氣な、共に、女生徒と。此中で御氣に障つた方は、御免遊ばしませ。

○形見の琴　大阪　濱田芳子

妾は琴が好きです。お嫁にいらつしやつた姉さんの琴を貰ひました、今は黃泉の人です。妾は琴を彈く度に姉さんの事を思ひ出しますので、自然に好きになりました。薄墨の花を踏み朧月に詩を吟じますとき梅香芳しい窓から妹の琴の音が聞えますと何んとも云へぬ、心地がします。妾の彈く琴の音も此の樣かと思ひまして一層好きになりました。

○踊　名古屋　胡蝶

私は踊と琴と三味線とを稽古しました中でも踊は好きでした東京では踊や三味線を稽古する者は賤業婦よりない樣に伺ひましたが當地では隨分歷々の孃樣方が稽古遊ばし升、私は決して踊を賤しいとは思ひませぬ。踊を稽古仕た者は體がやはらかく、着物も着なしがよろしう御座い升誰でも立派な御座敷へ行くと體が固くなる物ですが踊をした者は決して其樣な事は有ません尤も小供の中に限り升、體を揃へる爲に少しは稽古遊ばす方がよろしいと思升又茶の湯などは殊に早く體にそなへが付き升踊と言と賤しう聞へ升が末廣だの釣女大物では勸進帳石橋などはどんな立派な御座敷でも踊れ升、琴は山田で御座い升。

○わがのぞみ　奈良　中富よしみ

十八年の間草深き山奥に生立ちて、未だ一度も眞の音樂にふれた事は無いのです、都の人々が想像の及ばぬ、偉大なる自然の音樂は、私の耳には何とも感じません、話しにのみきく眞の音樂にどうか一度は接したいと私はいつも願ふて居ます。

○西洋樂　本鄕　さだ子

私は上野の音樂學校の演奏會に時々參りますが其時は何時も我を忘れて別世界に遊ぶ樣な心地が致します。又近隣から毎日三味線の音を聞いて居ります、或時義太夫もきゝましたが何か、これらは卑い樣で嫌な氣が致します。同じ音樂でなぜこんなに感じが異うのでせうか、私には分りません。私は音樂は聞いてる方が好きで莊嚴な風琴優雅な絃樂は殊に好です。

○田舍雜曲　靜岡　貞水孤蝶

都に文學び給ふ御樣達に引かへて、田舍に住む妾等の悲しさ、琴もプアキオリンも知らず只、手風琴、小弓琵琶、オルガン、立笛など度々聽きますが其他には田舍や町の祭禮に揃ひの衣裝て屋臺を曳き、笛太鼓鐘などの馬鹿ばやしは實に面白く感じます。義太夫の三味線や神樂の笛も心地よいが、月澄み渡る秋の夕べ隣の兄樣が晝の勞の慰みに吹く笛は何となく物淋しい、けれ共妾は音樂を聞くは大好きであゝい一度ヴアイオリンや琴やピアノなど聞いて見たうございまする。

○各々の得手　橫濱　村田千代香

裁縫敎習所へ通ひそめてから最早壹ケ年其間と云ふものは村向ふの濱江樣が學校から歸られてお琴を奏てゝいらつしやる其時に私はかへつて來るのですそして三味線のお稽古に二三町ある所迄行くのです夕飯後おさらいをして居ると、となりの田中さんへヴアイオリンを習ひに來るハイカラな方がある芳子さんとて優しき人私はまもなく御交際する樣になつて濱江樣にもお紹介して今は三人姉妹も及ばぬ程の親しいなかになつてこの彌生の麻ちやんの初節句に何か合奏しようとて相談中。

○不遇　南豐　藤の家瑠璃子

琴の音を聞けば琴がならひたい、三味線を聞け

ば三味線がならひたい。オルガンでもヴイオリンでも風琴でも尺八でもハーモニカでも、何でもかでも目に見たり耳に入つたりすると、ならひたいやつてみたい大の大好きなのよ。悲しい事には私は諸姉様の様に、音樂などにあこがれる事のできない境遇なのです。

○ハモニカ

周防　三室夢守

私はハモニカが一番好きなのよ、少し前からベースがうまくやれだして、お母さんはお口が大きくなるからよせとお云ひだけど私ほんとに好きなんだからしかたがないわ、毎朝妹の里ちやんとボスとて裏の梅林てカールマーチなどふきますのマーチは興に入る里ちやんは口まねをしだすボスは耳を動かして聞く梅の花も無心ではない様な氣が致しますのよ。

○妙音

宮城　咲枝

濃い紫暗染の紋付、赤地錦の上下もまだ幼少けな十二才許り。厚う房々ときり下げた前髪の下にはうつとりとして情こもるまなざし。己が丈より高き見臺に向ふたいぢらしの姿。

ねぐらはなれしほとゝぎす子て子にあらぬみづからを――

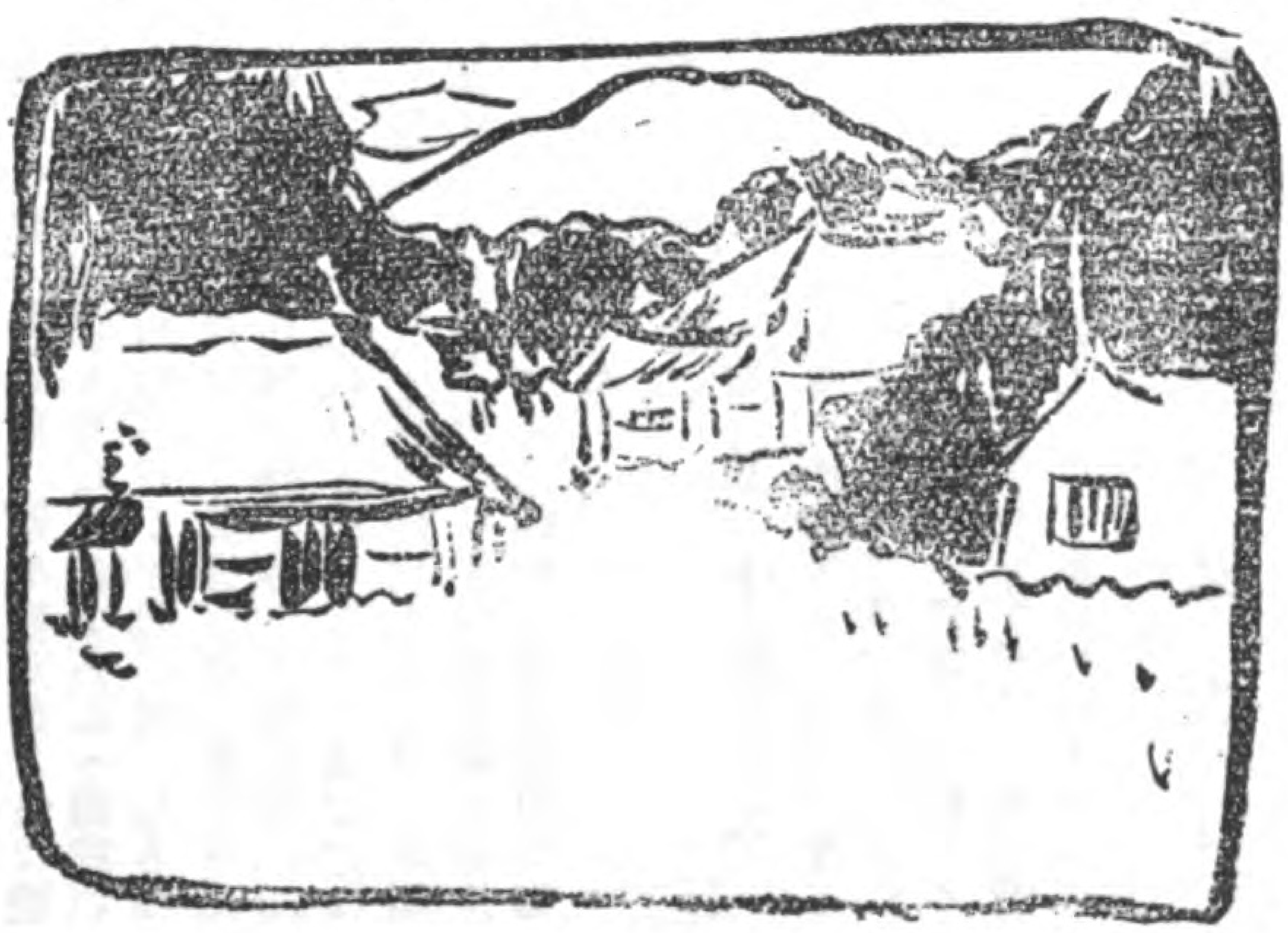
かたり出す其ののどの妙音。私は、ホロリとした。いつもきく文句ながら今宵は殊更身に泌みて。

○希望

岐阜　しげ子

私は性來多くの學科の中でも一番、音樂が好きてあります。特にオルガン、ヴアイオリン、が好きなので、これらの樂器を演奏したり聞いたりしてゐる時は、夢中になるので、折々食事も忘れる事があります。それて、私此度學校を卒業したら、東京の音樂學校に入學して、立派な音樂家になりたいと思つてゐます。

新緑　京都　吉田しづ枝



○柴笛

筑後　永野ふさ子

靜かに窓を開いた鎌の様な月は御庭の松ケ枝に懸つて居る耳をすますと微妙な松風の響き虫の聲靜かな夜の庭に調べを合せて居る遙かに柴笛の音がきこえる、山に新取りの往き歸り夜は散歩の道すがら木の葉含んで吹きならす松吉の妙なる調べ今宵も亦聞えて來たのである。

○音樂のいろ〱

牛込　丹羽濱子

妾は音樂を聞いた時の感想を四季の花に譬へてみませう。琴――高尙い姿の菊の花。三味線――草になやめる海棠の花。大鼓――仇な姿の桃の花。琵琶――寂しい秋の枯尾花。鼓――目出度い萬壽草。笛――床しい蕭の梅の花。ヴアイオリン――紫句ふすみれ花。ヒアノ――朧ろ月夜の櫻花。ハモニカ――優い姿の百合の花。踊――花の滿開の期。唱歌――種々の花を集た花籠。

○自然の音樂

愛媛　菊子

ヴアイオリンヒアノ琴なる穩いゝてせう。その音は如何にもやさしい。例へば春風に董のなびくやうに。然し皆小い十本の指て造つたもの。壯嚴な自然の音樂に比べたならまるて玩具のやうてせう。妾は自然の音樂が好きてす。妾の家は海濱の松原にあります。今日のやうな寒い空に西窓を開いて御覽なさい。渺々たる火打灘は千里の闇に包まれて轟々の響を傳へ、大華の燈臺は北天の斗星と疑はれます。おりからおこる高繩おろしに狂ひに狂ふた火打灘は、まこと火の出んばかりに磯岩を洗ふ響。まあ何と愉快てせう。

學校生活

○學校の造林

伊豫國宇摩郡關川村字井上　井上いち子

私の尋常四年の時村の共有山を學校の造林地として二丁步與へられました、それて春の好い時分に、先生が監督て五六人の雇人して、男生も女生も共に手傳つて、一年生の檜を植たのです、そして六年目の今年見ましたら皆勢よく太つて足を踏み入れる所もなき樣に大きく成つて居ました。

（入賞圖書切符金五十錢）

○孔子樣

背森　山本直子

日本に二つしかないとか言ふ孔子樣の御肖像があります。そして我が父母の小學校時代には三大節にも勅語奉讀もなく君が代を歌ふてもなくたゞ孔子樣を拜む〳〵と言ふて着更をして行けば校長先生は御肖像を飾つてその講釋を御聞かせ下さるのは例てあつたそうてす。

○自然の威化

信濃　世良田ゆう子

私の女學校は淺間山と千曲川との間に建てられて居りまして天然の美は盡くこゝに集まつて居りますそして私共三百餘人の生徒は美的觀念と敎訓的觀念とを自然から受けて居りますてすから才媛淑女が深山に養はれつゝあります。

○我が學校

岩手縣　小野寺巻子

我等は毎日通學致し學校は町の眞中にありまして南むきて北風の當らない所て冬は善き場所てす又學校の大きさは間口五十間て兩側の袖は二十五間て皆な二階があります先生は二十八人て親切てす生徒は男女合せて一千三四百人てす。

○避雷針

陸津　小百合

朝早く起きて、二階の窓から南を見ると赤い煉瓦の大きな建物、三本の避雷柱に旭が美しう輝いてゐる、これは私がいろはを敎つたなつかしい學校です。

○妾の學校

上總　今井茂子

妾の學校は町から細い路次を通つて、五丁ばかり行きますと小高くて、町を一目といふ眺望のよい所にあるのてす、昔のお城の跡て山の中腹にありまして、後に大きな山をひかへて其一方を川が流れて居るのてす、校舍は隨分廣いのてすが其の上に今二三日て立派な講堂も出來あがるといふのてすから盛大てあることは、皆樣も自然お分りになるてせう。

○生徒は少い

福岡市　谷妙子

私の通ふ學校は或先生の私立て近頃出來たのですさて此處に毎日集る生徒は實に少ないのてすが私は情深い先生の淸い御敎へと高潔な同窓の友とに導かれるのを此上もない幸と信じて只管學校の榮を祈つて居ます。

○小使

くに子

妾の卒業しました小學校の狀況を少し書きます學校は妾の村から九町程西にありまして校舍は一寸普通の建て物て敎員は男師四人女師一人てす生徒は百六十人程て小使は頭が禿げて中々面白い小使てす。

○健談

遠江　原木富美子

私の毎日行く學校の總生徒が百十有餘人あつて妾の級ては三十五六人あり、出來方は二三人よき生徒が有ります。一番は鈴木さん、二番は植田さん、三番は名波さん等てす。其れは中々よく出來るので毎日先生よりもお審めがてます、私日々に心悲しく思ひますよ。

『學校生活』募集

▲諸孃が毎月通はれる學校の有樣なら何てもよろしい▲學校全體の近狀ても又は一部の近狀ても▲學校の評判、特色、學科、敎師、生徒、或は風景なり建築なり凡て學校と關係したこと▲又諸孃が御自分達と學校との關係も面白い▲原稿は十行以內▲佳作には賞品を呈す



讀友倶樂部

朋友に三の要法あり、一には失あるを見れば則ち相諫む、二には好き事あるを見れば深く喜びを生ず、三には苦痛にあるとも相棄てず
佛典因果經

文學顧問

問　信綱先生空穗先生薫園先生の歌集及び發行所を何卒御敎へ下さい。（芳枝）

答　佐々木信綱氏の「おもひ草」（博文館發兌定價五十錢、窪田空穗氏の「まひる野」（絕版）、金子薫園氏の「伶人」（博報堂發兌定價四十五錢）等

問　記者樣に御問致します、佐保姫とか龍田姫とかの詞がありますが何の事でありましょう（房總龍子）

答　佐保姫は春の霞の神、龍田姫は秋の紅葉の神てす。

問　記者樣、新歌謠を作るのに地方の言葉や昔の言葉を用ひてもよいのでせうか、御敎示を願ひます。（柳子）

答　地方の言葉もよろしい、昔と言っても餘り古いのはいけません、マア今の言葉て作る方がほんとうてす。

問　あの記者樣一寸お伺ひしますが、晶子先生に直接和歌の添作をして戴けませんでしょうかそれから先生の御作りになつた新派和歌初學者に適當な本がありませんでしようか（千代子）

答　直接添削は願へるでせう、晶子女の著した作法書はありませんが、歌集ならあります、歌集は「みだれ髮」が最初の集です。

諸孃と記者

○記者樣、みなさんは何故男子の方をあんなにきらはれるでしよう。男子の方だつて手紙の上で淸い交際をするのは好いことだと思ひますわ、折角手紙を下さつたものをお返事も出さないなんて失禮でせう。もしみだらな事でもあつた時にはきつぱり絶交すれば好いことよ。だから姿誰れとでも交際しますは、姿わ淸淨潔白なバージンですもの（南國の林檎）（記者曰、マア理屈は然うですけれど折角御用心なさる方がよろしいでせう）○靑木みゆき樣に答ふ、折角の御依頼ですけれど諸先生方に雅蹟を乞ふと云ふことは一寸むづかしいのです、折のあるまでお待ち下さい（記者）○記者樣姿れ、圖書交換の申込がありましたから讃岐の香川政子さん徒然草と、和泉の天猟華樣へ土佐日記とを御送りしましたのよ、けれ共其後當方から願つた書物も送つて下さらねば受取つたと言ふ手紙も下らないのです神聖なる本會何とか制裁の法はありませんか（德島縣麻植郡飯尾村二二三工藤美雪）（記者曰、天知る、地知る、記者知る、制裁は天に在り、取られた本はあきらめたまへ）○記者さま寫眞と原稿と同封でもよろしいですか、又郵便規則に反しはしませんか、どうぞはやく答へて頂戴（矢名女子）（記者曰、寫眞と原稿と同封はいけません、別々に送つて下さい）○記者さま私寫眞をお送り申そうと思ふて居りますが、お父さんと一しよに、寫りましたのでもよろしいのですかお敎えなすつて下さい（福岡縣牛尾愛子）（記者曰、お父樣と御一しよでも結構です、御送り下さい）○記者樣にお尋れ致します皆樣の中にて名前の下に、女史と書いてある方がありますが、あれはどういふわけですか自らおつけになるのですか御めんどうながら御敎へ下さいませ（若狹、野菊）（自らおつけになるのです、自ら何々女史と名乘るのはへんですれ）○伊勢、福島初子。大阪、利子。綠綻女。芝金女。玉秀淸。臺北、秤賀みつ子。磐城、英子。若狹、野末花日向、歌子。尾張、芳子。丹後、河島美年子。美妙子。常陸、中山道江。讃梅、横山わか。山里の靜枝。山武郡、龍子。濟南、江口德子。賤の女。大阪、巽美佐雄。京都、矢田愛子。千葉、すみれ女。江原千里子。廣島縣、勝丸りよ。駒澤きく。茂子。以上の諸孃から御申越の事は一一御返答いたしませんけれど皆よろしいのです。（記者）

諸孃の交際（其一）

○私は戀しい〳〵父母の膝元を遠く離れて當地にさすらひも早や幾月の星霜を經ました皆樣からのお便りを唯々何よりの慰みにして居ますそして自筆エハガキの交換も御願します但し男子方は斷然御ことわりよ（名古屋市深井町十三番地浦野方初枝）○私事先日より家事の都合で親戚の宅へ來て居ります何れ歸りましたら

一々御禮致します（大阪府東成郡旭村字野江本四時子）○私も先々月から愛讀者となりました繪はがき御手紙なども下さいまし（陸奥國弘前町東横町松原方兵庫文子）○御見捨なく千代かけて俳句、玉章、繪葉書、雜誌の御交換を願ひます（神奈川縣三浦郡浦郷村田浦一六岡崎由遊方吉田てる子）○私は片田舍に淋しく暮して居る者ですたまたま末座へ投書も致します皆樣水彩畫繪葉書なり女子文壇の水彩畫なりをお惠くださるお方には高尾山八景の繪葉書にて必ず御禮致します（武州八王子八日町小池方秀村秋水子）○皆樣題は御隨意で宜ろしう御座いますから御自作の歌を御送り下ださいさすれば直き御返歌致します然し新派は御斷り（赤坂區青山原宿百三十四平野内鍬野ちえ）○私は少ししさいがあつて御ことはり申します、御察し下さい（福島縣伊達郡梁川大町武田きみ子）○昭者樣妾の國は三重縣津市です海軍々人の妻と成りて他國でさびしく暮して居りますから何卒諸孃樣にもお願ひ致します（群馬縣大瀧上町大島常太郎方之村すゑ子）○寫眞繪はがき等御添附下されば寫眞畫報及び婦人雜誌類を添へ必ず御返禮します（東京京橋區築地二ノ一六鄙志内波石千志）○之から繪葉書書信の御交換を願ます（秋田縣平鹿郡増田町四津屋内入石田清子）○誌友皆樣の御健康を祈る日曜日などに皆樣が散歩にゐらつしやつた記事お送り下され（大阪市東區八丁目中寺町龍淵寺内千鶴子）○諸孃樣不束な者ですが玉章葉書の交かんをお願ひいたします（石見國那賀郡濱田町海岸通渡邊たき子）○何卒繪ハガキなり御玉章で御交際願ひ申ます（京都市蛸藥師御幸町西入谷口良次郎方野菊）○今住はせ給ふ所の都なるや否やは問はず只田園の生活を心の底より好ませらるゝ御方あらば御交際願ひたし（東京牛込區下戸塚村五一三納富樣方大仁志うつせみ）○母上病氣にて附添の妾と供に入院中ですがあまり淋しくてなりませんから御惠み深き諸姉上樣よ玉章や繪葉書や寫眞等の御交換を願ひます又御手製の絹物ヒナ、ツキ衆等御送り下さいませんか御禮として最近發行の小説を差上ます（福岡縣鞍手郡直方町岡田醫院内森しげ子）○美しき繪はがき御手紙御寫眞などを御惠み下さる方には相當の御禮は必ずいたします（靜岡縣磐田郡龍川村横山内山元子）○自筆の繪はがき御惠み下さる方には相當の繪はがきにて御返禮いたします（靜岡縣磐田郡龍川村横山内山靜）○この後は何卒以前に増して益々厚き御交際を御願ひ申上げ度うございます　御手紙、繪端書、和歌、俳句其他（仙臺市北二番丁百十一番地　後藤芳子）○細い者ですが何卒繪葉書や玉章の交換を御願してよ（北海道有珠郡西紋鼈共榮座内　加藤鈴子）○北海道仙臺の諸孃樣方よ私はいとも〳〵淋しくくらして居る者よどうか御手紙御惠み下さいなきつと御返事致しますわ（北海道夕張郡夕張炭山事務所内　小島とし子）○春時候與草花種子を三十種許持つてゐます五十名を限り二種宛分けて上げます極上等な繪葉書て二十日迄に申込みなさい（福岡縣京都郡菽郷村秋満新平方　香月）○妾は昨年高等女學校を卒業しまして音樂を研究のため上京しましたが何分お友達もありませんで淋しく暮して居ますのよ誌友の姉樣達よ妾に書はがき寫眞の御交換を願ひます（麻布區四之橋吉村ふて樣方　中島あい子）○繪葉書や玉章を御惠み被下し御方には粗末て御座いますが上海の名所や御好みの御方には御寫眞や圖畫も御交換を致しますよ（北海道有珠郡伊達村　齋藤つや子）○妾は昨年高等女學校を卒業いたしまして造花研究の爲め上京いたしました今後繪葉書の交換なり寫眞の交換なりをして下さい（麻布區飯倉五丁目一七福田方　田代みみ子）○皆樣ほんとうにお寒いのねえお變りは御座いませんか末長く御交際や繪葉書の交換をお願ひ申ます（芝公園地二ノ二　菅間隆子）○私も本誌を愛讀して居るもので御座いますどうぞ御交際の程れがひます（茨城縣西茨城郡北山内村大字箱田　木村まつ子）○妾は浸趣味の大連に參り何一つ樂む物もなく何卒末長く繪ハガキや御文の御交換を御願ひいたします（大連浪速町シンガー會社内　癸文子）○誌友の皆々樣私も本誌愛讀者の一人です何卒末長く御交際を願ひます（千葉縣匝瑳郡福岡町　深堀てる子）○先日男子の方より玉章送り少からず迷惑をいたしましたから此後男子の方には斷じて御交際せず（三河岡崎鍛田　天野靜子）○皆様からあまり澤山御申込になり私の不要文書はたちまち品切れよ一々御斷りしませんが右樣御承知下さい（越後れお子）○皆さん妾も女子文壇を愛讀する樣になりましたから何卒玉章の交換を御願ひ申します（栃木縣下都賀郡寺尾村大久保　落合友子）○野暮な片田舍に住んで居る妾それでも女子文壇の愛讀者よお寫眞や繪葉書玉章の御交換をして下さい（和泉泉南郡男里村金田秀太郎方歎雪女）○これから繪葉書や玉章の御交換を願ます（千葉縣實

隣郡瑞澤村 相馬濱子)○私は山里の片田舍にさびしき月日を送る不束者でありますがどうぞあみ物や玉章しなりの交換もして下さい私は一時的でなく永久に交際を成し下さる方をのぞみます(岐阜縣加茂郡和知村牧野 日置桃花)○玉章繪葉書等の交換して下さいませ (岡山縣玉島町信濃橋通り二八五 坪井小奕榮)○何卒これから繪葉書や玉章の交換を願ひます私も還濁風景美人の繪葉書を御送り致します (臺北艋舺直興街二八 吉永次子)○玉章や寫眞の御交換を願ひます下ださつた御方には先着五名へ女子文壇を差し上げます(德島縣名東郡加茂名村大字藏本村 笠成まつ子) ○皆さん寫眞及玉章の交換しましよう賛成のお方は下記へ(岐阜縣可兒郡廣見村大字淵之上仲屋敷方 加納雪枝)○妾の慰藉者は婦人世界と女子文壇ばかりなの願はくば永久に玉章か又は美人繪はがきの交換を願ます) 下毛阿久津村中阿久津 野中とみ子)○學校へ出ておられる方で裁縫科及び遊戯に御熱心なお方は直接御交際をねがひます (兵庫縣神崎郡川邊村之内屋形村 渡邊とよ)○親愛なるミステレー妾は學校生にして殊に活潑な人を希望しますが誰でも御交りを農地の人は猶の事寫眞ブックの交換も(志摩濱島淋磯部學校 向井良子)○京都に淋しく暮してゐるものですどうか皆さんお手紙を下さい(京都市葭屋町出水下ル 宮原栄枝子)○皆様私はやつと十六才になつたのよ御交際下さる方は無いでせうか何しろ私は氣のサラリッとした情の深い方が一等ずきなの(愛知縣名古屋市舍人町井上すみえ) ○なつかしき未見の諸姉様よ妾はをれは我儘者ですがどうぞ永久に御交際下さいませ田舍の事とてろくな繪葉書はありませんからどんなのでもよろしうございますわ (靜岡縣小笠郡平田村下平川 黑田紫子)○未使用の繪葉書編物雜誌等の交換を切に御願ひ申します但しあまり上等はお斷り財政ゆるしませんから (陸中國稗貫郡湯温泉場 小瀨川昌子)○賢明なる誌友の諸姉様方よ妾はまだ淺學のものですが以後御交際を願ます(埼玉縣大宮町川越新道二五一 太田たま子) ○おなつかしい皆さま妾いまだ十七歳になつたばかりの子供なのよだけど皆さんと肩をならべたいのよだから繪葉書や編物などの交換を願ひますきつとごへんじはやります (茨城縣新治郡高濱町東大橋 小松崎なをえ)○美しき繪はがきや玉章雜誌御送り下すつて有難う御座います今後も相變りませず御願申上ますほんとに失禮な申分ですが地方のお方に限りますよお氣に召した方は何なりとも送つて下さいれきつと／＼相當の品で御返禮致します (京橋區三十間堀三丁目九番地速水柳平方 飯塚時子)○玉章及び繪はがき寫眞等の交換を願ひます返事は必らずいたします其れから孝女白菊の歌御存じの御方は敎へて頂戴ねきつと御禮します (京都市上京荒神口下ル三木ムツ方黑野信子) ○お情深い諸孃様方よ御玉章の交換をなし下さい(周防國都濃郡久保村 磯部まつよ)○誌友の御孃様妾のつたない繪端にも御厭いなく御交換してくだされ實に喜びます (山口縣玖珂郡南河内村從船懸子) ○本誌愛讀諸孃さん編物でも古雜誌でも宜いから妾は大和文殿と交換したし (下總匝瑳郡東陽町宮川通一丁目四五三七番地 和田しん子)○兄様や姉様お變りなくて、お手紙頂戴な(下谷區竹町十九 桝崎佐喜子)○井中の蛙とはほんに妾の境遇なのよ本誌を唯一の友として暮してますわ之れから妾も仲間入りを願ひますお返事は乾度差し上げます(岩手縣湯温泉場 伊藤たれ子) 妾は豐後國東半島の片畔に住む薄倖な子ですが諸姉様萬望可愛がつて下さい繪ハガキの交換も願ひます (大分縣東國東郡西安岐村大字瀨戸田五百二十四番地 近藤げん子)○少々都合が御座いまして皆様と御まじはりをやめなくてはなりませんの：また折がありましたなら御知らせ申しますわ：さらば懷かしい皆様よ御機嫌よく(茨城縣宮川磐子東京神田猿樂町にて)○妾は奥州安達の里に住むつまらぬ者でございます諸孃様方よ憐れと思召し交際願ひます(岩代安達郡和木澤村和田 根本直江子)○諸姉様よ妾は金鯱の下に住んで居りますのよ至つて無學の者ですがどうか永久に御交際の上可愛いがつて下さいれ(名古屋市鐵道官舍九の三 藤井志津子 ○誌友の諸姉様よ、妾は他縣の高等女學校へ通つて居ました、が去年の十二月中旬頃から脚氣の爲學校へも行かずに故郷に淋しく暮らして居ます只今は偶の様になつて居ますから手紙やエハガキ編物の交換をお願ひ申します病氣中に遊んで居たのですから編物やエハガキは澤山あるのですから拙ないですが御返禮申します、甚だ我儘ですが成るたけ絹物をお願ひ申します (熊本縣上益城郡木倉村藤村たくゑ) ○誌友の皆々様妾の如き淺學のものを憐と御思召下さいまして末長く御交際下さいましな (東京市京橋區明石町十二番地 山内智惠子)○諸姉よ妾はわづかに本誌を唯一の友否慰藉者として吉野の奥で生を送

つて居る者てすどうかこれから御見捨なく御交際を願ひます（大和吉野郡賀名生の里久保榮子）○誌友の諸姉樣どうか玉章をお惠み下さい、然し男子の方はお斷りします筆蹟が男子らしい時は御返事を差上げませんから惡からず（茨城縣眞壁郡河內小學內　菊子）○玉章普通葉書に奕しき筆蹟の交換を願ひます（吳市西本通三丁目百合野白梅）

圖書換讀

○妾の手許に己が罪上中下と昨年から今迄の女子文壇、女學講義錄、女學世界、唱歌露營の夢、讃岐の院信濃春秋などあり姉君の許に平家物語、乳姉妹、伯爵夫人、月しろ、ハイネ詩集などがおありなら右の本と御交換下さいなもし御交換下さるなら前に一寸御通知を願升（長野縣上水內郡三輪村上松　小林久子）○私の處に美文作法、懸賞文集、玉むし、人の罪、銀山王、武俠の日本がありますから夏子が不用の方があらば交換して頂戴（和泉國泉北郡南池田村大字萬町　高橋輝子）○私の今持て居る本の中に女子文壇、女學世界少女界、新小說、ムラサキ、中學世界等の本がありますから諸姉樣の內に不如歸、少女世界、夏子等の本がありましたなら御交換を願ひます（山梨縣東八代郡御代咲村字東新居　古屋重子）○皆樣私の手許に女の雜誌不用ですから外のものならなんでも御交換下さい（相模小田原町綠二中川加爾子）○私の宅に文藝倶樂部秀才文壇美文の資料初姿女學生等ございますから御不用のと交換して下さい（大阪市西區松島町二丁目川村富子）○不用の雜誌が澤山有り升から御望の方は繪端書か（未使用）造花で御申込下さい猶「ハーモニカ」御不用の方御送附下さいませ神かけて着次第御禮を致します（和歌山市嘉家作り町神保須磨子）○皆樣私は「不知火、心の影、己がいましめ、鹿島なだ、無花果、奴島田、びわ歌、吉丁字上下、二筋みち上下、新夫婦上下、女學生、ざんげ、青春、慾芙蓉、小英雄上下、想思怨、つゆ子夫人、夏子上、百合子上」等もつて居りますが何かほかの小說とおかへ下さいませんか御かへ下さる方は先に送つて頂き度う御座います、兎に角下名迄御一報を願ひます（尾張國熱崎町櫻井峯子）○妾の手許に花夜叉、十七八、紺暖簾、思出の記等がございますが編物類ハンケチと交換して下さいませんかお望の方先着三名に婦人世界を一册そへて差上ます（遠江國金谷町吉田やす代）○皆樣のうちに「不如歸歌」か「寬風戀風」の歌お持の方は妾の「女の雜誌、探撿小說なら何でもありますからお交換下さいませぬか（北海道有珠郡西紋鼈末永町加藤八重子）○皆樣の內に左の書御所持てしたら妾に御ゆづり下さいませんか、寬風戀風の中後編、新學士、はつ姿、思ひ出の記等また女學世界、少女界、少女世界、女子文壇、和洋裁縫全書などありますから他雜誌と御交換遊ばして下さいな（能登國鹿島郡田鶴濱西町中村じん子方　磯千島）○慕はしき誌友の皆樣私に己が罪前中後、コブシ一二、伯爵夫人、大日本淑女學會の正則女學講議錄が第一學期の四號まてあります寫眞か編物か青春、寬風戀風、少華族かて御交換御申込みを願ひ申ます（羽後由利郡本莊表尾崎町　森かく子）○皆さんの中て小說「月しろ、母の紀念、心の影、にせ紫、かん音岩、想夫戀」等の他色々な小說を持つておいてになるお方は私の「コブシ、復讐、無實の罪、其面影、後の世、落し胤、黃金窟、圓左落語集、文藝倶樂部など澤山御座いますから御交換下さいれはがきて御一報次第お送りいたします（大阪市西區梅本町三五一大神美枝）○姉樣方の中に不如歸、伯爵夫人、女夫波、鏡子、濱子、など（小說なれば何でもよろし）御不用の方がありましたら私の新體詩入門、和歌入門、俳句作法、朝晴、女學世界少女世界、文藝倶樂部、新小說など澤山ありますから是非御交換して下さい（名古屋市杉之町一三三鶴飼方欣子）○妾小學校の教師ですが女子

紹介欄（新設）

紹介欄は其名の通り何でも紹介します▲紹介欄には信用を置いて頂きたい諸嬢も誠實に本欄を善用し記者も誠實に本欄を擔任したいと思ひます▲紹介欄には例へば諸嬢が遊學の便宜、就職の應答、職業の欲しいと思ふ人・女子を使ひたいと思ふ人等、何れの便宜ても計ります、貸間の紹介、小間使の紹介、女書生の紹介抔も本欄て扱ひます▲本欄へ出す分に限り住所姓名を紙上だけは隱しても差支えありませぬ、記者までには必ず住所本名を知らせること▲本欄へ出すには少しも手數料も何も入りませんけれど、本欄の記事に就いて問合せある方は三錢の郵便切手を入れて下さるか又は往復ハがキて問合せて下さい▲原稿は半紙半枚位に書いて紹介欄と云ふ文字を端へ書き添えて下さい。

文壇一號からの愛讀者ですの皆樣の內に小笠原白也氏の嫁ヶ淵御所持の方は御惠み下さい妾の寫眞そへまして御禮いたします男子の方でも决してかまひませんの（大阪市東區內淡路町二丁目三五今井方津田春子）○私の許に不用の女子文壇、女學世界、婦人世界、ムラサキ、女鑑、文藝倶樂部、新小說、日本之家庭、尊澤山有りますの御望の方は御寫眞又は御手製の財袋造花等で申込て頂戴すぐ送て上げます（筑前福岡市外醫院出口二一〇番ノ二岡方森惠子）○なつかしき誌友の諸姉上樣の內にて藤村詩集、金色夜叉の歌、女夫波の歌御持ちの方は御送下さいな御禮は乾皮致しますわ（神奈川青木町桐畑五三六番地篠原菅子）○皆樣の內で國文に關する本をお持の方は御おくり下さい（東京本所區相生町三ノ十三宮內方宮下裕國）○小說御交換を願ひます私の手許にハイカラ令孃及種々のおもしろき小說二三十册ある故皆樣のうちにて魔風戀風、伯爵夫人、露子夫人等なお持ちの方はお送り下さい（和歌山市柴屋町十番地辻春子）○妾の落穗集、天地有情、悲哀の快感、活戀、世界歷史談、釋迦、和田守記悅法講義、學術自修法、義經記上下の九册と乳姉妹全部或は魔風戀風全部の何れでも御交換下さいます御方はありますまいか御望みのお方は下名迄豫め御通知を願ひます（岐阜市上竹町加藤みさを）○誌友の皆樣の中で眞人の自白母の紀念、富と愛、黃菊白菊、亂髮、青春等御不用の方は何れでも御送り下さい拜見の後は紀念スタンプ附美くしき繪入ハガキに郵券を添へて返上致します（橫濱市南太田一七六二番地根岸花子）○皆樣のお手許に紅葉全集、有情無情、明小袖、戀の音、玉取姫、嫁ヶ淵、乳姉妹、思出の記お持の方は私のハイカラ令孃、文學世界、男女美容術、皮膚病類、不如歸、女醫者、文藝倶樂部、實業料理法、露子と交換して下さい先着十名へは美人草花愛兒の繪はがき澤山ありますから書物と添へて送ります（筑後八女郡水田村島田下川正次郎方下川すゑ）○皆さん妾は幽芳の己が罪三册と銀月の男女觀、博文館の呪はれたる女などの書物を持つて居ますが諸孃の御不用の本と御交換して被下い右は何れも損じてゐませぬ（滋賀縣長濱永保町坂木榮）○御許に魔風戀風、孝女白菊、源氏物語、緣不緣、もつれ緣、夫さだめ、化粧かゞみ御持の御方は只今私の許にいろ〳〵と不用の本があります入十人分進呈する程どうぞ御交換を願ひます（名古屋市西角町七番地市江學尾）○姉樣方先日は有難うおかげで面白く御交じはりが出來ました、私の處に思出の記、毒草、千代田の宮、金色夜叉全部、青春、夏子、にせ紫、ふた昔、濱子、百海、女學世界、ほのほ、小猫、少女界「水彩術手引」等百二十册程不用書が有ります故皆樣の內で破戒、日の出島の內どれでも、女夫波、不如歸、己が罪、眞人の自白、烏族叢報、埋れ木、乙女の操等でお申込み下さいませ妾は美しい繪はがきに受取を書してすぐお返し致します（信濃下高井郡往郷村新田青木みゆき）○諸姉樣の中で多情多恨、雛子、富美子夫人、新學士、血の涙、天打つ浪、嫁が淵、火の柱、其の他面白い小說雜誌お持ちなら私の手許にある秘密島、未だ見ぬ親、戀のなやみ、妾の罪、零のかぶと、食道樂（全部）小天地、文藝倶樂部、女學世界、婦人世界、少女界、少女世界等數多あります から何卒御交換下さいましお禮はいたします（常陸國筑波郡北條內町鈴木花子）○私手許に女學世界、婦人世界、文華、女子本分、理想の良人、家政學講義、料理法、漬物法、吸の養生、裁縫と編物、醉人の妻、日用家事要法、妻女の本分、母親の心得、家庭夜話、看護法、人心經濟、不如歸、女夫波、ほのほ、八軒長屋此外數十部あります繪端書は花鳥風景偉人などあります寫眞も上ます皆樣不用の書御有なれば送つて下さい必ずそれ以上の御望に從ひます乾度れ（信濃上田在長島太田龍子）○皆樣私の手許に新不如歸、新婚旅行、可憐孃、生死、女忠臣藏、朧月夜、女學世界、婦人世界、女子文壇、新女子文、最新英和辭典、育兒と衛生等不用書があります皆樣の內に雛子、青春（秋）百合子、富美子夫人、露子夫人等御持てしたらどうぞ御交換なし下さい又繪葉書も御願ひ（島根縣那賀郡濱田眞光町和田岩子）○おなさけ深き諸孃方よ古雜誌や地方新聞等の交換して頂戴な妾の許には不如歸、人の運命、ハイカラ令孃、日本の少女、婦人世界、戀か夢か、妻と妾、學生氣質、戀の旅等不用になつて居りますから何卒交換して下さい（茨城縣稻敷郡阿見村大室三十番地大崎誠子）○皆樣圖書の御交換を願ひます家庭に關した小說類のお送りを願ひますお禮として今回文部省の檢定濟と成りました大和田建樹作歌、田村虎藏作曲の北海道唱歌南の卷北の卷の二册を差上ます（小樽港色內町三八光商會支店方清水初枝）○私手許に朝日櫻、白雲日記、彈片、民間實用救治療法　三體千字文（村田）及唱歌本千鳥之曲春の曲等がございますが編物若しくは不如歸の歌、金色夜叉の歌、雛子、夏子の中と御交換下さいませ

ぬか(薩摩國川邊村高田平村高代子)○文學上の雜誌なら何程古くとも又何雜誌ても宜いから妾の不用小説小猫、嵐の御所、鮫子、多情多恨、思出の記、不如歸、金色夜叉、夜叉男、二人孤子、七草集等と交換して下さいませんか小説御不用の方には詩集か相當價格で御讓いたします(羽前國玉川局區內南小國小學校內朝尾加江子)○誌友の皆樣私朝はれ不用てすのそれて姉樣方の內之れに相當する編物の本とおかへ下さいましもしおかへ下さる御方樣ははがきにて御通知下さいれお願いたします(大阪北區曾根崎中二丁目一九三藤井方 藤井よね)○皆さんの中で藻笛集か二十八宿かお持ちの方は私の藤村詩集と交換して下さい、 尙戀衣か醉夜お持ちの方は私の小詩國と交換して頂戴 (茨城縣眞壁郡五所村山崎木村惠與子) ○お姉樣方私の手許に思出の記、密航婦、播英別、小猫、鷲聲、夫さだめ、少華族乳姉妹、夏子全部、青春全部、 明治才媛文集、美文自在、學生訓二冊、青年訓、濱子、百字文選二冊、いさゝらば女子懸賞文集、 玉手箱、歐吉心中、桑の弓、きくの濱松、新小説、文藝俱樂部、等百冊ばかり不用に成つて居りますが皆樣の內にて愛火伯爵夫人、緣不緣、後の世、富と愛、紅葉全集、女の面影、積戀城、仇と仇、コブシ、心の波、わたり鳥、金色夜叉合本、黑闇、嗟無情、海賊の子、等御持の方は送りくださいませんか(羽前最上郡新庄町金澤長南日出子) ○只今私の手許に牛生之文章、時代青年文集第貳、社會百面相、戀愛之福音、近松妙文集、美文の資料、青年と詩吟、青年と色情、秀才文壇の古き合本三册、靈光、偉人の腕力英雄崇拜論、 等尙其他にも不用のものありますら皆樣の內で想ひ出の記、順禮紀行、吾輩は猫、である、須磨之記、病間錄、回光錄、 うづら籠、金色夜叉等御持ちの方は御交換して頂戴な、尙は詳き事は御手紙て願ひます(京都府下龜岡町字柳町清水製材所內清水白菊子) ○妾の許に青輪文辭書、小説、忘れがたみ、花圃の露、夏小袖、不如歸、文藝俱樂部等ありますから諸姉樣方に面白い小説お持ちの方は御交換を願ひます尙輪文辭書は乳姉妹か女夫波と交換して頂戴な(靜岡縣榛原郡萩間村東萩間藤野琴月方百枝)○諸姉樣の中て面白い洋樂譜のお持ちのお方は左のヴァイオリン譜と交換して下さい、叙事唱歌の須磨の曲、羽衣、離れ小島の曲、旅愁の夢、廣瀨中佐、閉塞隊、筝曲の千鳥の曲、越後獅子、老松、櫻狩、住吉、勸進帳、鶴龜の曲、又は樂學の熱心なるお方と御交際を願ひます、(高松市紺屋町九三田中晨)○皆樣の中で第一女子懸賞文集、小詩國、幻影、孝女白菊、乙女の操、平家物語、女子消息文範、新撰歌與等御持の方は御讓り下さいまし又私の不用の書籍雜誌が澤山ありますから御交換下さるも宜しう御在ます (上毛多野郡小野村大字立石村七飯島さよ) ○妾の手許に乳姉妹全部、夏子、戀と愛、金色夜叉脚本、戀の一年有半、町醫者、婦人畫報、己が罪の歌、女學世界、婦人世界 等五十册ばかり不用の書ありますから姉上樣方に己が罪全部、女夫波 寃風戀風、少女の操、不如歸の歌等御持ちの方は何卒御交換をして下さいませんか若し御送り下さる時は一寸御通知を願ひます(羽前最上郡新庄町高山節子)○諸嬢の中にて本年一月よりの少女世界御所持の方は何卒御貸し下さいませんか御禮としては日 本盘太子殿下韓國御渡航記念繪葉書(スタンプ附)或は寫眞帳、風俗葉書かにて御送り申升但し交換の書なき節一冊の上は至急御返送申します (韓國江景韓川千里子○皆樣の內に一葉全集、まひる野、花守、みだれ髮、舞姫、金色夜叉の歌、女夫波の歌、女子書簡文(文の手ほどき等) 御不用てありましたら下記の最古しものと御交換又は御讓り下さい即ち出雙目の記、美文大觀、治療救急法、山陽遺稿、月と露、小説文範、俳句選、 古人發句集二册文士奇譚、 其他種々あります又御交換下さる御方には俳句集等必らず添へて差上ます (牛込原町一ノ四五宮澤方櫻井美園子) ○妾御本やお歌大好きなのよ皆樣の內にハイネの詩、鮫子、濱子、夏子、藤村操の歌、緣が淵、押とつみ、緣不緣、無花果、懺悔、黑潮、四季料理、新社會、婦人の雜誌英語の御本などお持の方はどうぞお送り遊して頂戴な妾おやさしい方なら男子の方にても御交際致します妾の寫眞もお送り申します (茨城縣眞壁郡關本町上丁實屋和いわ子) ○竹柏會發行の心の花及び明星何號にても宜し)中學文壇第七年第一號、秀才文壇第三卷第十七號お讓り下さるお方はありませんか男子のお方でもかまひませんお禮には地方名所エハガキか寫眞又は相當の書籍何てもお好のものを差上ます (千葉縣印旛郡中郷村富田秋山文吉方にて花野喜子) ○妾の手許に金色夜叉合本、新不如歸、緣不緣、孝女白菊の歌、新約全書、十七八、己が罪三册、少女の戀など種々ありますから皆樣の內で鮫子、夏子、青春、 沈うつ波や其の外の面白き書物と御交換下さい乾度御返事致します (羽前西置賜郡豐平村字中大谷部てい子)○皆さんの內に武藏野獨歩集

の不用なのがありますなら妾の青果集と交換して下さるかお讓り下さる事は出來ませんか（筑前左方外町一二二四島よろづ）

寫眞編物交換

○皆樣私の手許にレースひじつき、寫眞掛、栞 袋物類色々花瓶しきなどがあります其外以上御望みの御方は上等の美人風景繪葉書て申込下さい（但し未使用封入）必ず御送りします（北海道北見國稚内町聲問小學校内村上まさ）○自筆の繪をのぞみます私は編物も和歌も繪は勿論大好きですから皆樣交はつて下さい（日本橋區濱町二丁目十二 中村しん子）○御手製の編物御送り下さいな先着十名限り見飽き妾の寫眞に美麗な繪端書添へて返禮いたします（千葉縣長生郡二宮本郷村眞名三五五藤田靜子）○皆樣何卒妾に編物の御交換を願ひます（大阪西區薩摩堀下の橋南へ入中野琴子）○御懇み深き諸姉上樣よ寫眞の御交換を願ます妾の見苦しき寫眞へ美人或は名所エハガキを添へて差上ますよ（千葉縣長生郡關村關山中谷 高山嘉一方 北田かれ子）○誌友の諸姉樣肘突又は寫眞掛け惠んで頂戴屹度相當の御禮を致します（神戸市榮町六丁目三十二酒井如月）○其後は少し病氣の爲め大變御無沙汰致しました皆樣住所は元の通りです此後も御見捨て無くあみ物の交換も願ひ升（北海道石狩國夕張郡登川村字夕張炭山九十五號村木富子）○玉づさ毛糸レース糸の編物御送り下さいまし相當の品に玉章そへて必ず御禮いたします　新潟縣中蒲原郡茨曽根關根ひさ子）○寫眞編物の交換をお願ひ申ます（山城國相樂郡加茂村船屋楢原ならえ）○皆さん編物栞など換交して一層樂しく交際しましよう（埼玉縣與楢町區琴寄笠田まさ子）○皆さん栞やひじつきを御惠み下さいな御願ひよ御禮には妾の寫眞をそえて御返事致します（京都府船井郡八木驛西政藤美子）○御寫眞を御惠み下さる方は相當の御禮を差上ます決して只取は致しませんから私もみにくい寫眞御返事に應じて御笑覽に入るかもしれません（新潟縣南蒲原郡三條上町外山伊津子）○誌友の姉上樣よ妾に肘突刺寫眞掛栞等御送りの方へは吳の枝折吳繪葉書日本海第二回紀念繪葉書等と交換を願ます又上等刺寫眞掛刺か縮緬の肘突御送りの方へは軍艦安藝伊吹進水紀念繪葉書を其内最上等の分へは吳略圖添へます地圖は非賣品ですからめつたに得られないのです御交換を願ひます（廣島縣吳市二川町西本通二丁目百〇二碓井松枝）○誌友の姉上樣私の手元に不束な寫眞が八枚ありますから寫眞交換を願ひます先着五名には編物か繪葉書をそへて御送します（千葉縣長生郡新治村下吉井齋藤宗司方井の上津代子）○見苦しい私の寫眞二十五枚あります故何卒姉樣方御交換を願ます先着二十名には大巾の上等りボン一筋をそえます（千葉縣長生郡關村小母佐池上信子）○日本全國の誌友樣よどうぞ寫眞の御交換を願ひます御送り下さる方には私の手許にある櫻形縮緬と紋羽二重とて出來てゐて其眞中を肉色りボンで結んである紙入と私の寫眞とを直に御送り致しますからどなたでも早く送つて下さいな（靜岡縣駿東郡沼津町川廓山縣樹園）○諸姉樣の御手許に「忘れな草」の押花をお持ちの方がありますなら是非送つて下さいませんか其の他押花なら何でもいいですから(きれいに押したのを)花の名を書いて一つより以上送り下さいましな私の寫眞かけか栞しなり又は花びんしきて必ずお返しを致します西洋花を送られた方には他の品も添えて差し上げます（芝區三田小國町二ノ十一 田中淑子）○何卒玉章御寫眞や繪葉書の御交換末長くお願します御返禮には先着五名樣へ妾の寫眞を差上ます（神戸市三の宮私書函第百四十四號中尾うた子）○諸姉樣寫眞やあみ物の交換を願ひます私のも送ります私の處に寫眞器一組ありますのよそれて何とか取かえたくて居るのです（千葉縣印旛郡船穗村松崎鈴木合輔方鈴木錦花子）○私は一人も親友がありませんので誠に淋しくてなりませんが此のおろかな私と姉妹の契りを結んで永遠に御交際のお方と寫眞、繪葉書、玉章、編物の御交換を願ひます私も學校で教はつた編物を澤山持つて居りますから必ず神に誓つて御返しゝますよ（東京市神田區表神保町十番地ノ七三橋内山本八百子）○妾は本誌愛讀者の一人にて高等小學卒業ばかりの不束者なれど此後御寫眞交換いたしたし（大阪松島一丁目濱側丸山まつ方岡村登久子）○諸姉樣何卒編物しなり寫眞掛等御送り下さいな御返禮には女學世界婦人世界其の他相當の者て必ず御送り申します。（和歌山市本町三丁目吉川化粧品店内橋本眞子）○誌友の皆樣どうぞ寫眞編物玉章エハガキなどの御交換をお願ひ申します見ぐるしき妾の寫眞に相當のものを添へて必ず御返禮いたします（秋田縣北秋田郡大館町字片山齋藤登美子）○皆さん寫眞の交換をして下さいな妾も澤山持つて居

りますからキット御返しは致しますから、編物も菜りや寫眞掛等も下手な品ですけど澤山ありますから願つてよ（京都府船井郡八木驛西莫齋藤美子）〇編物御送り下さいまし繪葉書御圖畫を以て御禮致します（栗橋在伊坂衍宮光江）〇諸姉様方私は大變編物が好てありますのどうか皆様寫眞掛や菜の御交換をして下さいませそして御玉章も御送り下さい（若狹國大飯郡和田樹屋きく枝）〇皆様色々美しい押花下さいまして有がたう御座いましたそして誠に厚がましう御座いますがミットお持ちの方お送り下さいませんかお禮はきつと致します（大阪西區東青山町日高豐子）〇寫眞を御送り下された姉様へは先着者十六名へ左の書籍を直に發送致します文官試驗一册外三册會話辭典世界百傑傳官費貸費入學案内上等繪はがき十組をかたく上げます（遠江小笠郡倉眞村柳澤戸塚しげ子）〇皆様寫眞ても繪葉書ても御交換を願ます妾もきつと醜い姿を御目に掛けます（横須賀市楠浦三百二十五番地秋山鹿十郎方田口消志）〇姉様よ寫眞送りて岩手の山内に山川を共として淋しく日を送りて居りますから何卒エハがきや寫眞送りてなぐさめて下さい妾も見苦いのですけれども粗製の寫眞挾みを添へて御送り必ず致します（岩手縣一關町四ノ一一小野寺登子）〇春日影て小說交換を願ひておきましたがたくさん中込んでくださいまして誠にありがとうございましたどうか又寫眞を添へて申しこしください（山城國綴喜郡多賀村木原岩次郎様方村田まさ子）

讀者の交際（其二）

〇此分は新しく來た原稿です扱て一寸お斷りいたして置きますのは従來の繪葉書交換の欄ですが、獨立させるほどでもないと思ひまして此欄に合併しました、以後繪葉書交換を望まれる諸嬢は此欄て望むことにして下さい（記者）〇誌上の博學なる諸嬢様秋田舍者ては有ますが今回より愛讀者となりましたから末永く御交際下さいなれえほんとうに賴みますわさよなら（福岡縣鞍手郡木屋瀬町牛尾商店内牛尾愛子 明治貳拾七年生）〇皆さん私しは何にも知らん至つて無學な者てありますがどうかよしみにお交際ひの程を願ひます（紀伊田邊上屋敷町公園丁笠松喬美）〇私は片田舍の少女てすが諸嬢様よ御交際を願ひます（遠江榛原郡萩間村東萩間藤野淑子）〇誌友の皆々様是からよしなに御交際お願ひ申します御文や美しい繪端書の御交換は妾の切に御願ひ致す所てあります（日向國宮崎郡廣瀨村波邊みどり子）〇皆様妾は不用な雜誌澤山所持して居ります、何卒か附從や絹栞と交換して下さいな、御禮には上等繪はがきをそえて致します（上總刑部局區内渡邊汀子）〇これからは拙文も顧ず投書します。若し當選したら笑はないて見て頂戴な。尙は文通、繪はがき御交換も願ます（本郷區駒込追分町三十一大野舘新葵操子）〇何卒御寫眞其他諸雜誌の御交換を願ます（静岡縣榛原郡萩間村東萩間水野眞作方秀子）〇諸姉様方私昨年家に不幸が有て廣島の女學校をやめてこんな田舍て淋しく暮して居ますの可愛そうなと思ふて玉章や繪葉書の御交換をなして頂戴れ（石見國日原町大谷美枝）〇私は何にも申ませんか何卒繪葉書交換を遊ばして頂戴、上等繪に詩歌併を御記し遊ばしたら最もうれしうこそ思候かしこ（尾張中島郡起町中町二七商店方芳子）〇私は未だ一度も都を見た事がない山里に見苦い姿をして居る者てすがこれから賢明な諸姉様と玉章や美人及び名勝繪葉書の交換を願ひたいのてす（茨城縣新治郡土浦下高津新田藤原鶴子）〇女の身のあられもないと思召すかは存ぜれど妾は本誌愛讀者にて新派和歌の會を設けばやと存じますから御贊成の御方は何卒下名まて御知らせ下さい（遠江國小笠原郡加茂村長瀬菊笠みつ子）〇愛讀者になつた紀念の爲に姉様方の御手に成る美文、和歌、新體詩、作文、繪畫なににても白紙に書て送て下さいませんか妾は芙蓉集と名附て一册誌として大切に保存して居て御嫁に行くにも持て行きますわ皆様私の心を御察し下さつて澤山御惠送下さい（信濃松代寺町松浦熊太郎方松浦白蓮女）〇皆様不用の書籍、小說、雜誌あらばお送り下さい又お寫眞をお送り下さい共にお禮はたしかに致します（愛知知多大井山下金十郎方かず子）

剽竊詩文の注意

第四號の分　大坂、辻廣子。實用文三等「故郷の友に」は『女學世界』二卷十五號に同文あり

第二號の分　滋賀縣、婦哉子。滑稽談四等「人込み」は時事新報の『文藝週報』中に同作ありとのことにつき。何れも送賞せず。

今回の注意を與へられたる諸嬢は〇一女〇一雫子〇一女子〇東北の愛讀者〇[illegible]女。

文壇餘興 卓上談話（課題）

青葉涼しき初夏の木蔭に食卓を圍んで、談話會を催ふすのも女子文壇の餘興として面白からうと思ひます、此度は談話の題を凡そ左の五つに分けませう。

▲わが母　▲夢の話　▲わが見たる男子
▲若き經驗　▲繪葉書談

▲以上五つのうち何れてもよろし、五つとも皆作つて下さつても宜しいが採用するのは其中で最も好いのを一つだけてす▲わが母は謠讃の母君に就いての事なら何でもよろしい▲夢の話は乃ち夢の話てすが見たる男子は諸嬢の觀察を聞きたいので、諸嬢は何う云ふ風に男子を云ふものを觀察てゐられるか、それを書て下さい▲若き經驗は今迄の經驗した事の内て例へば利益になつた事とか失敗したことゝか何でもかまひません▲繪葉書談は矢張り繪葉書について面白いお話をして頂きたいのてす▲原稿は十六字詰て今回は十五行まで延びてもよろしい▲必ず「卓上談話」として題も別々に書添えることゝ▲賞品は例號の通り▲しめきり本月二十日

彙報

▲「文壇の花」別項廣告の通り本誌增刊文壇の花は本月十五日に盛装して出版します　如何に文壇の花の名の通り美しく淸らかな雜誌が出來るかは御覽の上で評判を願ひます。

○女學顧問　はいよ〳〵來月の紙上から發表します、なほ健康に就いて隨意の質問をして下さい。

○優等生の寫眞　全國各女學校の試驗に優等になつた諸嬢の寫眞は歡んで掲げますから送つて下さい。諸嬢のお知り合ひに優等した方があつたら其寫眞を御送り下さい、本社は其厚意を謝します。

○書き好い原稿紙　神田東松下町四七愛文堂發賣の投書用原稿紙は體裁紙質何れも好く筆でもペンでも書けるので至極調法てす。

○女子正則英語學校　神田錦町の全校は遷回校務を擴張して新入者を募集し日常必要の英語を授くる由。

○女子高等師範合格者　受驗者文科二百五十四名中廿八名、理科三百廿一名中廿五名、技藝科百二十名中廿六名、合計七百七十九名の中七十九名の合格者あり、四月六日體格檢査を行ふ筈。

懸賞呈品

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期增刊年四回二月、五月、八月、十一月の十五日發行）

（甲種）
▲壹等　金拾圓　貴金屬品
▲貳等　金參圓　呉服物
▲參等　金八拾錢　小間物
▲四等　金五拾錢　圖書切符
▲五等　金四拾錢　圖書切符

（乙種）
▲壹等　金五圓　絹張洋傘
▲貳等　金壹圓　帶止半襟
▲參等　金六拾錢　文房具
▲四等　金三拾錢　圖書切符
▲五等　金貳拾錢　圖書切符

▲各種の賞品は發表翌月上旬に贈呈する事

定價表

一冊（[illegible]）	前金拾錢	郵税共前金拾壹錢
八冊（半年分増刊共）	前金七拾六錢	同　前金八拾四錢
十二冊（一年分増刊除く）	前金壹圓八錢	同　前金壹圓貳拾錢
十六冊（一年分増刊共）	前金壹圓四拾四錢	同　前金壹圓六拾錢

振替貯金又は爲替に限る事

郵便の送金法

（郵便振替）女子文壇社の郵便振替貯金口座は第壹七貳九番です

○爲換料、通信料、書留料何もいらぬ安全の送金法（此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代で呉れます）◎此方法にて送金の節は登記料二錢御入れを乞ふ

明治四十一年三月廿九日印刷
明治四十一年四月一日發行

不許複製

定價金拾錢

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話〔本局六〇七番〕　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

▲來る十五日臨時増刊「文壇の花」は定價郵税とも例號の倍額（金二十錢郵税二錢）てす其お積て至急拂込を願升

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】